

上板井古墳群

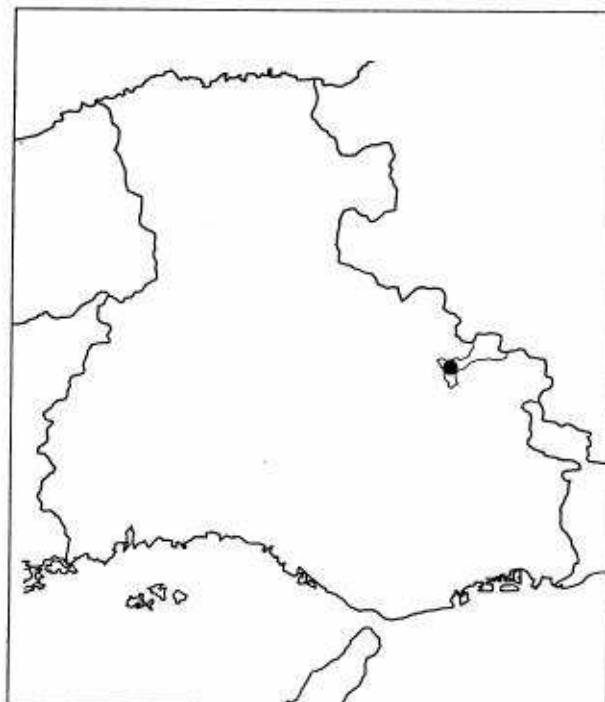
近畿自動車道舞鶴線関係
埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)

1986.3.

兵庫県教育委員会

上板井古墳群

近畿自動車道舞鶴線関係
埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)



1986.3.

兵庫県教育委員会



経塚出土遺物

例　　言

1. 本書は、近畿自動車道舞鶴線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和58年度に実施した兵庫県多紀郡西紀町上板井に所在する上板井古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が主体となり実施した。調査は池田正男、村上泰樹、市橋重喜が担当した。
3. 遺構の写真撮影は調査員が分担して行い、遺物の撮影については森 昭氏の手を頼した。
4. 本書に使用した図のうち、遺構については調査員と補助員が行い、遺物については和田早芳子、原香代美が行った。
5. 製図は、長谷川真、岸本一宏、山口慶一、和田、原が行った。
6. 金属製品の保存処理は、奈良国立文化財研究所の沢田正昭氏、肥塙隆康氏の御指導の下に加古千恵子が行った。
7. 奈良国立文化財研究所の肥塙氏には、出土鏡の科学的分析をお願いし玉稿をいただいた。
8. 本書の執筆は、第2章を池田、第3章第3節4、第4節4を岸本、第3章第5節3を水口富夫が行い、その他を市橋が行った。
9. 本書の編集は、岸本、和田の協力を得て市橋が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の体制	2
第2章 遺跡の環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の記録	10
第1節 遺跡の立地	10
第2節 調査の経過	12
1. 確認調査	12
2. 本調査	12
第3節 1号墳の調査	17
1. 墳丘	17
2. 外部施設	18
3. 内部主体	19
4. 出土遺物	28
第4節 2号墳の調査	31
1. 墳丘	31
2. 外部施設	31
3. 内部主体	32
4. 出土遺物	37
第5節 上板井経塚の調査	40
1. 位置と現状	40
2. 内部構造	40
3. 出土遺物	44

第6節 中世墓群の調査	53
1. 1号墓	53
2. 2号墓	54
3. 3号墓	55
4. 4号墓	57
5. 5号墓	57
6. 6号墓	57
7. 7号墓	58
8. 出土遺物	61
第4章 まとめ	63
付 載和鏡の材質	67

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	6
第2図 遺跡周辺地形図	11
第3図 古墳群地形測量図	13
第4図 1号墳墳丘測量図	15
第5図 1号墳掘削土層断面図	18
第6図 1号主体部実測図	20
第7図 2号主体部実測図	22
第8図 3号主体部実測図	24
第9図 4号主体部(箱式石棺)実測図	25
第10図 1号主体部出土遺物実測図	28
第11図 2号主体部出土遺物実測図	30
第12図 2号墳墳丘測量図	33
第13図 内部主体実測図	35
第14図 鏡と玉類出土状況図	36

第 15 図	内行花文鏡実測図	37
第 16 図	鉄刀子実測図	37
第 17 図	玉類実測図	39
第 18 図	経塚実測図	41
第 19 図	経塚出土遺物実測図（1）	45
第 20 図	経塚出土遺物実測図（2）	46
第 21 図	経塚出土遺物実測図（3）	47
第 22 図	経塚出土遺物実測図（4）	48
第 23 図	経塚出土錢貨拓影	49
第 24 図	経塚出土遺物実測図（5）	50
第 25 図	1号墓実測図	53
第 26 図	2号墓実測図	54
第 27 図	3号墓実測図	55
第 28 図	4号墓実測図	56
第 29 図	5号墓実測図	58
第 30 図	6号墓実測図	59
第 31 図	7号墓実測図	60
第 32 図	中世墓出土遺物実測図（1）	61
第 33 図	中世墓出土遺物実測図（2）	61
第 34 図	表土採集遺物実測図	62
第 35 図	螢光X線分析による錫／鉛相対含有量の比較	70

表 目 次

第 1 表	周辺遺跡地名表	7
第 2 表	ガラス小玉計測表	39
第 3 表	経塚出土鉄釘一覧表	50
第 4 表	和鏡螢光X線分析結果一覧表	69

図 版 目 次

卷頭図版	経塚出土遺物
カラー図版1	1. 古墳群遠景（航空撮影）一南より 2. 古墳群遠景（航空撮影）一東より
カラー図版2	1. 内行花文鏡（2号墳出土） 2. 玉類（2号墳出土）
カラー図版3	1. 経塚一北より 2. 山吹蝶鳥文鏡（経塚出土）
カラー図版4	1. 草花流水双鳥文鏡（経塚出土） 2. 網双鳥文鏡（経塚出土）
カラー図版5	青白磁合子（経塚出土）
図版1 X線撮影	1. 内行花文鏡（2号墳出土） 2. 山吹蝶鳥文鏡（経塚出土）
図版2 X線撮影	1. 草花流水双鳥文鏡（経塚出土） 2. 網双鳥文鏡（経塚出土）
図版3 遠 景	1. 古墳群遠景一南より 2. 古墳群遠景一東より
図版4 遠 望	1. 1号墳より宮田・大山を望む 2. 1号墳より栗柄峠を望む
図版5 遠望・全景	1. 1号墳より佐仲峠を望む 2. 古墳群全景（航空撮影）
図版6 1号墳	1. 1号墳全景（調査前）一北より 2. 1号墳全景（調査後）一北より
図版7 1号墳	1. 墳丘掘割土層断面一北西より 2. 同上部分葺石断面一北西より

- 図版 8 1号墳 1. 葦石—北西より
2. 葦石と掘割—北東より
- 図版 9 1号墳 1. 1号主体部—東より
2. 同上鉄器出土状況—北より
- 図版 10 1号墳 1. 2号主体部—北より
2. 同上鉄器出土状況—東より
- 図版 11 1号墳 1. 左 1号主体部墓壙—東より、右 2号主体部墓壙—北より
2. 左 3号主体部—東より、右 同墓壙—東より
- 図版 12 1号墳 1. 4号主体部検出状況—西より
2. 同上(蓋石一部除去後)—南より
- 図版 13 1号墳 1. 4号主体部—南より
2. 同上墓壙—南より
- 図版 14 2号墳 1. 2号墳全景(調査前)—南より
2. 2号墳全景(調査後)—南より
- 図版 15 2号墳 1. 主体部—南より
2. 同上内行花文鏡・玉類出土状況—東より
- 図版 16 2号墳 1. 主体部墓壙—南より
2. 同上部分拡大
- 図版 17 経塚 1. 経塚と3・4・5号中世墓—北東より
2. 経塚—南より
- 図版 18 経塚 1. 須恵質外筒・青白磁合子出土状況—北より
2. 和鏡・刀子出土状況—東より
- 図版 19 中世墓 1. 1号中世墓—東より
2. 2号中世墓—東より
- 図版 20 中世墓 1. 3号中世墓—北より
2. 5号中世墓—北より

- 図版 21 中世墓 1. 4号中世墓検出状況—北より
2. 4号中世墓—北より
- 図版 22 中世墓 1. 7号中世墓検出状況—北より
2. 7号中世墓—東より
- 図版 23 出土遺物 鉄器（1～3 1号墳1号主体部、4～8 1号墳2号主体部、9 2号墳主体部）
- 図版 24 出土遺物 1. 鉄斧（1号墳1号主体部）
2. 土器（49～52 表土、37 2号中世墓）
- 図版 25 出土遺物 12 須恵質外筒、15 須恵器小皿、17 鉄刀子、銭貨（経塚）
- 図版 26 出土遺物 経筒・表（経塚）
経筒・裏（経塚）
- 図版 27 出土遺物 1. 鉄釘（経塚）
2. 土師器壙（経塚）
- 図版 28 出土遺物 1. 鉄釘（7号中世墓）
2. 鉄釘・寛永通宝（48 5号中世墓、その他 表土）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

近畿自動車道舞鶴線は、中国縦貫自動車道吉川ジャンクションと京都府舞鶴インターチェンジを連結するべく、日本道路公団によって計画された高速自動車道である。兵庫県下では、美嚢郡吉川町から三田市、多紀郡丹南町・西紀町、氷上郡春日町・市島町を通過して北上し、京都府福知山市に抜ける。現在工事は順調に進み、昭和61年度末には丹南一舞鶴インターチェンジ間が部分開通する予定である。

昭和53年、近畿自動車道舞鶴線の建設計画がいよいよ具体化するに至り、日本道路公団より依頼を受けた兵庫県教育委員会では、同年度と56年度の2次にわたって埋蔵文化財分布調査を実施した。分布調査は路線予定地内及びその周辺に及び、数10ヶ所の包蔵地を認めることができた。これらの地点は順次確認調査を行い、その成果をもとに、丹南インターチェンジ以北の14ヶ所について、昭和60年度までに全面発掘調査を終了した。

本報告の上板井古墳群は、多紀郡西紀町上板井字興法寺・字沢浦の坪に所在し、2基の円墳で構成される古墳群である。近畿自動車道舞鶴線の建設工事に伴い、兵庫県教育委員会が昭和56年度に行った分布調査で発見し、57年度の確認調査を経て58年度に本調査を実施したものである。その経緯は次のとおりである。

兵庫県教育委員会では分布調査の際、通称興法寺山の尾根上において遺跡台帳に記載されていない1基の古墳を発見し、№36地点上板井古墳と仮称することにした。その後昭和57年度に至り、古墳の規模、性格等を明らかにするべく、4日間にわたる確認調査を行った。

確認調査は、兵庫県教育委員会の池田正男と村上泰樹の両名が担当し、昭和57年12月21日～24日まで実施した。その結果、古墳は直径約14mの円墳で墳丘に葺石をもつこと、埋葬施設の墓壙と思われる落ち込みが見られること、さらに墳丘上に土壌が存在することなどを確認し、昭和58年度の本調査を待つことになった。

本調査は兵庫県教育委員会の池田正男と市橋重喜が担当し、昭和58年11月～59年3月まで約5ヶ月間実施した。その間、昭和59年1月末から3月中旬にかけて記録的な豪雪に見舞われ、作業を一時中断せざるを得ない状況になるなど、調査は困難を極めたが、作業員の方々をはじめ多くの人々の協力を得て無事調査を終了することができた。なお調査の過程で、上板井古墳から約55m離れた尾根上にもう1基の円墳が存在することを新たに確認した。その結果、2基からなる古墳群であることが明らかとなったので、従来上板井古墳としていたものを1号墳、新発見のものを2号墳と呼称することにした。

第2節 調査の体制

発掘調査とその後の整理作業は、ともに日本道路公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が主体となって実施した。発掘調査は昭和57・58年度にわたって行い、整理作業は兵庫県埋蔵文化財調査事務所において昭和60年度に行った。なおこの間、作業を進めるにあたって地元を始め多くの方々の参加、協力をいただいた。

発掘調査と整理作業の体制は次のとおりである。

確認調査 一昭和57年度一

社会教育・文化財課	課長	藤本繁
	参事	吉村芳郎
	副課長	道畠實
	課長補佐	池田義雄
	埋蔵文化財係長	大村敬通
	主任	西口和彦
		小川良太
	技術職員	水口富夫
	課長補佐兼管理係長	福永慶造
	課長補佐	堀洋
	事務職員	杉本恵子
	調査員	池田正男
		村上泰樹

本調査 一昭和58年度一

社会教育・文化財課	課長	西沢良之
	参事	大西章夫
	副課長	森崎理一
	課長補佐	池田義雄
	埋蔵文化財調査係長	樋本誠一
	技術職員	大平茂
	課長補佐兼管理係長	福永慶造
	主任	八家均
	事務職員	杉本恵子

調査員 池田正男
市橋重喜

調査補助員 石本晶義、山口慶一、難波達也、宮脇典行、西村守、奥野和宏
赤井利也、池田直美、佐藤美和、泉本さとみ、田中正美、勝川清隆
清田保幸、清田真由美、酒井雅美、野々村康、村上穰司、畠智幸
畠昭、東浦竜也、杉野和則、大路正浩、谷岡司郎、河南秀明
地元参加者 谷後嘉斎、西田強、中曾忠治、石川捨三郎、片山夏雄、明山勝
明山忠夫、高見茂雄、高見清二、谷後忠二、片山三農、溝端富子
若狭松子、片山まさゑ、藤本恵美子、青木節子、河南和子、和田頼子
近成みさを、赤井とし子、畠和子、谷後幸子、近成きよ子、溝端みち子
水畠ふみ子、酒井笑子、柳沢重子、石川つた子
山田ますえ、中曾みのり、飯田あゆみ、水畠美幸、西尾美幸、小西久美子
利根真由美、高橋としあ、足立佳代子、川崎てる子
調査協力者 芦田茂、鶴尾隆円（西紀・丹南町教育委員会）
山本明彦（篠山町教育委員会）、高島信之（三田市教育委員会）
資藤礼市郎（丹南町文化財審議委員）、井尻弥三雄、北川三代子（西紀町郷土史研究会）、篠山郷土史研究会、西紀町、西紀中学校、西紀北小学校、
水口富夫、岸本一宏（兵庫県教育委員会）

整理作業 一昭和60年度一

社会教育・文化財課 課長 北村幸久
参事 森崎理一
副課長 黒田賢一郎
課長補佐 和田富男
埋蔵文化財調査係長 横本誠一
技術職員 森内秀造
 加古千恵子
 渡辺昇
管理係長 小西清
主査 八家均
 坂本豊明
事務職員 松本豊彦
調査員 池田正男（播磨町郷土資料館）
 市橋重喜

整理補助員 和田早芳子、原香代美、山口慶一、井川佳子、木村淑子
整理協力者 水口富夫（兵庫県立歴史博物館）
森内秀造、加古千恵子、長谷川真、岸本一宏（兵庫県教育委員会）
武藤 誠（黒川古文化研究所）、木村重圭（兵庫県立歴史博物館）、前田洋子（大阪市立博物館）、森田 勉（九州歴史資料館）、秋枝 芳（姫路市教育委員会）の各氏には、遺物について多くの御指導、御助言をいただいた。

沢田正昭、肥塚隆康（奈良国立文化財研究所）の両氏には金属製品の分析をお願いし、保存処理については、両氏の御指導の下に兵庫県教育委員会の加古千恵子が行った。

最後に、発掘調査及び整理作業の委託者である日本道路公団大阪建設局三田工事事務所には、全期間を通じて種々便宜を計っていただき、ひとかたならぬお世話になった。記して深謝します。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

篠山盆地は古生層の丹波層群が分布する丹波山地内の構造盆地といわれ、周囲を三嶽、三尾山、三国岳、弥十郎岳、白髪岳、金山、黒頭峰、西ヶ嶽の海拔500m以上の山々で囲まれている。盆地の外へ出るには南を除いて三方に位置する鐘ヶ坂峠、栗柄峠、天引峠等の峠を下って他の市町へ向うという地理的位置にある。平地は平均海拔約210mを測り、東から西へゆるやかに傾斜している。

盆地の中央を東西に篠山川が西流し、丹南町小瀧から国鉄福知山線に沿って氷上郡山南町井原橋付近で氷上郡内を流れてきた佐治川と合流し加古川となり、瀬戸内海へと注いでいる。

上板井古墳群（2基）は篠山盆地の北西隅に位置し、行政的には多紀郡西紀町上板井、通称興法寺山尾根上に立地する。

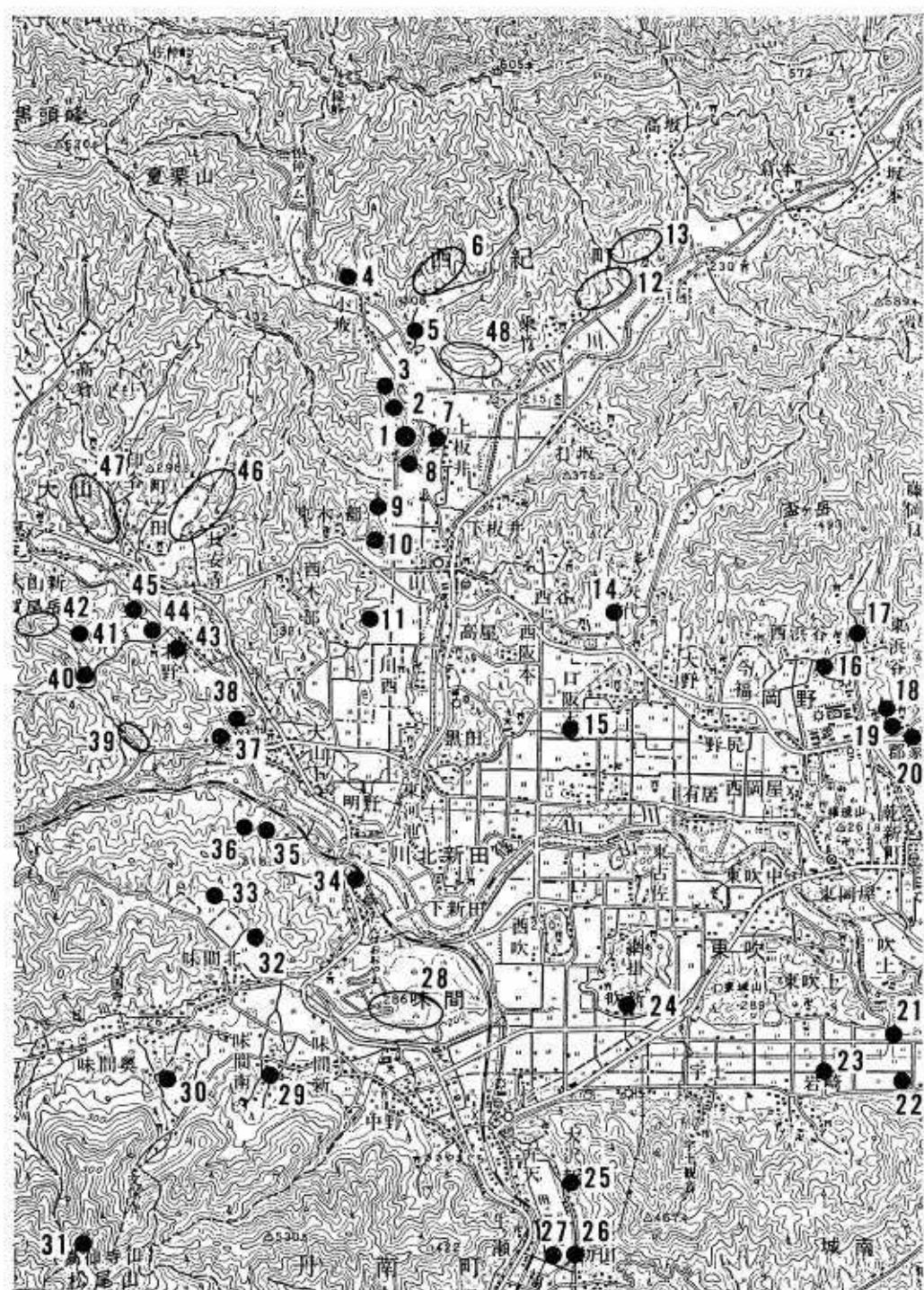
この興法寺山は氷上郡と多紀郡との境界に位置する三尾山、黒頭峰、夏栗山の山塊から派生する舌状の尾根で、海拔約290mを測る。この尾根からは非常に眺望がよく、西紀町の全域と倉本、垣屋、乗竹、栗柄を経て氷上郡春日町、あるいは京都府へと通じる旧街道を東に望むことができる。

また、海拔約270mの栗柄では、瀬戸内海に注ぐ加古川支流の宮田川と、日本海へ注ぐ由良川支流の竹田川とが谷中分水界をつくっている。この栗柄に源を発した宮田川は谷を縫って流れ、河岸段丘を形成しつつ、下板井、宮田、東河地を経て、小瀧で篠山川と合流している。

第2節 歴史的環境

篠山盆地における近年の開発事業は、昭和40年代に始まる農業基盤整備事業、昭和57年度以降、近畿自動車道舞鶴線（略称近舞線）等の大規模な事業が実施されてきた。それに伴い発掘調査は増加の一途をたどると共に、今まで篠山盆地の古代史を語るに際し、『前方後円墳、雲部車塚が突如として出現する』という表現でもってあらわされてきた歴史は、発掘という科学的メスにより得た豊富な資料を基礎として論じられるようになった。

さて、今回報告する上板井古墳群は2基の古墳と鎌倉時代の経塚、室町時代の中世墓群を発掘したのであるが、この遺跡の内容、性格等については後章で詳述するよう篠山盆地において、今まで調査例のない貴重な資料を得たと思われる。



第1図 周辺遺跡分布図（国土地理院発行 5万分の1「猿山」）

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	上板井古墳群	17	東浜谷遺跡	33	里見山1号墳
2	沢の浦坪古墳群	18	遊谷1号墳	34	諏訪山古墳
3	箱塚古墳群	19	居籠塚古墳(前方後円墳)	35	桂谷古墳
4	小坂古墳群	20	新宮古墳	36	桂谷遺跡
5	東山古墳	21	谷山遺跡	37	出合遺跡
6	四王寺谷古墳群	22	山ノ越遺跡	38	大山城跡
7	板井城跡	23	岩崎四ノ坪遺跡	39	山田古墳群
8	板井・寺ヶ谷遺跡	24	綱掛城跡	40	小丸山古墳群
9	多々奴比神社	25	庄塚古墳群	41	半鐘塚古墳群
10	内堀山城跡	26	稻角遺跡	42	波賀尾古墳群
11	西木之部遺跡	27	初田館跡	43	金倉山遺跡
12	杭谷古墳群	28	西山古墳群	44	三ツ塚1号墳
13	安養寺古墳群	29	味間南遺跡	45	三駁迦山1号墳
14	岡野北遺跡	30	諏訪腰絆塚	46	峠尻古墳群
15	口阪本遺跡	31	高仙寺城跡	47	名残群集墳
16	八幡山古墳	32	三駁迦山1号墳	48	乗竹古墳群

第1表 周辺遺跡地名表

そこで、小坂の谷間に点在する古墳群、盆地内における経塚とその社会等々をとりあげ、上板井古墳群をとりまく歴史的環境に触れておきたい。

上板井古墳群の北麓を流れる小坂川によって形成された谷間の地小坂は、西紀町内でも古墳の谷と名づけてもよいほど古墳が群在している。上板井古墳群に近いところから、沢の浦坪古墳群（2基）、箱塚古墳群（5基）、小坂古墳群（4基、佐仲古墳含）、四王寺谷古墳群（4基、東山古墳含）、乗竹古墳群（5基以上）の6群、20基以上の古墳が群在している。

沢の浦坪古墳群（円墳2基）は昭和58年度に調査が行われた横穴式石室を主体部とする古墳群である。上板井古墳群から北西へ約100m、比高差60m程の急斜面上に位置している。

1号墳は径約10mの円墳で、外部施設は封土流失のため不明である。内部主体は無袖式の横穴式石室（全長5.7m）を有し、出土遺物は須恵器、土師器、鉄鎌、刀子等がある。

2号墳は径約9mの円墳で、外部施設は1号墳同様流失しているため不明、内部主体は無袖式の横穴式石室（全長5.7m）を有し、埋葬面は3面を確認、最終面には砲弾形陶棺を埋葬していた。出土遺物としては、須恵器、土師器、鉄鎌、大刀、刀装具、特に頭椎大刀の刀装具と

して銀象嵌を施した鍔等が出土した。また、陶棺内には小児人骨が検出された。

箱塚古墳群（5基）^{註8}は沢の浦坪古墳群から西へ200mの緩傾斜面、谷間に立地する横穴式石室を内部主体とする円墳によって構成されている。現存する古墳4基、その内3、4、5号墳が昭和60年度近舞線建設のため発掘調査が行われた。

3、5号墳は後世の土取り等により残存状況はきわめて悪く、残り状態のよい4号墳は径約20mの円墳で、墳丘には円筒埴輪が樹立していた。石室は両袖式の横穴式石室（全長9.0m）を有し、床面には敷石を貼り、玄門には権石を設け2回の追葬を行っていた。出土遺物は脚付き装飾壺をはじめ多数の須恵器、折り曲げた大刀、鉄鏃などが出土した。

次に、小坂川を渡り南麓に位置する古墳群として以下の3群がある。

四王寺谷古墳群^{註9}は東山古墳を含む4基で構成され、南に開口する径約10m前後の円墳であるが、無袖式の横穴式石室のみで築かれている点が特徴である。対面する沢の浦坪古墳群と共通する点は興味深い。各古墳の石室内には流入土が堆積して詳細は不明である。この中で特に、東山古墳は墳丘に葺石を貼り、全長10.6mの石室を有するなど注目すべきものと思われる。

乗竹古墳群^{註10}は5基以上の円墳で構成された横穴式石室と木棺直葬を内部主体とする古墳群であるが、表面観察のみでその詳細については不明な点が多い。

谷の奥に位置する小坂古墳群^{註11}は径約10mの円墳、佐仲古墳と3基の無袖式横穴式石室を有する小坂群集墳とで構成されている。この群集墳の石室は長さ4m、幅0.9mといった極めて小さなもので、石室の変遷の中で最終末期に位置するものかと推測されるものである。

尾根上に位置し木棺を直葬する上板井古墳群、山麓に築かれた埴輪をもつ箱塚古墳群、無袖の横穴式石室を有する沢の浦坪古墳群、四王寺谷古墳群、矮小化された横穴式石室をもつ小坂古墳群など、古墳群の変遷、群単位で構成される単位集団と墓地との関係、また古墳群内部における優劣差など、古墳の裏面に表出される社会構造の追究こそ今後の課題と思われる。

経塚および中世墓について述べていきたい。経塚は弥勒信仰に伴い平安時代後期以降、全国的な規模で展開される末法思想により経塚が造営されたのであるが、郡内においては篠山町平石山経塚、同大寧寺西山尾根^{註12}（経筒のみ出土）、丹南町西山北経塚、同源訪腰経塚、今田町小野原^{註13}経塚の5ヶ所を数える。

篠山町の平石山経塚は大正9年に調査が行われ、径2.7mの盛土内に縦2.4m、横1.6m、深さ0.6mの小石室が築かれ、壇の中に陶製経筒を納めており、草花双鳥鏡、小皿が共伴していた。この経塚と大寧寺西山尾根出土例とは、郡内最高峰の三嶽山の山麓に位置し、この山はかつて奈良時代、役小角によって開基された山岳信仰、修驗道場の場として15世紀末まで栄え、山中には藏王堂、三嶽寺等の寺跡がある。

丹南町西山北経塚は、昭和46年、西山北古墳の調査の際出土したものである。木棺直葬を内部主体とする古墳上に石で囲む小石室を築き、内部に埴製経筒（2個）を埋納したもので、他

に北宋銭・瓦器皿が共伴し、鎌倉時代初期～中期に所属する。

同町の諏訪腰経塚は、かって隆盛をきわめ、21坊を数えたといわれる文保寺の前面にひろがる小高い丘に立地する。円形の盛土の上面には長さ7m、幅1.1mの範囲に石が並び、経塚とされている。鉄製經筒断片、甕等が諏訪神社に保管されているとの事以外、不明な点が多い。

今田町小野原経塚は蛭の宮神社に近く、青銅製經筒が出土しているが詳細は不明である。

以上、経塚とその背景である寺院跡との関係を少し触れてみた。上板井経塚は、前述の三嶽三山の一つ西ヶ嶽を東に望む好所にあり、山岳信仰と深くかかわりをもつものであろうか。

また、この興法寺山の南麓には法道仙人（白幡年間）を開基とする興法寺（弘法寺）があり、^{註12}昭和59年度、興法寺に面する板井・寺ヶ谷遺跡の調査において、6基の中世墓や井戸を検出し中世墓の中には中国製の陶磁器などを副葬するものもあった。

平安、鎌倉時代へと時代が下るなかで丹南町大山地区に東寺領大山荘が営まれ、平安時代以後、関東から承久の乱（1221年）の勲功によって中沢基政が大山荘の地頭職を拝領した。その後、基政の子中沢基員が木の伐採や用水をめぐって宮田荘との間で争いを起し、殺人事件さえもおこっている。^{註13}こうした中世の荘園世界の中で展開される歴史の中に経塚や中世墓の意味を探っていくかねばならない。

註1 「自然編」『兵庫探検』1974年 神戸新聞社

註2 昭和58年度 兵庫県教育委員会が発掘調査を実施 「沢の浦坪古墳群」「兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度」 1986年 兵庫県教育委員会

註3 昭和60年 兵庫県教育委員会が発掘調査を実施 「箱塚古墳群現地説明会資料」 1985年 兵庫県教育委員会

註4 「兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表」第6集 1970年 兵庫県教育委員会

註5 池田正男、芦田茂氏の踏査により発見

註6 註4と同じ

註7 奥田栄々奈「多紀郷土史考」上巻 1958年

註8 西藏栄志氏採集

註9 達藤順昭、駒井功「西山北古墳調査報告書」1972年 多紀郡教育事務組合教育委員会

註10 註4と同じ

註11 註4と同じ

註12 福原落次郎「多紀郷土史話」1934年

註13 昭和58、59年度にかけて兵庫県教育委員会が発掘調査を実施 「板井・寺ヶ谷遺跡現地説明会資料」1・2 1984年 兵庫県教育委員会

註14 「大山村史」本編 1964年

註15 建治の殺人事件と称される。建治2年（1276）12月、大山荘の地頭、中沢基員率いる人々が宮田荘木之部村に乱入して、往古の木を伐採しようとしたところ、宮田荘預所の筑前太郎判官入道見寂の代官、西善法師及びその従者との間で喧嘩が発生し、代官西善法師主従が殺された。

第3章 調査の記録

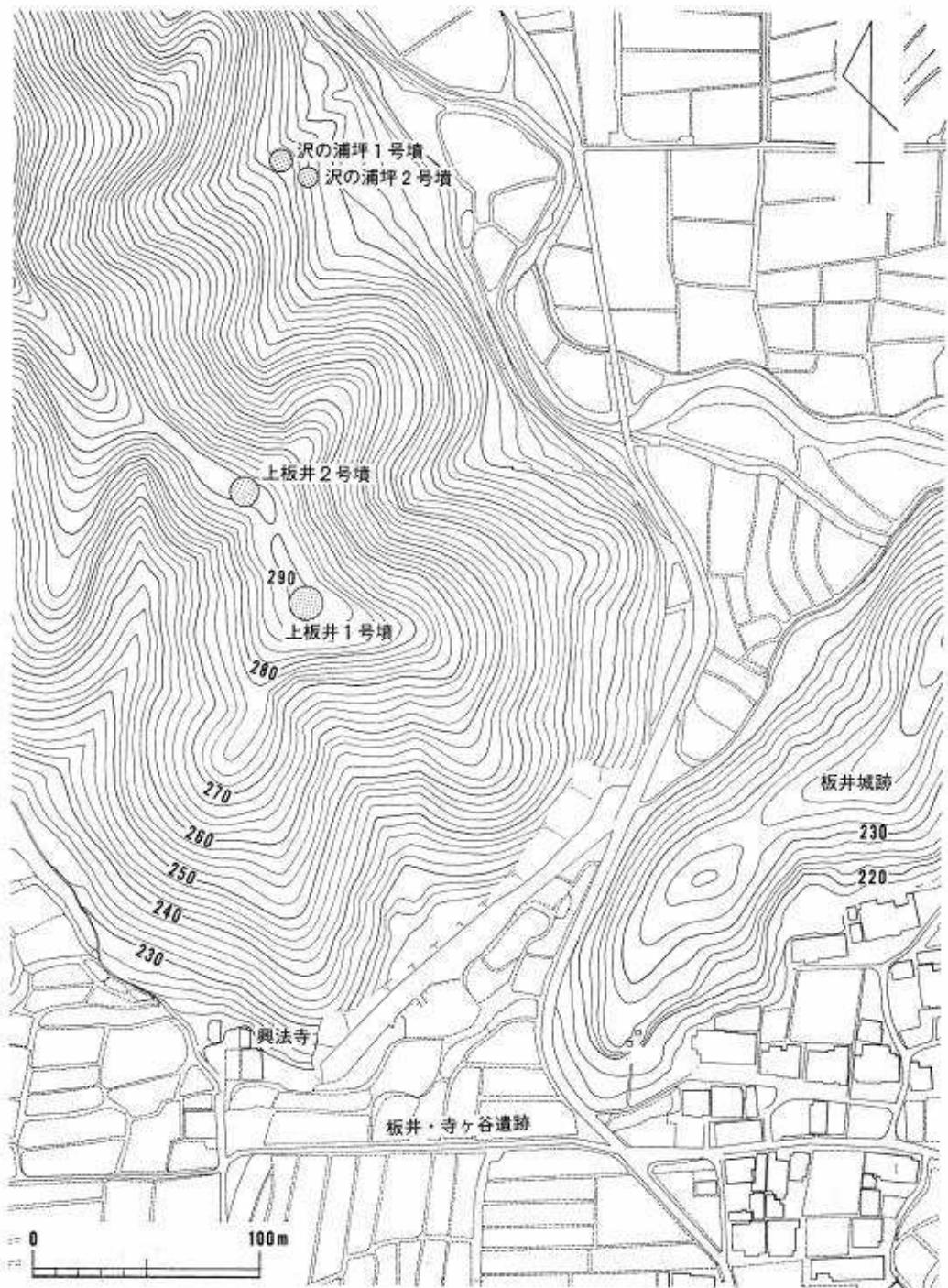
第1節 遺跡の立地

上板井古墳群は、篠山盆地の北側に横たわる多紀連山の1つの黒頭峰（標高620.6m）から南東に派生してきた尾根上に立地する。1号墳は尾根の先端部を占め、2号墳は1号墳から北西へ約55m離れた尾根稜線上に位置している。発掘調査前の墳頂部の標高は、それぞれ1号墳が約291m、2号墳が約292m、1号墳と2号墳間の尾根鞍部が約290mを測り、2基の古墳はほとんど同一の標高に築かれている。

2基の古墳が築かれている地形を詳細に観察してみると、尾根は北西方面からゆるやかに下降してきて2号墳に至る。尾根はそこで1号墳の方向へのびる主尾根と東へ派生する支尾根とに分岐するが、2号墳はちょうどその分岐点に築造されている。2号墳から1号墳へかけては尾根はほぼ水平で、その間の尾根上面は幅約6mの平坦部を持つ。尾根の東側斜面は山麓を流れる小坂川に向って急傾斜で下降する。その斜面には、本調査を始める直前の昭和58年9月に丹波地方を襲った大豪雨によって引き起された土砂崩れの2条の爪跡が無残な姿をさらしていた。尾根西側斜面は、東側と異なり比較的ゆるやかで、数本の支尾根を派生させつつ山麓に至る。尾根の末端部は1号墳から急傾斜で落ち、小さな峠を挟んで独立小丘陵と対峙している。その小丘陵の最高所は、標高246m、1号墳墳頂部との比高差は約45mである。また古墳群と山麓水田面との比高差は、峠の北側と南側でそれぞれ約75mを測る。

上板井古墳群が立地する尾根の山麓には、古墳時代～中世にかけての遺跡が点々と見つかっている。北麓には沢の浦坪古墳群や箱塚古墳群といった後期古墳群、南麓には中世から続く興法寺や平安～鎌倉時代にかけての集落遺跡である板井・寺ヶ谷遺跡が存在している。また尾根末端の独立小丘陵には中世山城である板井城が築かれている。上板井古墳群はこれらの遺跡を見下ろせる場所にある。

1号墳の墳頂部に立ち南を望むと、西紀町宮田から丹南町大山にかけての平野を一望の下に見わたせる。中世で言えば近衛家領宮田荘の主要地域を眼下に収めた場所である。しかし篠山盆地中心部は、下板井から川辺にかけての低丘陵にさえぎられ、視野に入らない。目を東に転じると、栗柄峠を経て丹後へ至る道、また北には佐仲峠を越えて氷上郡春日町へ抜ける狭い谷筋が望める。このように1号墳は非常に眺望の良好な場所を選地しているわけである。この立地条件は1号墳墳丘上に築かれた経塚と中世墓群の占地とも共通することである。



第2図 遺跡周辺地形図

第2節 調査の経過

1. 確認調査

確認調査は、前述したとおり昭和57年12月21日～24日まで4日間実施した。調査は、まず1号墳墳丘上の雑木を伐採することから始めたが、それと併行して縮尺100分の1で、25cmの等高線による調査前の地形測量を行った。次に幅1mのトレンチを墳丘に十字に設定して遺構の検出と土層断面の観察を行った。

トレンチは、尾根の方向に沿った南北トレンチとそれに直交する東西トレンチを設け、墳頂部を中心としてそれぞれ北、東、南、西トレンチと呼称した（第3図）。北トレンチでは墳丘を区画する掘割と、掘割底面から墳丘にかけて葺石を検出した。掘割は、幅約1.6m、深さ約30cmを測り、断面が浅い皿状を呈するもので、尾根筋に直交して設けられていると考えられた。東トレンチにおいても墳裾部分に幅約1mの葺石を確かめたが、一方南と西トレンチでは葺石は認められなかった。このため、葺石は墳丘の北と東側では墳裾に沿ってめぐっているものの、南と西側では流失してしまっているものと思われた。

墳形については、各トレンチにおける葺石基底ライン及び地山整形の傾斜変換点を考え合せ直径約14mの円墳であろうと推定した。また西トレンチを精査した結果、主体部の墓壙と思われる落ち込みが認められた。その落ち込みは墳丘西辺寄りに偏して位置していたので、墳丘上にさらに数基の埋葬が行われている可能性があることを予想した。

さらに南トレンチの墳頂部平坦面で、壙内に角礫を配置し、炭、灰層が充満した土壙を1基検出した。発掘はしなかったがその規模、形状等から古墳に後出する時期のものと思われた。

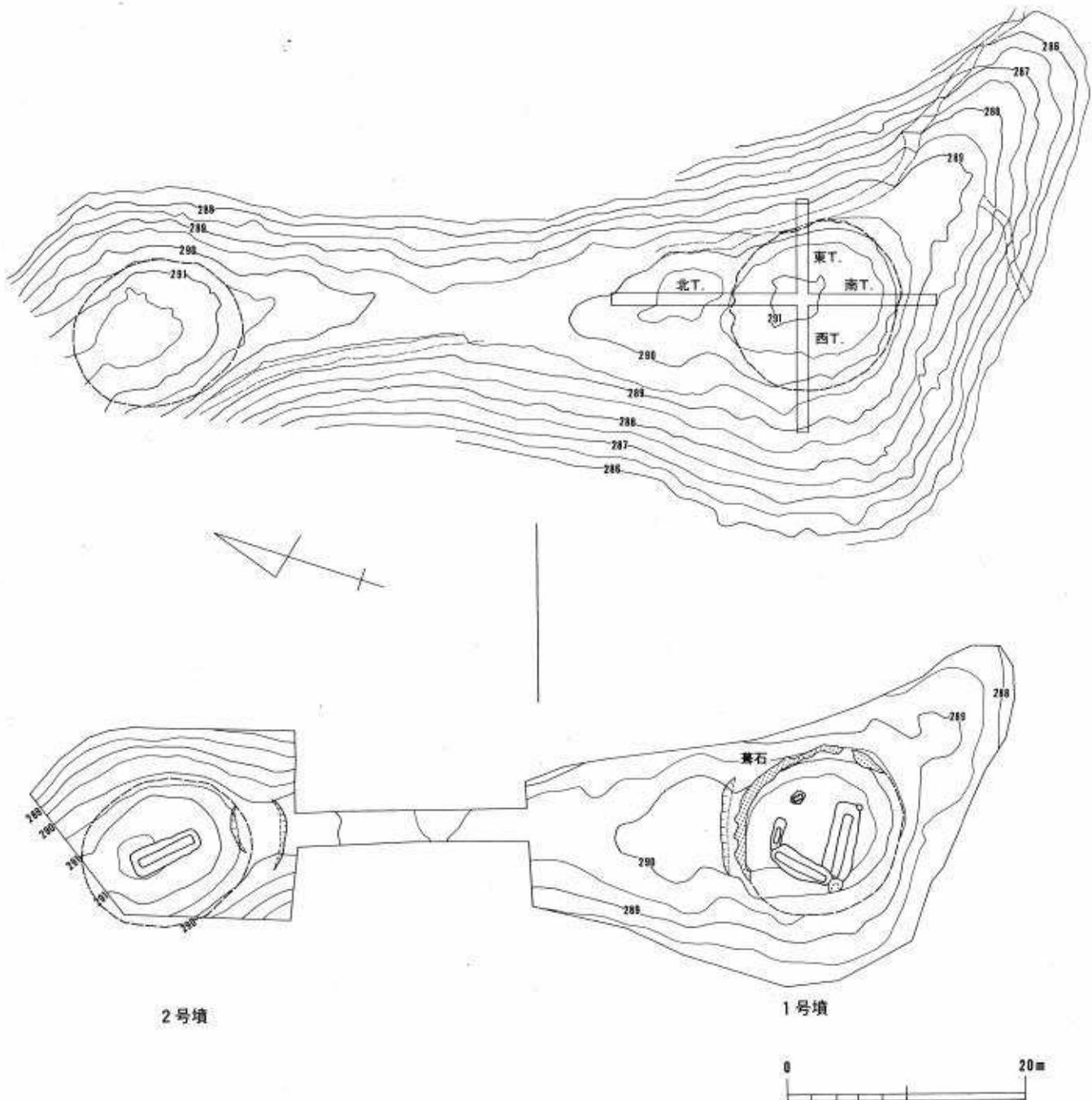
以上の確認調査を行った結果、1号墳は直径約14mの円墳で墳丘に葺石をもつこと、主体部らしい落ち込みが認められること、墳丘上に土壙が存在することなどが明らかとなった。

2. 本調査

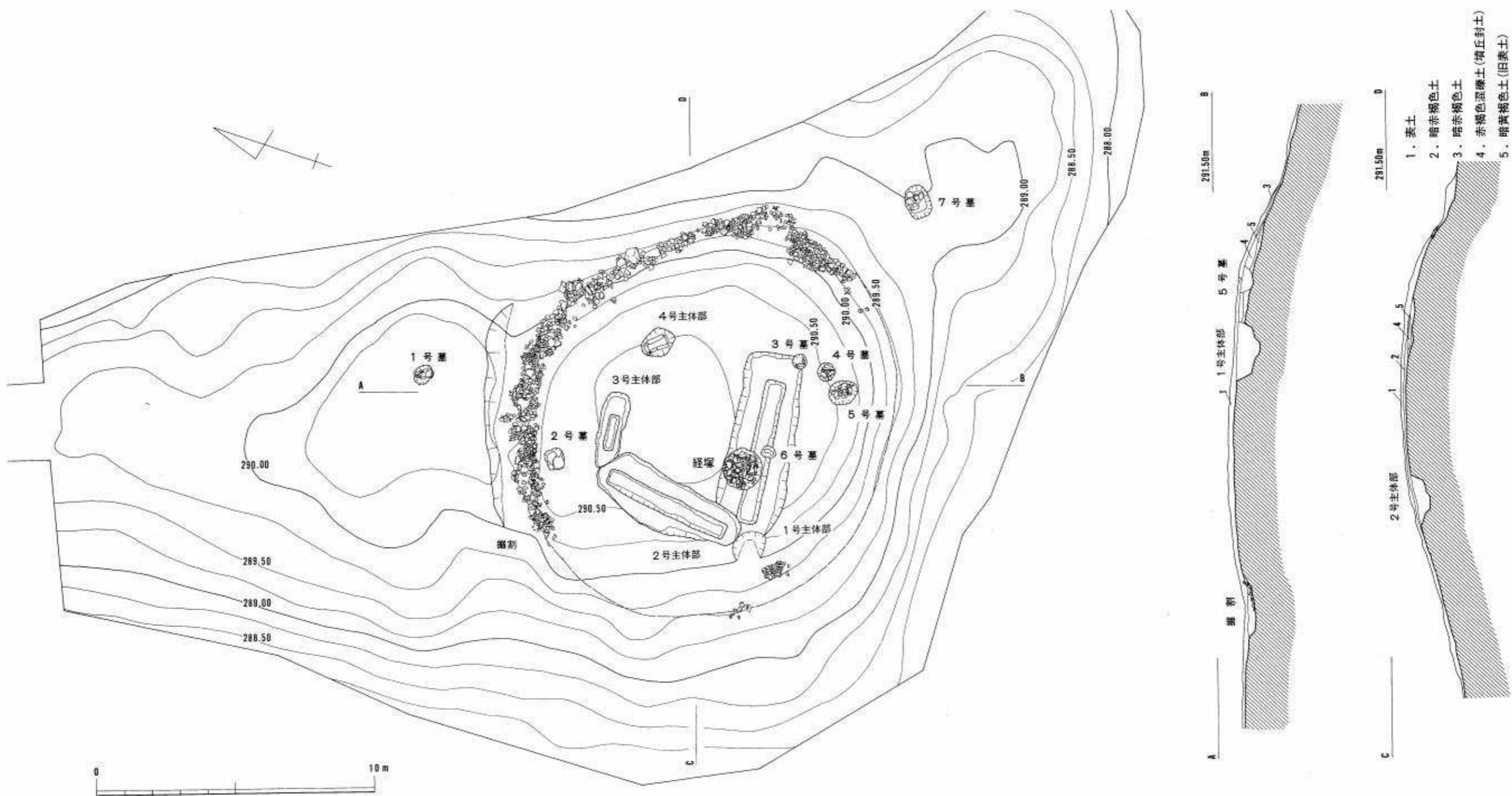
1号墳の発掘調査は、確認調査の成果に基づき、トレンチの壁面沿いに土層観察用の畦を残して表土を除去することから始めた。表土除去後、墳丘上面を精査して主体部と葺石を検出することに努めたが、主体部の検出作業は、墓壙埋土に地山を掘削した土が用いられていたため、非常に墳丘との見分けがつきにくく難行した。主体部は墳丘上に4基を検出した。

また墳丘上面を精査している段階で、墳丘上に経塚1基と確認調査で分かっていた1基を含め、中世墓5基（2～6号墓）が営まれていることを認めたので、これらの遺構も併せて調査の対象とした。

2号墳は、先述したとおり本調査に入った際に新たに発見した古墳である。これについても



第3図 古墳群地形測量図（上一調査前、下一調査後）



第4図 1号墳墳丘測量図

発掘調査を行うこととしたが、墳丘の北側一部は高速道路工事予定地外となり、未買収地であるため、調査の対象から除外せざるを得なかった。調査は、まず1号墳同様、墳丘上に土層観察用の畦を十字に残し、表土を除去して主体部の検出を行った。主体部は、墳丘中央部に組合式木棺を1基検出した。また墳丘南側には墳丘を区画する掘割が認められた。

また1号墳墳丘上に経塚と中世墓群を検出したことにより、さらに遺構の存在面積が広がることが予想できたため、1号墳の調査面積を拡張し、さらに1号墳と2号墳の間の尾根鞍部に幅2m、長さ19mのトレンチを設定した。その結果、1号墳墳裾から南東に約3.1m離れた尾根上に1基(7号墓)、また北側墳裾から約3.2m 2号墳寄りの平坦面に1基(1号墓)の中世墓を検出した。しかし1・2号墳間の鞍部に設けたトレンチでは何の遺構も認められなかった。

第3節 1号墳の調査

1. 墳丘

1号墳は、南東にのびる尾根先端部に位置しており、発掘調査前においても明らかに墳丘状の高まりが認められ、一見して古墳とわかる状態であった。墳丘上には、厚さ約20cmの表土が堆積していたが、それを除去するとすぐに葺石と主体部が検出された。

墳丘は、尾根を削り出してその形を整えている。すなわち、尾根基部側にあたる北側では、掘割を切って墳丘を区画しており、また南及び東側では、斜面を削り込んで急勾配の墳丘を作り出している。しかし、西側においてはゆるやかな斜面となっており、地山整形ラインは確認できなかった。これは、おそらく墳丘がかなり流失してしまったためと思われる。

墳丘の北側と東側には葺石が施されていた。葺石の基底部と地山整形ラインはほぼ一致しており、墳裾とみなすことができる。しかし、西側については原形を損っているため、墳裾は明確ではない。他の三方の墳裾ラインをたどると、墳形は南北約14.5m、東西約13.5mの尾根方向に沿ったやや細長い円形となる。墳形が細長くなるのは、古墳を築造するにあたって、尾根上平坦部があまり広くない地形条件に制約されたためであろう。

墳丘封土は、墳丘南側と東側の狭い範囲にのみ認めることができ、他の部分ではおそらく流失しているものと思われた。最も厚く残っている墳頂部側で厚さ15cmを測る。封土は地山の岩盤を破碎した小礫を多く含有する赤褐色土で、地山を整形した際に得られた土を盛り上げたものであろう。封土の下には暗黄褐色土の旧表土が確認できた。旧表土は厚さ約15cmで、墳頂部側ではゆるやかな高まりを見せており、墳裾側では地山整形の作業で削除されたものと思われ、検出できなかった。

墳頂部の調査後の標高は290.9m、また尾根中央部における掘割底面のそれは290.1mで、その比高差0.8mを測る。また、南と東側の墳裾から墳頂部へかけての高さは、それぞれ約1.8mと1.5mである。しかし、築造当時の1号墳がどれほどの墳丘高をもっていたかは、封土がか

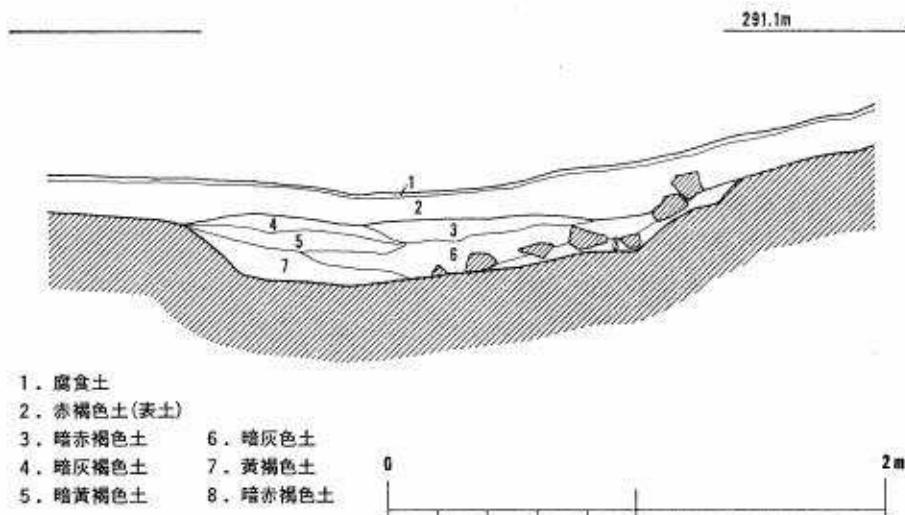
なり流失してしまっているため明らかでない。ただ北側の葺石の傾斜角度がゆるやかであることからみて、現存状態よりさほど高くなかったと思われる。なお、墳丘の南と東側では地山を削り込んで整形しているので、墳丘斜面が急傾斜となっている。したがって、築造当初、この方向からの見かけの高さはかなりあったと推定できる。

2. 外部施設

1号墳の外部施設には、墳丘を区画する掘割と、墳丘をめぐる葺石がある。

掘割は、先述したとおり尾根の方向に直交して尾根を切断しており、墳形に沿ってわずかに弧状を描くように掘られている。尾根中央部分で掘割の幅は約2.2m、深さは北側で約20cm、南側で約40cmを測り、断面が浅い皿状を呈する。掘割の壁面は北側では急角度で切り込んでいるが、南側ではゆるやかである。また、南側壁面はそのまま墳丘面ともなっており、そこに葺石が葺かれている。掘割は、長さ約8mで、中央部分から東と西の両側へ向うにしたがって徐々に浅くなりやがて消失する。掘割内には、主として暗灰色や黄褐色を呈する流入土が堆積しており、また少量ながら葺石の転落石も認められた。

葺石は、墳丘の北側及び東側においては比較的良好に遺存していた。しかし、南側と西側ではほとんど認められず、ごく一部分にのみ原位置を保つと見られる状態で残っていた。南と西側の下方斜面には葺石の転石と思われる角礫が多量に見られることから、大部分の葺石は封土とともに流出したと推察される。あるいは、後述するように経塚及び中世墓の築造にあたって、その石組などに葺石石材を利用したことによる破壊もあっただろうと思われる。このようなことから、葺石は築造当初には墳丘の全周囲をめぐっていたものと考えられた。



第5図 1号墳掘割土層断面図

葺石は、その構築状態を墳丘北側及び東側について見てみると、基底部から高さ約50cm付近までは比較的旧状をとどめていたが、それより上方については認められなかった。流失したものか、あるいは当初から葺かれていなかったのかは明確にできなかった。

葺石に使用されている石材は、その大部分が付近の山塊に産するチャート質の角礫であるが、ごくわずかに河原石が認められた。大きさは10~20cm大のものが多いが、まれに1辺50cmといった大型の石材も用いられていた。葺石の基底石は比較的大形の礫が据えられており、上方になるほど石は小さくなっていた。特に墳丘南東部分では基底石の残存状態が良く、列石状をなし、底辺をそろえ墳丘基底ラインを整えている状況が観察できた。

3. 内部主体

内部主体は、確認調査の際、西トレンチにおいて墓壙と思われる落ち込み1基の存在を認めているが、それが墳丘西辺寄りに偏していたため、さらに基数が増加するであろうと予想していた。墳丘表土を除去し主体部の検出に努めた結果、予想どおり墳丘上に4基の主体部を検出した。そのうち3基（1~3号主体部）は割竹形木棺、1基（4号主体部）は箱式石棺である。

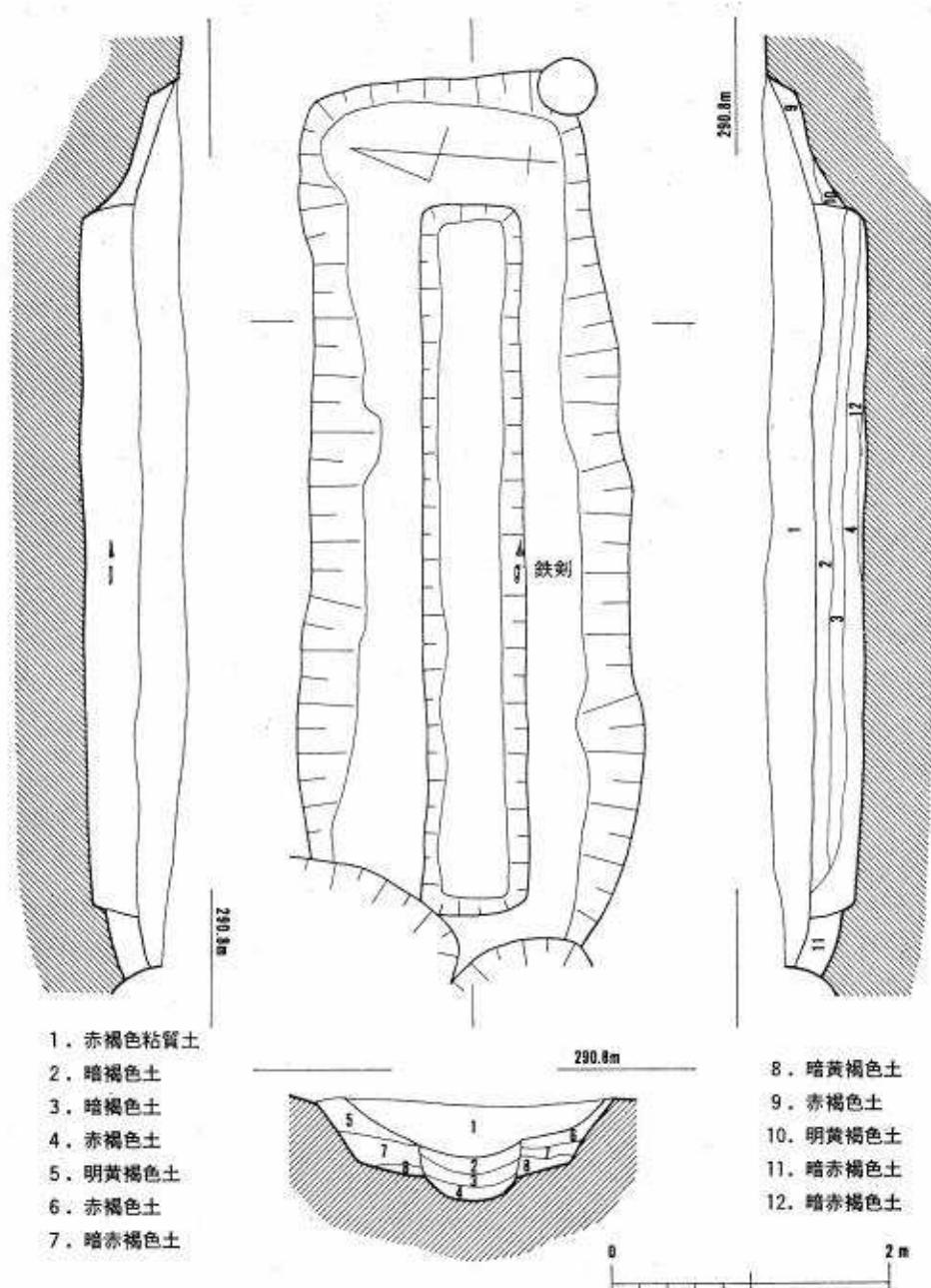
4基は、墳丘の縁辺部にはば方形に配置されていた。しかし墳丘中央部には、主体部を始め何らの施設も設けられておらず、南北約3.8m、東西約3.9mの空間が残されていた。この点については調査中から不審に思い、発掘調査終了後、幅1mのトレンチを設けて精査した。しかし赤褐色のバイラン土が深さ1m以上続き、何の遺構も検出されなかった。

1~3号主体部の先後関係は、墓壙の重複状況から1号・3号→2号主体部という埋設順序が確認できた。そのうち2号と3号主体部の重複関係については、それぞれ墓壙内埋土の色調や含有物が非常に似通っていたため識別が困難であったが、サブトレンチを掘削して精査した結果、2号主体部が新しく築かれたものと判明した。また4号の主体部が葺石と重複する部分は認められなかった。

A 1号主体部

4基の主体部の中では、1号主体部が墳丘南端の最も眺望に恵まれた場所を占め、かつ最大の規模を有している。

墓壙は、東西に細長い長方形を呈している。その西辺は2号主体部の墓壙と後世の擾乱坑によって破壊されており、現存長約6.5mを測るが、西壁の立ち上り角度から見て元来の長さは約7mあったと推測できる。幅は東端で2m、西端で2.5mである。墓壙の南辺は墳丘封土上面から切り込んでいたが、北辺では封土が認められなかったため、赤褐色の地山から直接検出できた。また墓壙の東南隅には3号中世墓、ほぼ中央には経塚と6号中世墓が築かれていたが、いずれも棺部分には影響を与えていなかった。



第6図 1号主体部実測図

墓壙は、肩部から約30~50cmの深さまで掘り込まれ、一旦そこで底面をなす。そしてさらにその中央部には棺を安定させるための掘込が認められた。掘込の規模は、東西長約5.1m、南北幅が上端で約65cm、下端で約40cm、深さ約10~15cmである。掘込の横断面をみてみると、底部は直線的でなく丸味をもっており、側面も曲線を描きながら立ち上っている。このことから棺は丸底の割竹形木棺であったと推定される。

木棺は、墓壙肩部から約30cmの深さで確認できた。棺の規模は長さ5.2m、幅が上端で75cm、下端で50cmを測り、東西両端の幅がほぼ等しい長方形となっている。また棺の主軸方位はN-86°-Eにとっている。木棺の壁面は、掘込側面の曲線に沿って若干内湾しながらもほぼ垂直に立ち上りが認められた。しかし棺材はまったく残存していないなかつたし、また棺材の厚さも土層からは識別できなかった。棺底面は墓壙底面とはほぼ同一面で把えられ、墓壙上面から東小口側で約70cm、西小口側で約60cmの深さにあって、その比高は西側が東側より約5cm高くなっている。なお、割竹形木棺の上部構造は、墓壙上端から棺検出面まで赤褐色粘質土が落ち込んでいたため、明らかにできなかった。

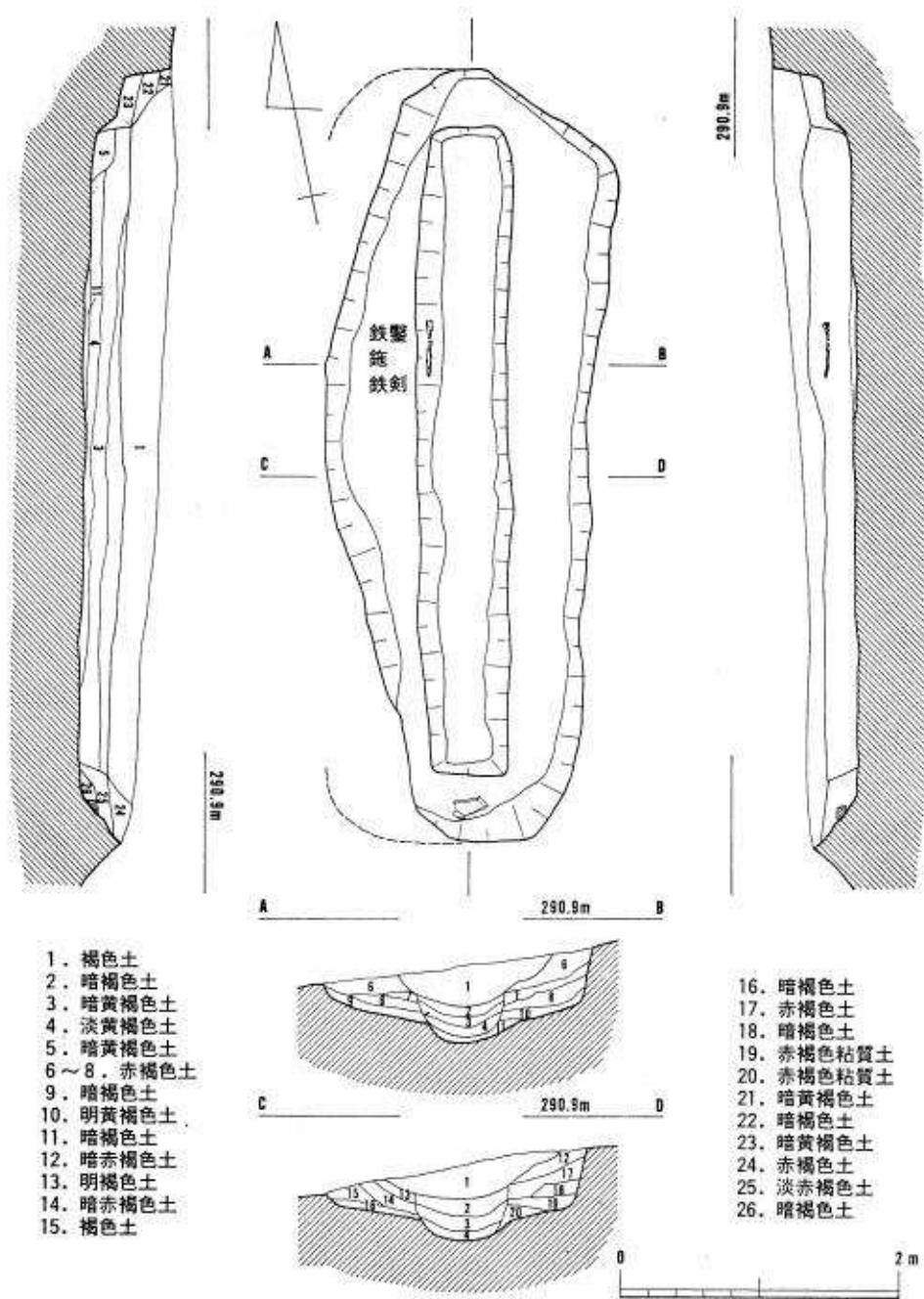
1号主体部における遺物は、棺内中央部の南壁沿いから鉄器類が出土した。しかしその他、棺外遺物、人骨片等は、棺内埋土をすべて持ち帰り水洗したにもかかわらず、まったく認められなかった。鉄器類は、鉄剣、鉄斧、鉈で、そのうち鉄剣は、棺底面から高さ7cmの棺側にあって切先を西に向け副葬されており、棺側壁の傾きに沿って刃部が斜めになった状態で出土した。さらに鉄剣の中央部辺りには、木棺の側縁沿いに太さ約10cmの木根が入り込んでいて、剣身を切先側と基部側の2個に切断しており、その間の剣身は破碎されてしまっていた。現状では剣切先部から茎先端部まで32cmを測るが、これがそのまま剣本来の長さを示しているかどうかは、木根によって2個の破片が左右に押し抜けられている可能性もあって明らかでない。鉄斧、鉈は、木根のため棺側壁中に押し込められた状態で出土し、原状を保っていなかった。

遺骸の頭位方向については、木棺の幅が東西両端でほぼ等しいこともあって判然としていない。棺底面の高さが東小口側より西小口側の方がわずかに高くなっている点と矛盾しなければ棺側中央部に副葬されている鉄剣の切先が西向きであることからみて、頭位は東向きであったと思われる。

B 2号主体部

2号主体部は、墳丘上の西端縁辺寄りに位置しており、1号主体部・3号主体部にはば直交して築かれている。

2号主体部周辺には墳丘封土は認められず、墓壙が地山から直接検出できた。検出面は平坦でなく、東から西へゆるやかに傾斜している。墓壙は、現状で南北長5.6m、東西最大幅1.9m



第7図 2号主体部実測図

の不整形を呈しており、南端部で1号主体部、北端部で3号主体部をそれぞれ一部破壊して掘り込まれている。南端部ではさらに後世の攪乱坑によって小口上面を失っていた。墓壙が不整形をなすのは、その西辺部が墳丘とともに著しく流失しているためで、元来の平面形は幅約2mの長方形であったと考えられる。

墓壙は、1号主体部と全く同様の掘削状態を呈しており、東側肩部より約40~50cmの深さで一旦底面を形成し、その中央に棺据え付けのための掘込を穿っている。掘込は長方形プランで上端の長さ約5.1m、幅約65cm、下端の長さ約4.8m、幅約40~45cmを測る。掘込底面はほぼ平坦に近いがやや丸味が見られ、側面も内湾こそしないが曲線を描いて立ち上り、断面U字形に近い形状をしている。また棺の壁面も若干弧状になっているので、棺は割竹形木棺であったと推定し得る。なお墓壙底面は第7図A-Bラインでやや不整となっていて、棺底と思われる面が墓壙底面から約5cmの高さのところに認められた。

木棺は、墓壙東辺肩部より約30cmの深さに掘り下げて検出できた。平面形はほぼ南北方向に細長い長方形で、主軸の方位をN-12°-Eにとっている。木棺の全長は約4.7m、幅は北小口で上端60cm、下端40cm、また南小口で上端55cm、下端33cmを測り、北小口側がわずかに広くなっている。木棺の壁面は、下部では掘込壁面と同一面で把えられ、上部は掘込の曲線に沿って若干内湾しながら立ち上っている。棺材はまったく残存しておらず、また棺材の厚さも土層からうかがえなかった。棺底面は、北小口で墓壙肩部から55cm、棺上面から30cm、また南小口では棺上面から24cmの深さを測り、北側と南側では7~8cmの差で北側が高くなっている。

棺内には主として黄褐色土が堆積しており、墓壙埋土には、墓壙を掘削した際に生じたと思われる岩盤破碎礫を多量に含む黄褐色土や暗赤褐色土を用いている。また墓壙南端の底面には1辺10×22cm、厚さ6cmの扁平な礫が認められた。礫は、長辺を北側に向け、平坦面を上にして置かれていた。礫と棺南小口は、約18cm離れて検出したが、墓壙埋土にはこのような大形の礫の使用は他に認められないため、あるいはこの礫が棺南小口の支え石であり、南小口が礫北端まであった可能性を必ずしも否定できないかもしれない。

2号主体部の遺物は、木棺西辺の中央よりやや北寄り部分から、鉄剣、鉄整及び不明鉄製品等の鉄器類が出土した。鉄器類は、棺側に沿い棺底より約15cmの高さにあって、北から鉄整、不明鉄製品、鉄剣の順に一部重なり合った状態で検出された。鉄整、鉄剣は、それぞれ袋部、茎部を北側に、刃先を南側に向けて副葬されていた。柄部に木質等が認められなかつたため、全長は明らかでない。

以上述べてきたように、棺の北端と南端を比較すると、棺幅が北が広く、また棺底面も北が高いこと、また、鉄器類の刃先が南向きであることから、遺骸の頭位方向は北向きであったと考えられる。

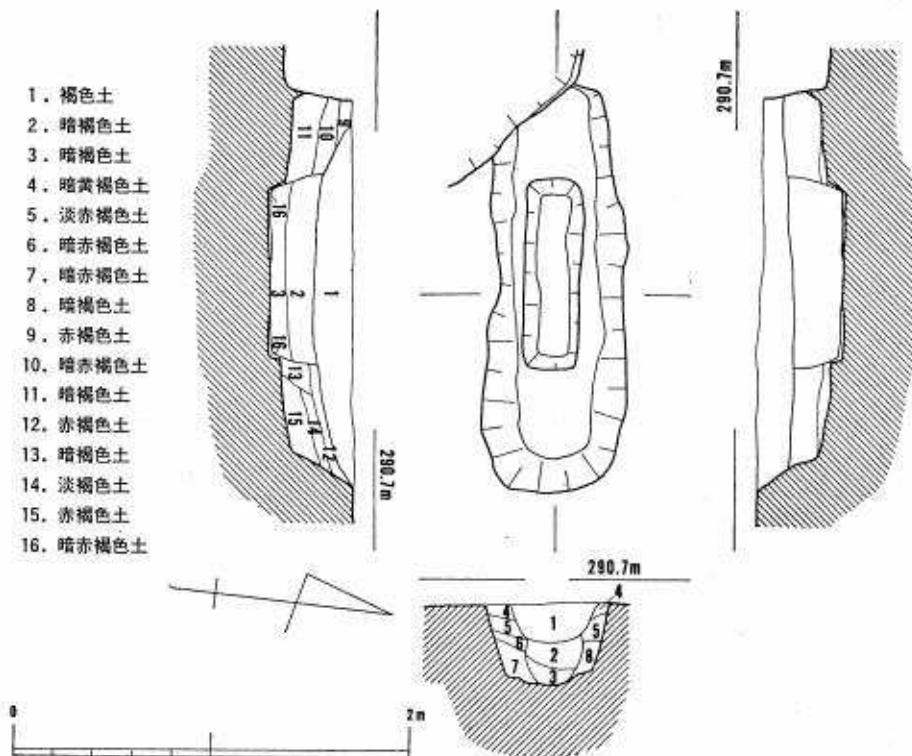
C 3号主体部

3号主体部は、墳丘北辺に位置している。1号主体部とはその長軸方向を同じくし、2号主体部とは直交する。

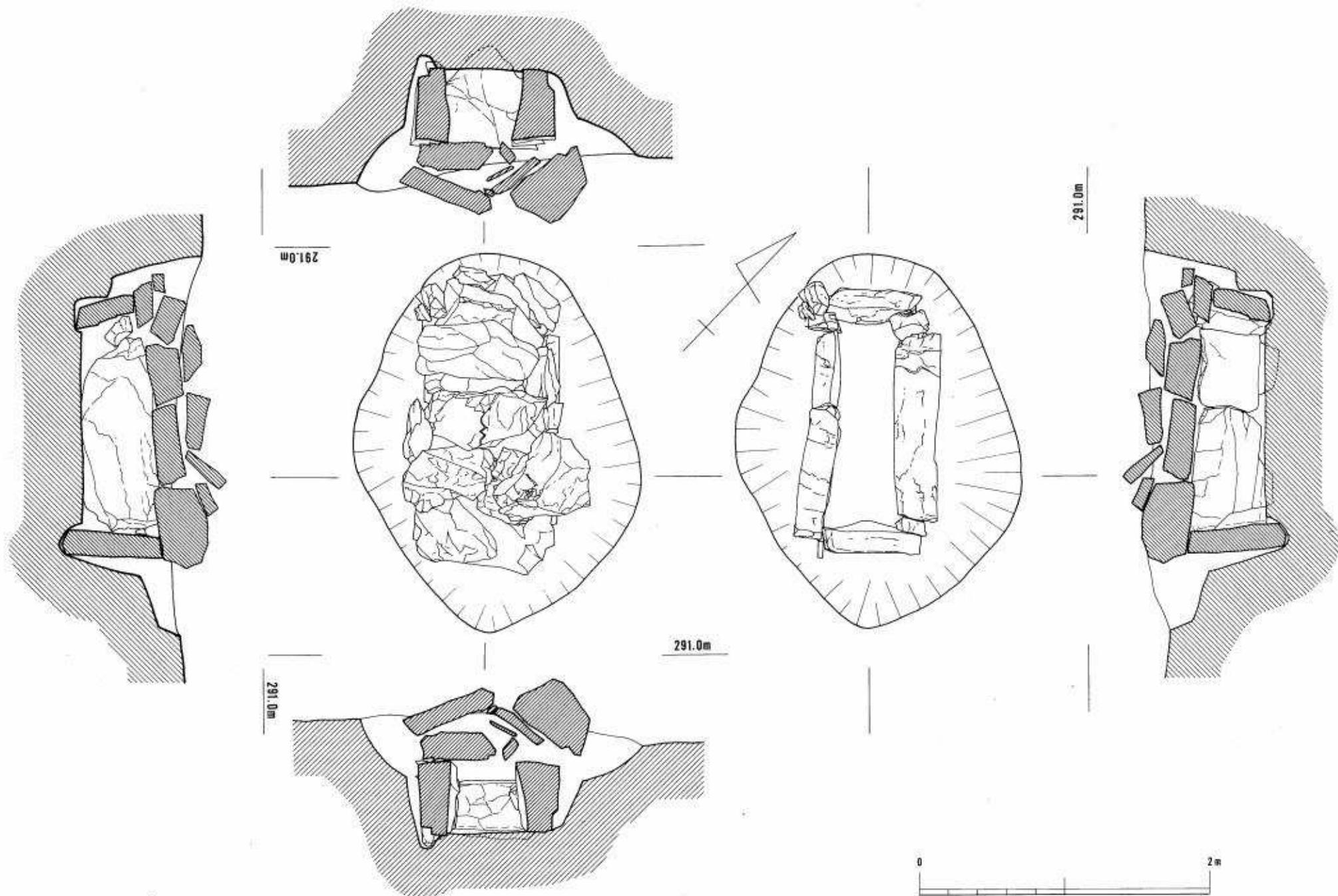
墓壙は、2号主体部墓壙の掘込によって西辺の一部を失っているが、東西長約2.1m、南北幅60~70cmのほぼ長方形に復原できる。墓壙の掘り込み状況は、1・2号主体部と全く等しく、肩部から約30cmの深さで平坦な底面となり、底面の中央に棺を据え置くための掘込が見られる。掘込の規模は、東西長91cm、南北幅が上端で約30cm、下端で約20cmを測り、深さ約10cmである。また掘込底面はほぼ平坦で丸味をもっていない。

棺は、墓壙を肩部より10数cm掘り下げたところで検出した。上面で東西長95cm、南北幅18cm、深さ約25cmを測り、東西両端の幅がほぼ等しい。棺の南北壁面は上方で若干内湾しており、そのことから割竹形木棺であったと思われる。また棺底面は東西両端で比高差をもっていない。

以上のように、3号主体部は割竹形木棺を埋葬していたと考えられるが、墓壙の長さに比べて木棺の長さが短いことが1・2号主体部と異なるところである。また、3号主体部はその規模から小児を埋葬したものと思われるが、棺の幅、棺底の高さがともに東西両端で等しいため、遺骸の頭位方向を明らかにし得なかった。なお遺物は全く出土しなかった。



第8図 3号主体部実測図



第9図 4号主体部(箱式石棺)実測図

D 4号主体部（箱式石棺）

4号主体部は、1号墳墳丘上の東側縁辺にあって、方形に配置された4基の主体部の東辺をなす箱式石棺である。東側の葺石最上部から約1.9mの距離にある。墳丘表土を除去するとすぐ箱式石棺の蓋石が認められ、墓壙検出時には蓋石の上半部が地表に露出した状態となった。

墓壙は地山から直接検出できた。上面で長軸約1.2m、短軸約0.9mの不整橢円形を呈している、長軸の方向を北西—南東に向いている。さらに墓壙は、上面からの深さが北端部で約30cm、南端部で約15cmのところから2段墓壙状となっており、箱式石棺に沿って若干大きめの掘込を穿っている。掘込は長方形で長辺1.0m、短辺0.5mを測り、壁面が急角度に切り込まれている。墓壙底面はほぼ平坦であるが、さらに底面の周囲を、石棺壁石を安定させるために溝状に掘り窪めている。しかし溝は、底面の周囲を全周しているのではなく、壁石の個々の大きさに合わせて掘っており、たとえば東辺部のように溝状掘込をもたない部分も認められた。墓壙の深さは約30~40cmを測り、また溝状掘込は南側小口で最も深く、約7cmである。

蓋石は、長さ37~47cm、幅15~27cm、厚さ8~16cmの扁平な石を4枚用い、石棺の主軸に直交して横位置に置いている。そしてさらにその上部に長さ30~42cm、幅15~21cm、厚さ6~16cmの4枚の石を重ね、あたかも石棺の蓋石が2重であるかのような構造になっている。蓋石と蓋石の間、また蓋石と壁石の隙間には小礫を詰め込み蓋石の安定を図っている。特に北小口側では小口石の上端の高さが低いため、蓋石の下部に15cm大の石を置き蓋石の支えとしている。

石棺は、5枚の板石を用いて長方形プランを形づくっている。北小口石は幅30cm、高さ20cm、厚さ7cmの長方形の石1枚を使用しており、東側では側石の先端、西側では側石の内側に組み合されている。南小口石は下端が尖った五角形の石で、上端幅34cm、最大高34cm、厚さ8cmを測り、両側石の先端に組み合わされている。

東側石は幅65cm、高さ25cm、厚さ8~14cmの大形の石1枚を用いているが、南北両小口石との隙間が開いているためそこに小礫を詰めている。西側石には幅14~26cm、高さ21~26cm、厚さ7~11cmの2枚の石を並べている。

これらの壁石によって作られた石棺の内法は、上端で長さ76cm、北小口幅21cm、南小口幅25cm、下端で長さ68cm、北小口幅21cm、南小口幅26cmを測る。石棺の深さは北端で18cm、南端で26cmである。また壁石上端の高さは南小口石の方が約9cm高くなっている。石棺の主軸方位はN-43°-Wによる。蓋石、壁石に用いられている石材は、蓋石1個と南小口石のみ砂岩で、他はすべて付近に産するチャートである。棺内には暗赤褐色土が堆積していた。堆積土を除去すると棺底に至ったが、棺底には明確な貼り床が認められず、地山面で把えられた。棺底はほぼ平坦であるが、南小口側がわずかに高くなっている。

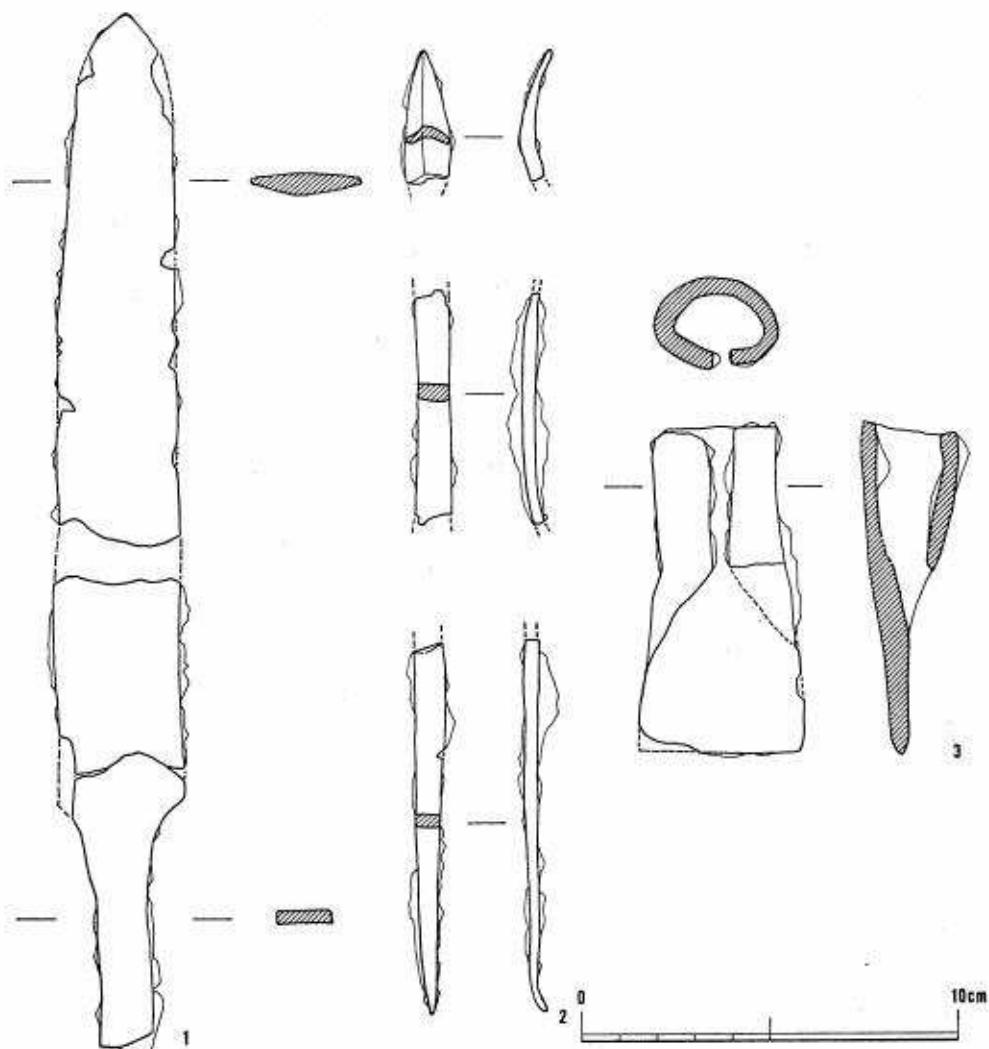
石棺は、その規模が小さいことから小児を埋葬したと考えられる。遺骸の頭位は、石棺の内法幅が南小口側で広いことと、また棺底の高さが南側で高いことから、南向きであったと思われる。副葬品及び骨片等は、棺内埋土をすべて持ち帰り水洗したが、何も出土しなかった。

4. 出土遺物

A 1号主体部出土遺物

鉄剣 (第10図 1)

中央部を欠失し、現存長はそれぞれ14.2cm、12.5cmを測るが、おそらく全長28cm程度のものであったと思われる。現存の刃部長19.7cm、同幅2.7~3.3cm、同厚さ0.6cm、茎長6.5cm、同幅1.5cm、同厚さ0.4cmを測る。剣身の断面では鎌が中央に認められるが、表面では錆化のため明瞭ではない。剣身から切先へは幅が徐々に狭くなり、先細り気味になっている。関は湾曲しながら茎へつながっており、直角をなさない。茎端はやや斜めに截断されており、両隅は角張っている。錆化のためか目釘孔は確認できない。また、剣身、茎とともに木質、布の遺存は全く認



第10図 1号主体部出土遺物実測図

められない。

鉄斧（第10図 3）

上部の鉄板を両側から折り曲げて橢円形の袋部をつくる、鍛造の手斧である。全長8.9cm、袋部端の内径は長軸2.4cm、短軸1.6cmを測る。刃部幅4.4cm、同厚さ0.6cmで、銹化しているが刃部はもと直線的であったと思われる。木質、布の遺存は認められない。

鉈（第10図 2）

3個の破片となっており、それぞれの残存長は刃部より3.6cm、6.5cm、9.8cmを測る。復原すると、全長22cm程になるものと思われる。木質、布ともに認められない。刃部は両側に刃をつけた細長い鍔形を呈し、湾曲しながら反りあがり、先端は鋭く尖っている。中央に稜を有し、断面は山形を呈する。刃部幅は1.4cmである。茎部幅は0.6cm、同厚さ0.4cmで、断面は扁平な長方形である。茎部端は欠失しているが徐々に細くなっている状況が窺える。

B 2号主体部出土遺物

鉄劍（第11図 4）

茎端を欠損しており、残存長21.9cmである。劍身の長さ18.6cm、幅2.7cm、厚さ0.5cmで、表面の銹化が著しいが、鎧様のものは認められる。1号主体部出土のものと比べると、やや小ぶりで劍身の幅も狭い。劍身は先細り気味となり切先は丸味をもっている。関は両方とも鈍角をなし、茎との境は明瞭である。茎に1個の目釘穴が認められ、孔径は0.3cmを測る。茎の厚さは0.3cm、幅は1.6~1.0cmと茎端に向かって徐々に狭くなっている。木質、布ともに遺存していない。

鉄鑿（第11図 5）

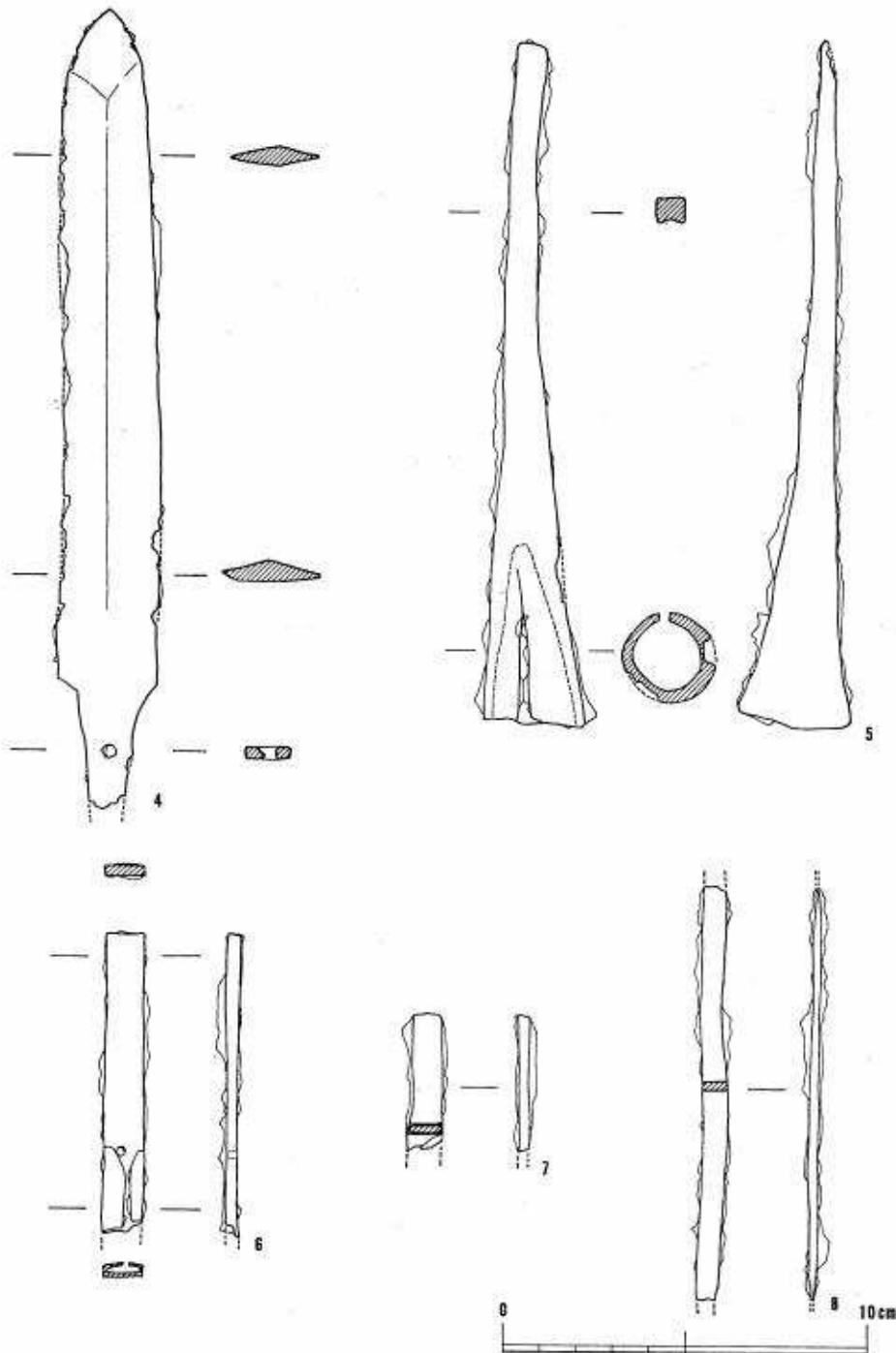
全長18.8cmを測り、下方の鉄板を折り曲げて丸い袋部をつくる鍛造品である。袋部の内径は2.3cm、深さ4.9cmで、円錐形をなす。全体の形状は断面円形の袋部から断面長方形へと変化している。厚さは1.0cmから0.5cmと先にゆくにしたがって徐々に薄くなり、先端では片刃状を呈する。幅も厚さ同様先細りとなっている。木質、布ともに遺存は認められない。

その他の鉄製品（第11図 6~8）

6は板状の鉄製品で、残存長8.3cm、幅1.1cm、厚さ0.4~0.6cmを測る。上端は欠損であるのか否か不明である。下方に孔が1個穿たれており、孔径は0.2cmである。孔より下は鉄板を折り曲げて断面長方形の袋状をなしている。

7は残存長3.8cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmの板状の鉄製品である。図の上端は截断面と思われる。木質、布痕ともに遺存しておらず、器種も不明である。

8はおそらく鉈の茎と思われる。残存長11.4cmで、幅0.7cm、厚さ0.3cmである。上端はやや幅を増し、扁平となり、下端は狭くなっている。



第11図 2号主体部出土遺物実測図

第4節 2号墳の調査

1. 墳丘

2号墳は、1号墳から約55m北西に離れた尾根上に位置する。墳丘の北側と西側の一部については高速道路路線外となるため、それを除外して墳丘の約 $\frac{4}{5}$ ほどの面積を発掘調査した。

墳丘の整形は、1号墳同様地山を削り出して行っている。地山整形の基底ラインは、墳丘西側では明瞭に認められたが、東側ではあまりはっきりしておらず、墳丘斜面から尾根斜面へそのまま急勾配で移行するかのように見えた。また南側では掘割によって尾根を切断し、墳丘を区画している。掘割の墳丘側底面を墳裾と見なし、地山整形ラインをたどると、墳形は南北径約13.8m、東西径約12.6mの尾根方向に沿ったやや細長い橢円形となる。これは1号墳と同様、幅の狭い尾根上という立地条件に制約されたためであろう。

墳丘上には厚さ約15cmの表土が堆積していた。表土を除去するとすぐ地山が露出した。地山は、赤褐色あるいは黄褐色を呈するチャート質の岩盤及びそのバイラン土である。墳丘封土はほとんど認められず、東側にわずかに残っているだけであった。最も厚く残存している墳頂部側で約12cmを測る。他の大部分の封土はすでに流失してしまったものと思われた。したがって、築造当初どのくらいの墳丘高をもっていたかは明らかでない。現存の墳頂部の標高は291.6mで、掘割底面からの比高差約1.4m、掘割南側肩部からは約1.3mを測る。また、西側の墳丘基底面からの高さ約0.7m、東側からは約1.2mである。墳頂部は、現状では比較的広い平坦面をもち、その中央に組合式木棺を1基検出した。

2. 外部施設

2号墳の外部施設としては、墳丘南側を区画する掘割がある。地形から見て北側にも掘割があると予想できるが、未調査のため明らかでない。葺石等の他の施設は認められなかった。

掘割は、尾根筋に直交して切られている。最も幅の広い稜線上で幅約4.5mを測り、1号墳に比べて幅広の掘割となっている。掘割の南側上端ラインは墳裾に沿って弧状を描いているが、北側ラインはそれと逆方向に弧状を呈する。

掘割の深さは、尾根稜線上で最も深く、北側で約45cm、南側で約15cmを測る。掘割の壁面は北側では急角度で切り込まれているが、南側ではゆるやかであった。これは、2号墳を築造するにあたって、ゆるやかに下降してきた尾根が水平に移行する傾斜変換点を選定したためと思われる。また、掘割の切断は底面が水平に近くなるほど強くは行っておらず、底面の高さが稜線上で最も高くなっている、そこから東西両方向に向って徐々に低くなっている。したがって墳裾のラインも稜線上で最も高く、墳丘東側で最も低くなっている。なお、掘割内には主として淡赤褐色土が流入、堆積していた。

3. 内部主体

主体部は、墳丘中央部に1基を検出した。主体部の墓壙は、上面で長さ6.1m、北辺幅2.3m、南辺幅1.8mのほぼ長方形を呈し、東辺では地山、西辺では墳丘封土上面から確認できた。墓壙は北側肩部から45cm、南側肩部から30cmの深さのところで一旦ゆるやかな面となり、さらにその中央に棺を据え付けるための掘込を穿っている。

掘込の平面形は長方形で、長さ5.1m、幅65~85cm、深さ18~30cmを測る。底面はほぼ平坦で壁面は斜上方に直線的に立ち上る。また掘込底面の南北両端には、地山の岩盤が掘り残してあった。北側の掘り残しは、上端で長さ83cm、幅約18cm、高さ5~10cmの細長い尾根状になっている。南側では長さ50cm、幅35cm、高さ3~6cmで、北側と比べて幅広である。この2ヶ所の地山掘り残し部分の東西両側は溝状になっていて、溝下面の幅は北側で10~15cm、南側で5~10cmである。

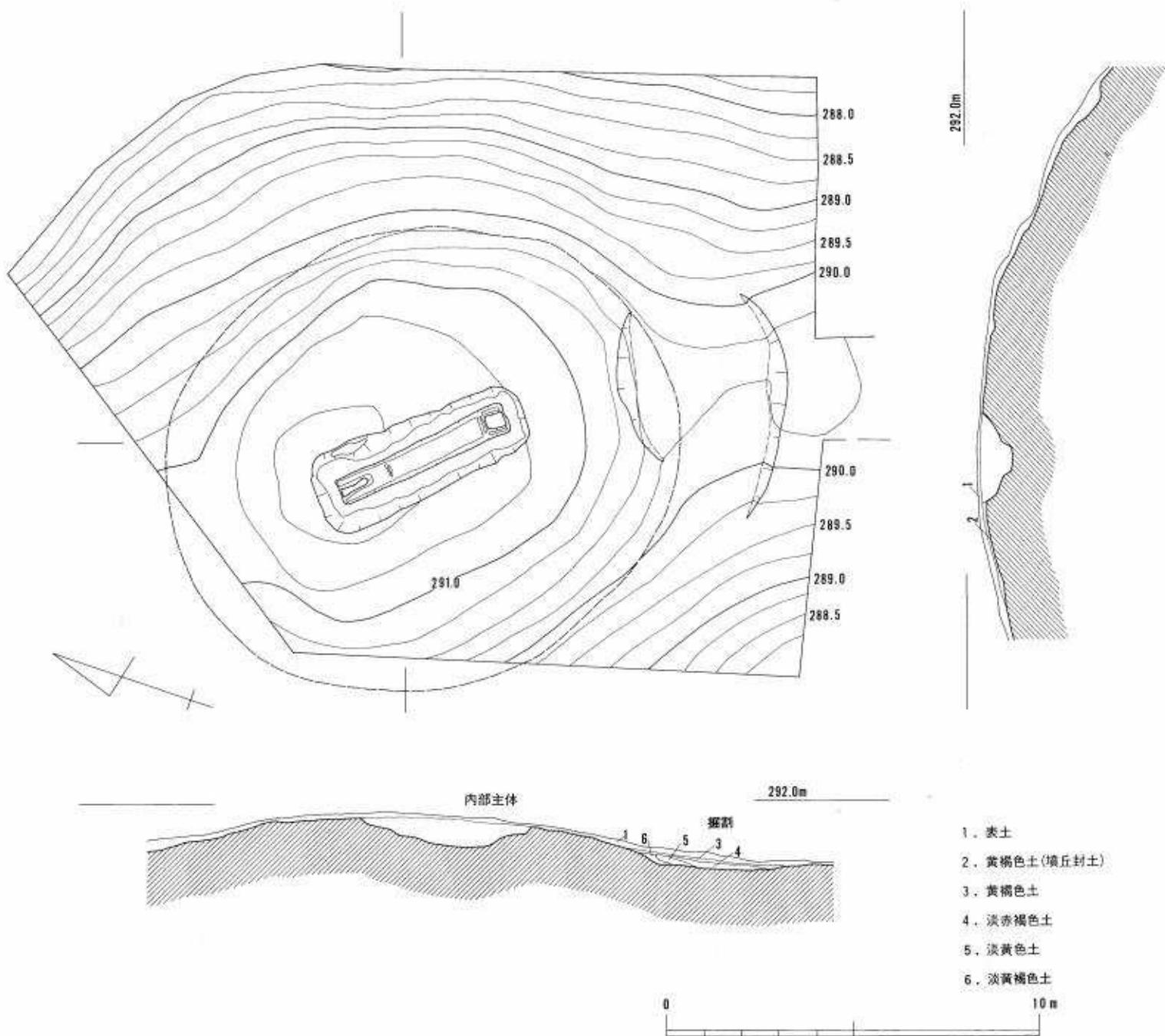
また墓壙底面には、棺の小口板をはめ込むためと思われる浅い溝状の掘込が2ヶ所で認められた。その1つは南辺地山掘り残し部分に接して掘られ、他の1つは北辺の掘り残し部先端から約48cmの距離にあって、長さ約37cm、幅約10cm、深さ3cmである。2つの掘込の間の距離は内側肩部間で約2.7mを測る。

以上の墓壙底面の形状から、棺は長側板と小口板をH字形に組み合せた箱形の組合式木棺であろうと推測される。

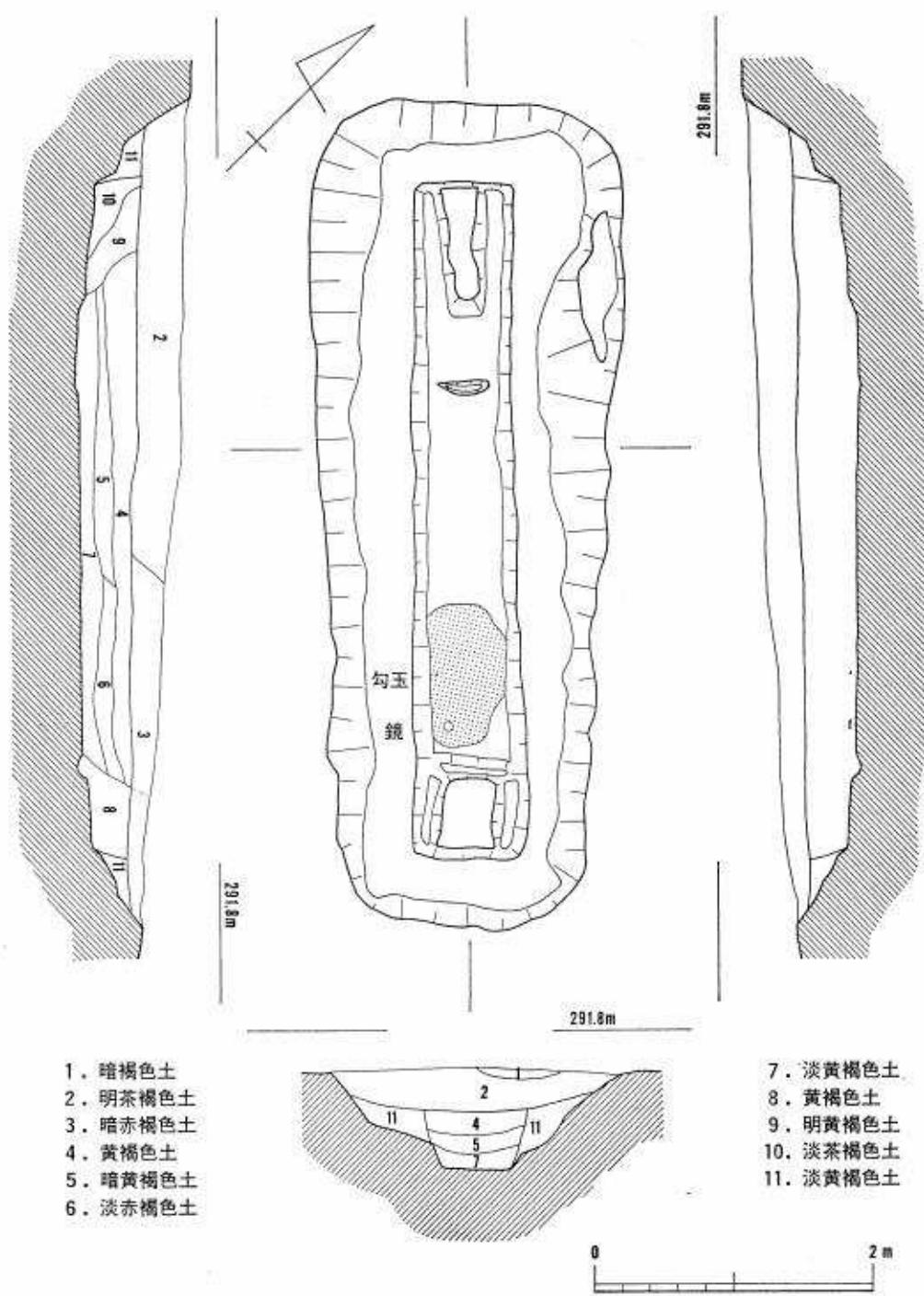
棺は、墓壙肩部から50~65cmの深さで検出した。その平面形は上面で長さ5m、幅70~85cmの長方形で、深さ38~45cmである。棺材の残存はみられず、また棺材の厚さについても埋土から識別不可能であった。棺底は、墓壙底面と同一に見えられ、約5cmの差で南側が北側より高くなっている。墓壙底面両端の地山掘り残しの両側にみられる溝状部分には木棺の長側板をはめ込んだものであろう。また棺底面における2ヶ所の小口板掘込の存在から、遺骸を納める木棺主室は長さ約2.7mであったと推測される。なお北側の地山掘り残し部先端には小口板掘込は認められなかった。しかし南北両小口板の位置のつり合いからみて、そこにも南端部同様の小口板が存在した可能性を考えられる。そのように仮定すると、棺主室の北側に長さ約40cmの副室が設けられていたことになる。

棺内には、主として黄褐色土が流入、堆積しており、また墓壙埋土には、黄褐色土や淡茶褐色土などを用いていた。墓壙埋土は、岩盤を破碎し墓壙を掘削した際に生じた土をそのまま利用したと思われ、岩盤破碎物を多量に含有していた。また棺検出面より上面には墓壙全体にわたって落ち込みが認められ、その最上部には暗褐色土が堆積している落ち込みが溝状に検出された。

遺物は、棺底面の南側小口近く、西壁寄りの部分から、内行花文鏡1面と、勾玉をはじめとする玉類が出土した。内行花文鏡は、棺の南側小口から約17cmのところで、鏡面を上にして水



第12図 2号墳墳丘測量図



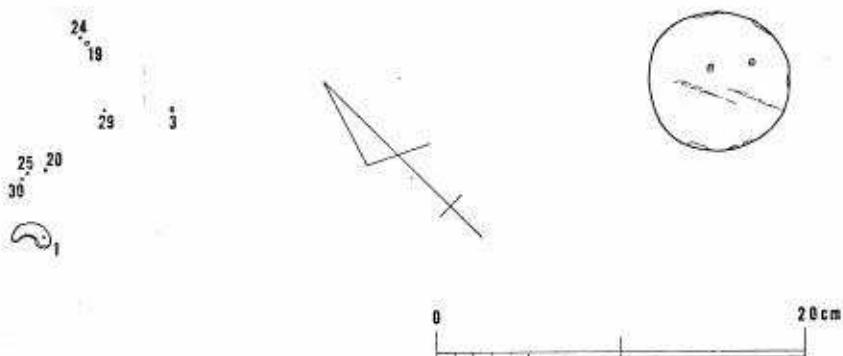
第13図 内部主体実測図

平な位置で出土した。玉類は勾玉・管玉・ガラス小玉で、そのうち勾玉は内行花文鏡から北西へ33cm離れ、頭部を鏡に向けて出土した。他の玉類は総数31点出土したが、そのうち棺底面において原位置を確認できたものは、ガラス小玉6点、管玉片1点のみである。他の玉類は棺底面の埋土を持ち帰り水洗した結果、存在を認めることができた。原位置を保っている7点は、勾玉の西方に散らばった状態で検出されたが、点数が少ないとあってその配置に規則性はみられなかった。

なお棺底面の鏡と玉類を中心とした南北約1.1m、東西約55cmの範囲には、ごくわずかに赤色顔料の付着がみられた(第13図 アミ部分)。また、赤色顔料は鏡の鏡背面にも認められた。

なお上記の遺物の他、棺南側小口外側の落ち込み埋土中から鉄刀子1点が出土した。刀子は棺上面の高さから約10cmの深さで出土し、棺外副葬遺物であろうと思われるが、茎部を欠く破片であり、原位置を保っているとは思われない。またその他、墓壙埋土上面に認められた暗褐色の溝状落ち込み埋土中から、土師器高杯の破片が10数点ばかり出土した。高杯は外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリする脚部片が多いが、小破片のみであり、ここでは図示できなかつた。

遺骸の頭位方向は、南小口側の棺幅が北小口より広いこと、また棺底面の高さが南側で若干高いこと、また鏡や玉類の出土位置が頭部辺りであろうことなどから考えて南向きであったと思われる。



第14図 鏡と玉類出土状況図

4. 出土遺物

2号墳より検出した遺物は、鏡1面、鉄刀子1本、水晶製勾玉1個、管玉2個、ガラス小玉29個であり、鉄刀子以外はすべて棺内からの出土である。

A 内行花文鏡（第15図）

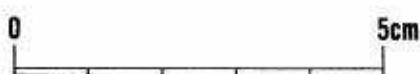
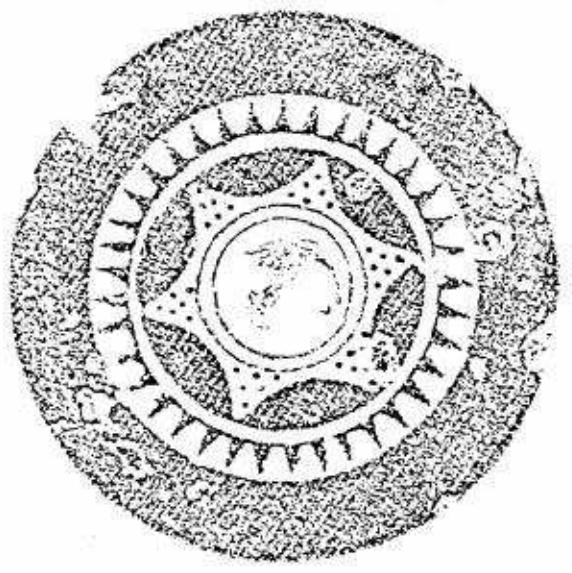
出土状態の項でも述べているように、玉類のやや東よりの位置で、鏡面を表にした状態で、底より若干遊離して出土した。

鏡は完形で、面径は7.65cm、面厚の平均は0.15cmである。文様構成は、中央より鈕・2条の圓線と続き、その外側に6弧の花文を配し、花文と圓線との間に6個で1組となる珠点を花文の間の6個所に配している。花文の外側は鋸歯文帯・平縁となっている。鈕の径は1.5cm、高さは0.8cmで鈕孔が貫通しており、鈕孔周辺は平滑になっている。花文帯の幅は0.8cm、鋸歯文帯の幅は0.55cmを測る。縁形式は平縁で幅1.1cm、厚さ0.25cmである。反りは縁端で0.15cmとなっている。

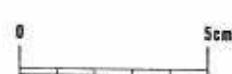
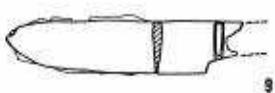
鏡背には赤色顔料が付着しているが、木質・布痕は全く認められない。鏡面・鏡背ともに、光沢があり、所々に錆が認められるが、残存状況は良好である。現重量は48.43gである。

B 鉄刀子（第16図）

刀身長5.3cm・幅0.9cmの小型の刀子である。関は斜角をなし、茎の幅0.9~1.1cm・厚さ0.2cmであるが、茎端を欠失する。木質、布痕とともに認められない。なお、残存する全長は6.2cmである。



第15図 内行花文鏡実測図



第16図 鉄刀子実測図

C 玉類

2号墳の棺内より出土した玉類には勾玉・管玉・ガラス小玉があり、総数32個である。遺物の出土状態の項で前述したように、玉類はすべて鏡のやや西寄りでまとまって出土している。しかし、ガラス小玉はその出土位置が明確なものが少い。

勾玉（第17図 1）

「C」字状を呈する無色透明の水晶製で、丁寧に仕上げられており、表面に光沢がある。全長22.5mm、厚さは頭部で7.5mm、胴部で7.0mmである。孔は両方から穿孔しており、孔径3.2mmである。頭部はやや扁平であるが、胴・尾部の断面は丸い。頭部の下端と尾部の上端に稜が認められ、胴部内側に微細な研磨痕が遺存している。

管玉（第17図 2・3）

管玉は2点出土している。2は暗赤色を呈する鉄石英製と思われる。全長は9.0mm、径は上方が2.1mm、下方が2.3mmと一方の径の方が大きい。上下端ともに平坦面をなすが、側面には9本の稜線があり、9角柱の形状を呈している。孔はやや梢円形を呈し、孔径は1.2mmを測り、両方から穿孔している。

3は脆弱な碧玉製管玉の残欠である。表面の磨滅が著しい。残存長4.5mmで径・孔径ともに不明である。緑灰色を呈する。

ガラス小玉（第17図 4～32）

出土したガラス小玉の総数は29個であるが、出土位置が明確なものは6個（19・20・24・25・29・30）のみである。しかし他の23個についても同様の位置にあったものと推察される。

大きさは径2.1mmから4.3mmまであるが、径の大小により大きく2つに分類できる。I類は径が4.3mmのもので、4～6の3個である。II類は径2.1mm～3.3mmのものであるが、さらに細かくみれば2つのグループに分れそうである。IIa類は径2.9mm～3.3mmのもので、計13個（7～19）である。IIb類も13個（20～32）あり、径は2.1mm～2.6mmのものである。

高さについては1.1mm～3.6mmまであるが、I類の方がII類よりも高い数値となっている。

孔径は0.8mm～1.9mmであるが、分類上の差はなく、概して1.2mm前後におさまる。

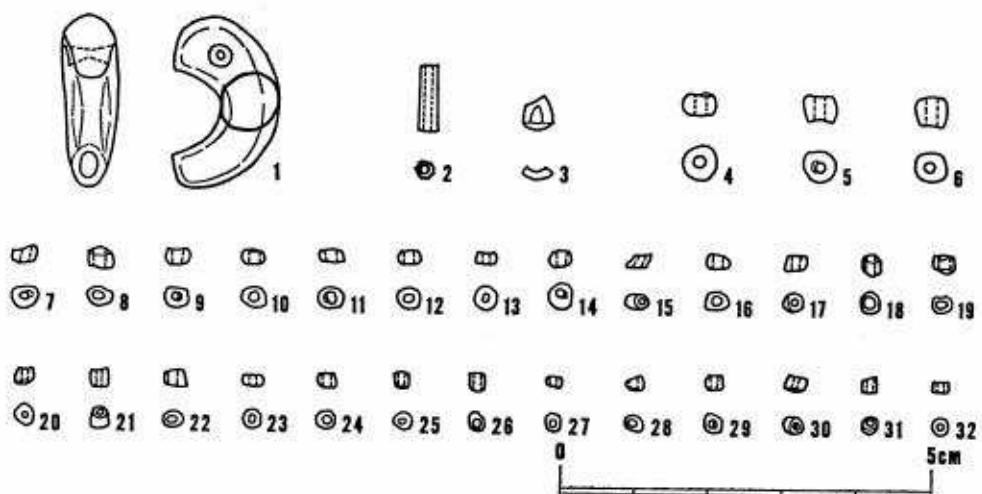
ガラス小玉の表面および内側には丸い気泡が認められ、これらは吹ガラス技法とは違った方法で作られていることを示している。あるいは巻きガラス技法で成形されたものかもしれないが、仔細に観察しても巻いた痕跡は認められなかった。

全体的なつくりとしては、I類の方が大きいためか丁寧なつくりとなっている。II類は側面が平行四辺形などの歪んだ形のものが多く、I類と比べると粗悪な感がある。しかし、表面は稜を磨いて丸くし、光沢があり、表面の仕上りはII類のほうが優れている。

色調は、やや緑がかった水色に近い青色を呈し、I、II類ともに共通している。

註1 玉類の材質はすべて執筆者の肉眼観察による。

註2 小林行雄「瑠璃」「続古代の技術」1964年 塙書房



第17図 玉類実測図

No	径(mm)	孔径(mm)	高さ(mm)	色調	No	径(mm)	孔径(mm)	高さ(mm)	色調
4	4.3	1.5	2.6	暗い青緑	19	2.9	1.5	2.0	青緑
5	4.3	1.2	3.5	暗い青緑	20	2.6	1.0	1.8	青緑
6	4.3	1.3	3.6	暗い青緑	21	2.5	0.8	2.5	暗い青緑
7	3.3	1.9	2.0	青緑	22	2.5	1.3	1.9	暗い青緑
8	3.3	1.6	2.7	暗い青緑	23	2.5	1.1	1.1	青緑
9	3.2	1.3	2.0	青緑	24	2.5	1.1	1.7	青緑
10	3.2	1.2	1.8	青緑	25	2.4	1.0	2.1	青緑
11	3.1	1.5	1.5	青緑	26	2.3	1.0	2.0	暗い青緑
12	3.1	1.2	1.8	青緑	27	2.3	1.0	1.6	青緑
13	3.1	1.0	1.5	青緑	28	2.2	1.1	1.8	暗い青緑
14	3.1	1.2	2.0	暗い青緑	29	2.2	1.2	1.9	青緑
15	3.0	1.0	1.9	青緑	30	2.2	1.0	1.9	青緑
16	3.0	1.2	1.5	暗い青緑	31	2.1	1.0	2.0	暗い青緑
17	2.9	1.0	1.8	暗い青緑	32	2.1	1.0	1.4	暗い青緑
18	2.9	1.6	1.2	青緑					

第2表 ガラス小玉計測表

第5節 上板井経塚の調査

1. 位置と現状

経塚は、1号墳墳丘上のやや南西縁辺寄りの位置に築造されている。その場所は墳丘上でも最も眺望が良く、宮田川流域の小平野を眼下に収めた場所である。

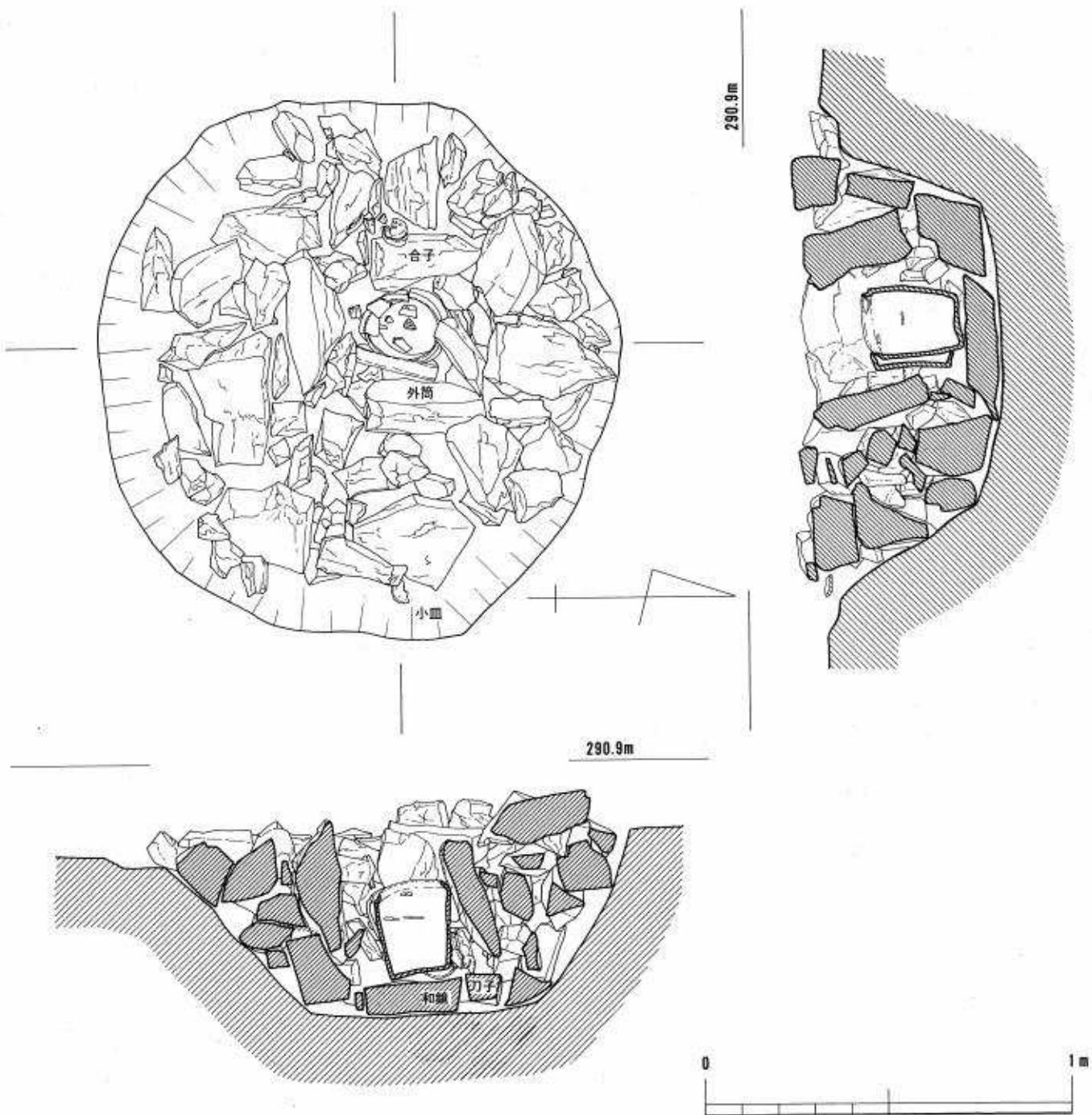
経塚の存在は、1号墳の主体部を検出する調査過程で、表土を除去するとすぐに経塚上面の石組が現れたことによって確認できた。石組を納めるための壙は、墳丘上から直接切り込まれており、盛土などの外部施設は一切認められなかった。そのため、調査当初は古墳の墳丘をそのまま利用した経塚と考えた。しかし、1号墳墳丘封土がかなり流失している状態から見て、経塚の盛土もともに流出した可能性も残されている。したがって、現状では経塚築造当初、新たに盛土がなされたものかどうかは明らかにし得なかった。

2. 内部構造

経塚は、円形の壙を掘り、その中に板石で小石室を構築して経筒を納めたものである。壙は、1号主体部の墓壙に重複して築かれており、1号主体部墓壙の北側壁面をわずかに破壊して掘り込まれているが、壙底面は1号主体部の木棺部分までには達していない。経塚の検出段階では、1号主体部と経塚の埋土の識別が困難であったため、壙の平面プランの確認が遅れた。しかし、調査後の断ち割り作業で壙壁の立ち上りを確認できた。壙の上面は円形を呈し、直径約1.2mである。また壙底面はほぼ平坦で、約60×80cmの楕円形をなし、深さは約50cmを測る。

石室は、まず壙底の中央部に長辺30cm、短辺25cm、厚さ8cmの不整方形の板石を据え、底石としている。底石は壙底に直接置かれており、その下部には何の施設も認めることができなかった。底石の周囲には、底石に沿って1辺約30cm、厚さ約6～12cmのほぼ正方形の板石4枚を立てて壁石とし、方形の小石室を構築している。石室の内法は、1辺約30cm、深さ約50cmである。壁石の下部には約10～16cmの厚みのある礫を横位置に置いて8～20cmの高さを持たせ、壁石の安定を図っている。4枚の壁石は、四隅を整然と合せているのではなく、その空隙に10cm大の礫を詰めている。これは板石によって形成される石室空間を拡大しようと意図したものと思われる。なお、現状では北、東、西3辺の壁石は若干崩れ、石室内に傾斜していた。また、石室の上部に蓋がなされていたかどうかは、後述するように後世に経塚が開封されていたため明らかにし得なかった。

石室と壙壁との空間には、10～20cm大の割石が隙間なく詰められており、石室の控石の役割を果している。それらの石及び石室に用いられている石の多くは、チャート質の角礫で、おそらく1号墳葺石石材を転用したものと思われた。



第18図 経塚実測図

経塚からは、多数の遺物が石組上面及び石室内から出土した。

石室内は、検出当初土砂が充満し、上面に小礫や土器片が散乱していた。その土砂を取り除くと、須恵器の外筒が1組、底石の上に据え置かれた状態で検出された。外筒は身と蓋からなっており、そのうち身は底石の中央部に置かれていたが、蓋は身と石室東壁との間にあって、身に立てかけられていた。また身は、石室の北壁石が倒れかけてきたために、その重圧で縦半分に割れていた。

外筒内及び石室内の流入土中からは、土師質経筒、土師器壙・杯、鉄釘、銭貨等が散乱した状態で、あるいは小破片となって出土した。土師質経筒は、小破片が15点、外筒の内外より出土した。しかし、経巻の残欠等の痕跡は認めることができなかった。土師器杯、銭貨は副納品と思われるが、原位置を動かされていた。土師器壙は、後述するように他の経塚出土遺物とその年代が合致せず、後世の混入品であろう。

鉄釘は、合計12本が出土した。そのうち1本のみが壙の石組上面より出土し、他は石室内から出土した。石室内の1本は後述する和鏡の下位からの出土である。石室内から出土した鉄釘は総数11本にも及ぶので、混入とは思われず、元来経塚に伴っていたと考えられる。また外筒と石室壁面との間に約8cmの空間が残されていることから、石室内に外筒を納置する木櫃が存在した可能性が指摘できる。しかし鉄釘は散乱状態で出土したので、蓋の有無等、木櫃の構造については明らかにできなかった。

以上述べてきたように、外筒の身が蓋からはずされていること、及び石室と外筒内の遺物が散乱状態であることなどから見て、経塚は埋納後、後世になって開封され、経筒は破壊されて経巻とともに持ち出されたものと推察できる。また、その際石室内はかなり搅乱を受けている。土師器壙が後世の混入品とすれば、それが経塚開封の時期を示すものかもしれない。

石室内は上記した如く搅乱を受けていたが、一方、石室底面では一部の副納品が比較的良好に遺存していた。外筒と北側壁石との間の底石上には、和鏡3面と刀子1本が副納されていた。和鏡は山吹蝶鳥文鏡、草花流水双鳥文鏡、網双鳥文鏡で、そのうち前二者は鏡背同士を重ね合せ、草花流水双鳥文鏡を上にして石室壁石に斜めに立てかけられていた。また網双鳥文鏡はその北側にほぼ垂直に置かれていた。刀子は、切先を東に向け刃部を壁石側にして斜位に埋置されていた。これらの遺物は、原位置を保っているか、あるいは原位置にきわめて近い状態であると思われた。

また、遺物はその他に石組の上面から青白磁合子、元豊通宝、須恵器小皿、鉄釘1本が出土した。青白磁合子は石室の西側に近接して、蓋と身が合せられた状態で出土した。これらの遺物が原位置であるかどうかは、表土直下で検出したこともあって明らかでない。

3. 出 土 遺 物

経筒（第19図 10・11） 土師質 15破片 石室内出土

経塚石室内から出土したもので、最大の破片でも一辺が5.5cmほどしかない。破片は筒身と考えられるもの14片と、その蓋と考えられるもの1片がある。

筒身と考えられる破片には、口縁部が3片あり、口径を復原すると12.8cmになる。口縁端部は筒身に対してほぼ直行し、平坦面をなす。筒身の外面は、上下に粗いナデが施され、内面はワラ状圧痕が明瞭に観察できる。口縁部直下には、ワラ状圧痕の他に結び目と思われる痕跡が残る。これは、円柱状の原体にワラを巻き付け、その外側に粘土を巻きあげて成形する際、そのワラを何カ所かでしばったために生じた痕跡と考えられる。ワラ状圧痕に対して直行する幅0.6cm、深さ0.2cmの沈線をもつ破片があるが、これも、ワラをしばったために生じた痕跡であろう。

蓋は、筒身と同様の焼成で、小破片である。破片は口縁部の一部で、全体にヨコナデ整形される。端部がいくぶん鋭く成形されているところから、本来蓋として焼成されたもので、杯などの器種から転用された蓋とは考えにくい。

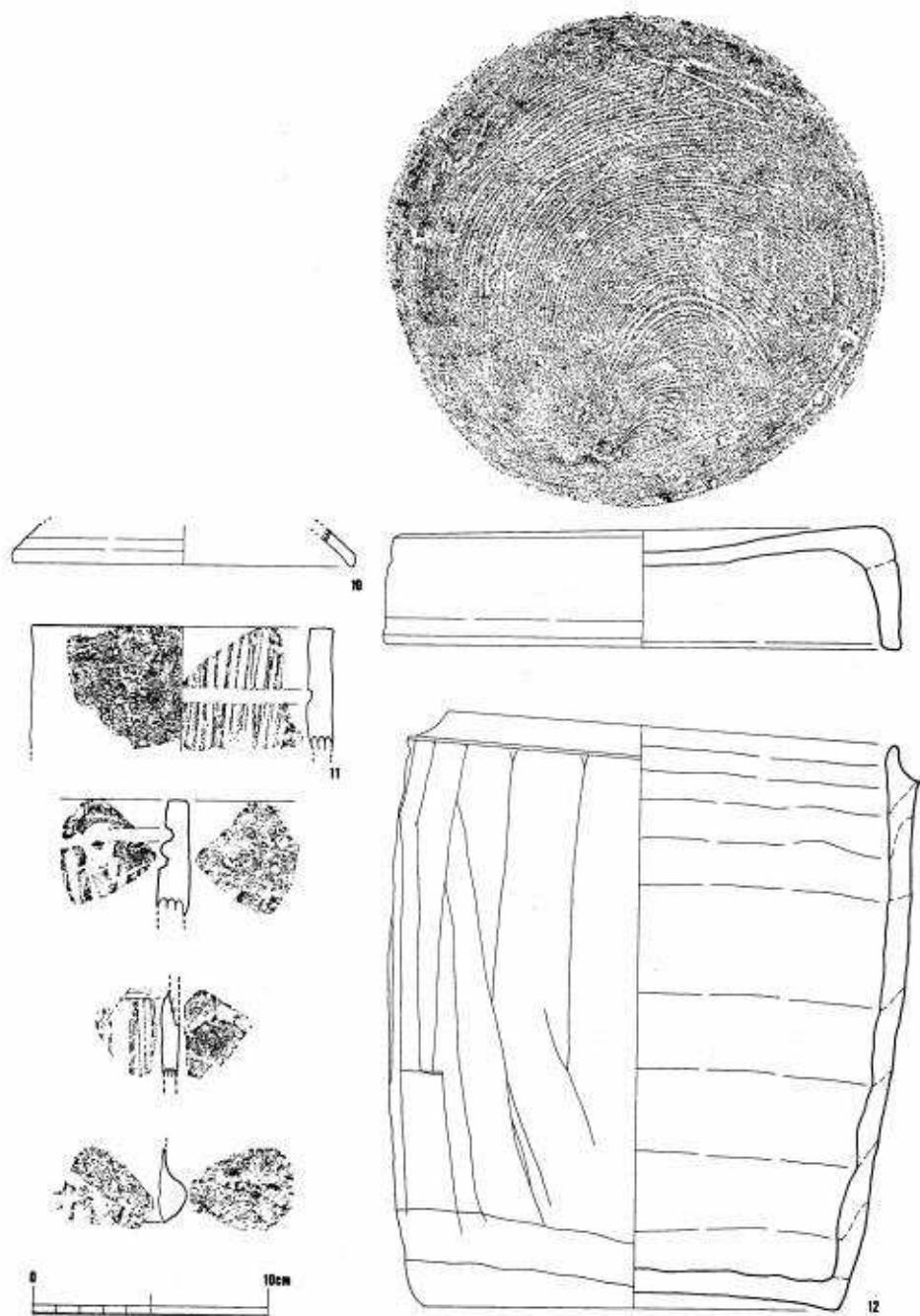
この経筒は、出土位置が外筒の外側にあり、破片の形状も丸瓦片とよく似ているため、経筒と断定するには若干のためらいもある。また、破片が少ないと、経巻がまったく残っていないことも否定的な要素である。しかし、丸瓦とするにはあまりに器壁が薄いし、経塚が盗掘を受け、経筒がその原位置を動いていることはほぼまちがいないことから考えると、盗掘の際経巻や副納品の一部が経筒ごと運びだされ、破片の一部が石室内に残ったと考えた方がより妥当であると思われる。

外筒（第19図 12） 須恵質 一口 石室内出土 通高28.6cm

筒身の法量は、口径19.0cm、高さ24.7cmで、形態は円筒形をなす。出土位置は、石室内中央部で、ほぼ原位置を動いていないと考えられる。口縁部は、いくぶん内傾した「印籠受け口」の形状である。胴部は、わずかにふくらみをもつものの、ほとんど直線的にたち上る。底部は平底で、中央部が凹状を呈する。

筒身の成形は、底部を円盤状につくり、その上に粘土紐を積み上げる方法を用いている。口縁部の受け口部分だけは、特に入念なヨコナデがなされるが、内外面は基本的に上下の粗いナデによって仕上げられる。外面下位には、横位のヘラ削り、その内面には指頭圧痕が残る。底部外面にはナデがみられる。焼成は瓦質と称される程度のもので堅微ではない。

蓋は、口径21.6cm、高さ5.0cm、上端部径20.8cmの被せ蓋式平蓋である。焼成から判断すれば筒身と一緒に製作されたものと考えざるを得ないが、蓋上面には回転糸切り痕が残り筒身底部の成形技法と異っている点が注意される。蓋上面は、凹状をなしている。整形は全体にていねいなヨコナデが施され、上端部周辺はヘラ削りで調整されている。



第19図 経塚出土遺物実測図(1)

和鏡（第20・21図）

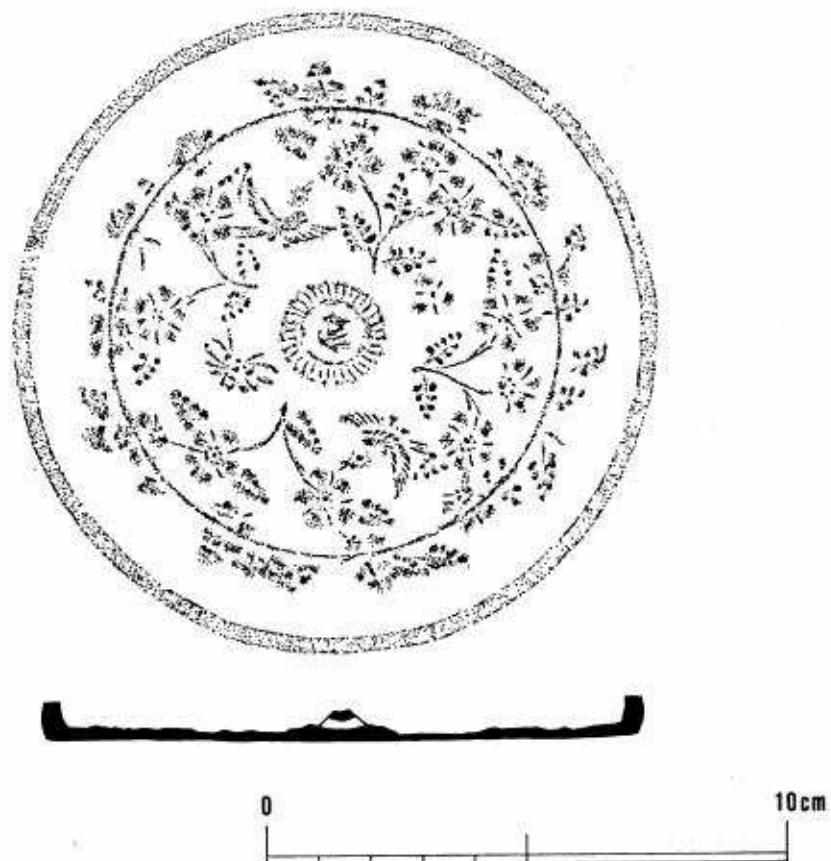
網双鳥文鏡 1面 面径 8.4cm 重量 16.94g

草花流水双鳥文鏡 1面 面径 9.9cm 重量 55.35g

山吹蝶鳥文鏡 1面 面径 11.6cm 重量 183.02g

和鏡は、3面とも石室内最下層で、外筒に接して重なるように出土した。出土位置は、盜掘によって移動したとは考えがたい。それぞれの形状と法量は次の通りである。

鏡背文様	径	形状	反り	縁幅	縁高	钮高	钮径
網双鳥文	8.4	円	0.1	0.3	0.1	0.3	0.9
草花流水双鳥文	9.9	円	0.1	0.1	0.5	0.4	0.9
山吹蝶鳥文	11.6	円	0.1	0.3	0.7	0.6	1.0 (単位cm)



第20図 経塚出土遺物実測図(2) 山吹蝶鳥文鏡

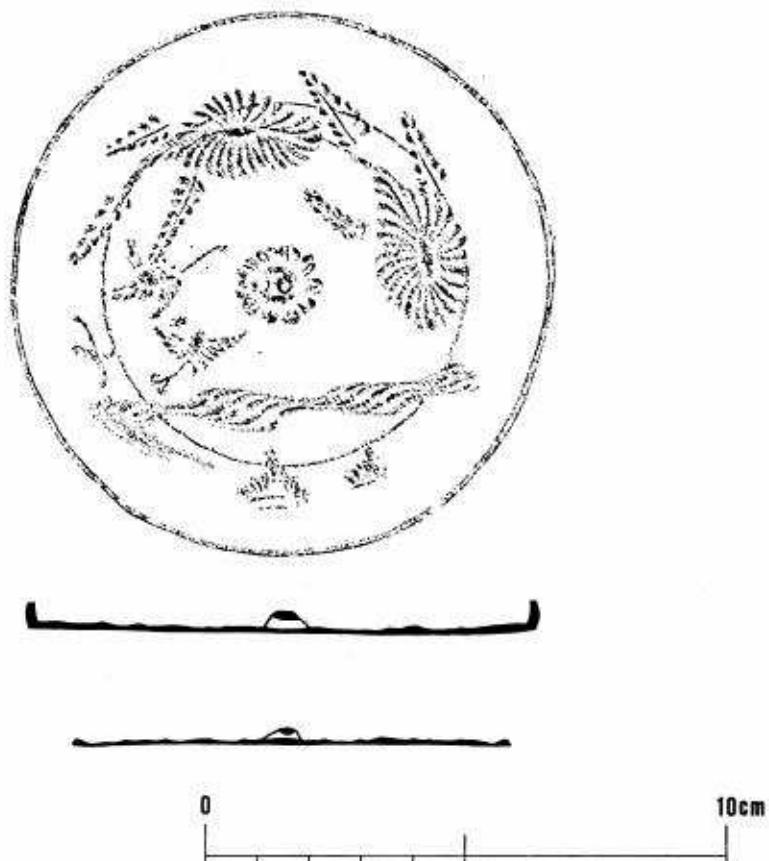
網双鳥文鏡は、青銅鋳製である。紐の形状は素紐で、文様区の界囲線はない。薄い鏡胎で損失しやすいため、周縁部の欠損が多い。鏡背は斜格子の網目文を全面にめぐらし、紐をはさんで左右に飛鳥を配する文様構成をもつ。

草花流水双鳥文鏡は、青銅鋳製で、花座紐をもつ。文様区では一重界囲線がある。鏡背文様は、下方に流水と水草、中ほどから上には、草花と飛鳥を配する構成となっている。文様区は内区、外区をほとんど意識せず、両方にまたがって展開される。周縁は、いくぶん厚みをもつ。

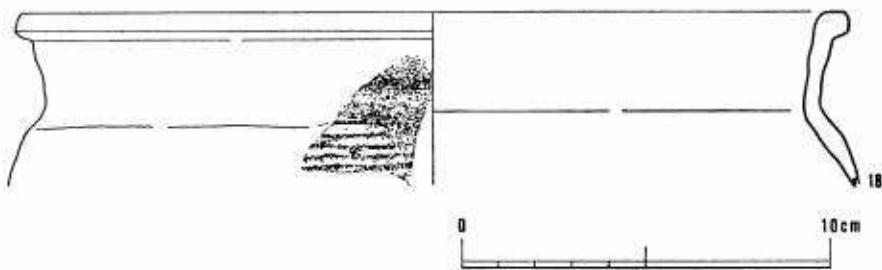
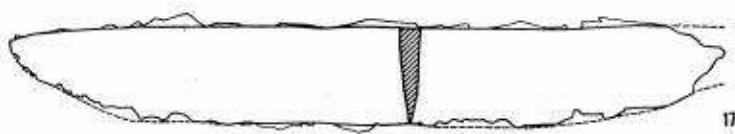
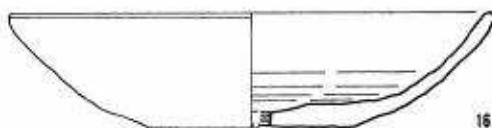
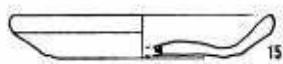
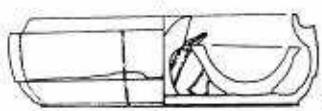
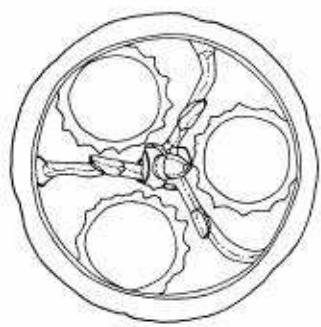
山吹蝶鳥文鏡は、青銅鋳製で、探菊座紐をもつ。文様区には、一重界囲線をもつが、草花流水双鳥文鏡と同じく文様構成上の内区、外区の意味はほとんどない。この鏡は、3面中面径、縁幅ともにもっとも大きい。文様構成は、鏡背全体に山吹文を配し、その間に蝶と一対の飛鳥が位置している。

青白磁合子（第22図 13・14） 一合 通高4.4cm

石室外の石組から検出したもので、印籠蓋造り、型抜きによる六花形の平型合子である。蓋



第21図 経塚出土遺物実測図(3) 上・草花流水双鳥文鏡、下・網双鳥文鏡



0 10cm

第22図 経塚出土遺物実測図(4)

表には牡丹浮文がみられる。軸は淡青色を呈する。身の内には、杯形容器が3個等間隔にならび、中心の蓋から杯形容器の間へ3本の蓮茎がのびる。蓋は、口径8.1cm、高さ2.3cm、身は口径7.1cm、高さ2.5cm、底部径7.0cmを測る。

刀子（第22図 17） 1口 残存長19.5cm

石室内の出土である。平造りの直刀で反りはほとんどない。身幅も広く、棟も0.7cmと厚い。切先は、ふくら切先を呈する。刀関は、わずかにみえるようだが茎が欠失しているため定かでない。木質痕はない。

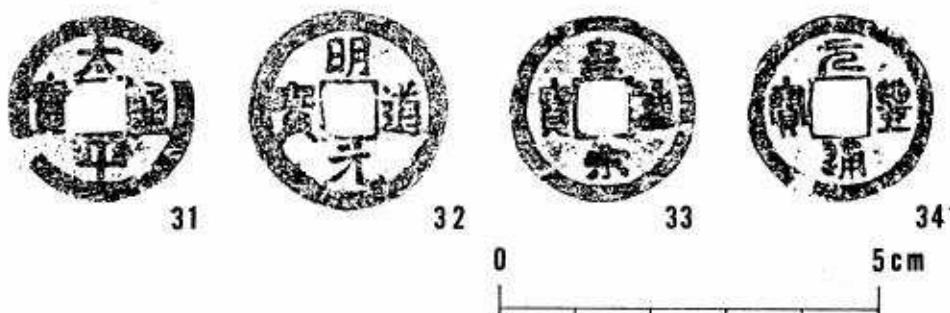
銭貨（第23図） 8枚

銭貨は、文字の読みとれるもの7枚と、判読不能なもの1枚の計8枚が出土した。その出土位置と初鑄年は、以下の通りである。

出土位置	初鑄年
開元通宝	外筒埋土下層 唐 武德元年（621）
宋通元宝	〃 北宋 建隆元年（960）
太平通宝	〃 太平興國元年（976）
明道元宝	〃 明道元年（1032）
皇宋通宝	〃 宝元2年（1039）
熙寧元宝	〃 熙寧元年（1068）
不 明	〃
元豐通宝	石組直上 北宋 元豐元年（1078）

小皿（第22図 15） 1口 口径6.7cm、高さ1.4cm、底径4.4cm

石組内から出土した須恵器の小皿で、底部に回転糸切り痕を残す。体部は内外ともヨコナデによって仕上げられている。胎土に砂粒を含み、底部には焼けひずみのため亀裂が入っている。



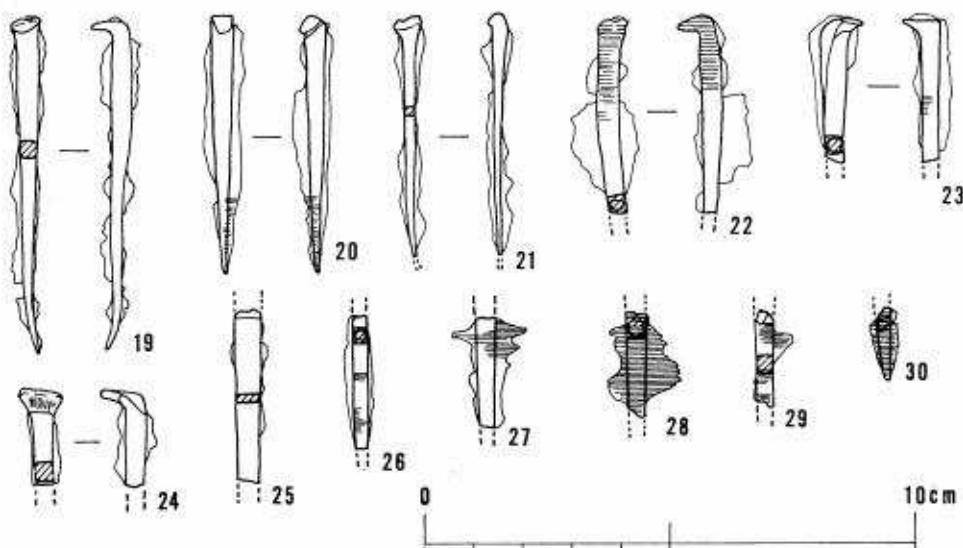
第23図 経塚出土銭貨拓影

杯（第22図 16） 1口 口径13.0cm、高さ3.2cm、底径5.6cm

石室内から出土した土師器杯であるが、口縁部、底部とも破片である。底部は糸切り痕があり、体部はヨコナデ。

鉄釘（第24図） 12本

釘は、合計12本が出土している。そのうち1本は、石組上面出土であるが、11本は石室内埋土から出土している。釘の法量は第3表に記す。釘の形状は、頭部の残っているものについてみれば、いずれも逆L字形をなしており、おそらく、釘はすべてこの形状をなしていたとみてよいだろう。



第24図 経塚出土遺物実測図(5)

No	全長(cm)	幅(cm)	断面形状	出土位置	備考
19	7.0	0.4	長方形	石組上面	
20	5.2	0.4	正方形	石室内和鏡下	木質残存
21	4.9	0.25	"	石室内埋土	
22	(4.0)	0.45	"	"	木質残存
23	(3.0)	0.3	"	"	"
24	(2.0)	0.5	"	"	
25	(3.5)	0.45	長方形	"	
26	(2.8)	0.25	正方形	"	
27	(2.3)	0.4	"	"	木質残存
28	(2.2)	0.4	"	石室内和鏡下	"
29	(2.0)	0.4	"	石室内埋土	"
30	(1.5)	0.3	"	石室内和鏡下	"

第3表 経塚出土鉄釘一覧表

経塚の造営年代

次に、この経塚が造営された年代について考えてみたい。この経塚の出土品には紀年銘が記されているないので、正確な年代は明らかでないが、出土した遺物のうち製作時期が判別できるものを手がかりとして推定していくという方法を試みてみた。

経筒については、多紀郡丹南町西山北経塚に法量や形状のよく似た筒身がある。^{註1} この経塚は上板井経塚と直線距離にして約4kmの位置にあり、大山荘・宮田荘を眺めるという立地は、両者ともよく似ている。この経筒も、古墳の墳丘に構築されたものであるが、盗掘のため遺構は破壊され、筒身も断片が残るのみである。復原された法量は、A経筒が11.6cm、蓋径13.5cm、総高24cm、B経筒が底径10.6cmである。上板井経塚の外筒の法量は、高さ24.7cm、口径19.0cmで、中に入っていた経筒の法量は当然これより小さいはずであるし、経筒の破片から復原した口径が12.8cmであることからすれば、西山北経塚の経筒と比較して、さほど法量の違いがあるとは思われない。また、焼成が土師質であることも共通しこの両者が時期差をもたず製作された経筒であると考えられる。なお、西山北経塚の造営年代は、嘉定通宝（南宋1213年初鋤）が出土すること、明鏡が出土しないこと、瓦器皿片が伴うことなどから鎌倉時代前半～中頃に比定されている。

和鏡は、3面が出土している。鎌倉時代に入ると、鏡は、平安時代と比較して文様が写実的になり、鏡胎や外縁は厚手になるという特徴をもつ。^{註2} これを基準にこの3面を検討すると、網双鳥文鏡は3面中最も古く平安時代後期、草花流水双鳥文鏡はそれよりもやや新しい。山吹蝶鳥文鏡は、より鎌倉時代的な特徴が顕著になり始めているので、平安時代末期から鎌倉時代初頭の過渡期に製作されたものであろうと思われる。同時期に製作されていない3面が埋納されたことについては、鏡が伝世品であることを考慮すれば矛盾はない。経塚の造営年代は、最も新しいと考えられる山吹蝶鳥文鏡が手がかりになる。

青白磁の合子は、特異な形態をもち、中国宋からの舶載品である。わが国では数例しか出土例がない優品である。^{註3・4} そのうち、愛媛県石手経塚のものは、保元元年（1156）銘の経筒と共に出土していることから、この形態の合子は、12世紀前半から中頃にかけて輸入されたものと考えられている。^{註5} したがって、上板井経塚出土例も、ほぼこの時期に日本にもたらされたと考えられるが、この種の優品は、伝世される可能性も高いことから、すぐに経塚の造営年代と結びつけることはできない。

須恵器小皿と土師器杯は、日常雑器として頻繁に使用されたため破損しやすく、鏡や青白磁のように伝世することのはほとんどない器種である。当地方ではこれらの一括資料に恵まれないため、他地域と比較することになるが、播磨本町遺跡溝10や井戸1の出土遺物、魚住古窯跡群^{註6} 例をみると、およそ12世紀中頃から12世紀後半の年代を与えることができそうである。

最後に、経塚の年代を推定する上で若干の問題を含む土器について述べることにする。この

土壙は、藏骨器として使用され単独出土例が多く、製作時期を決しがたいが、端部が外側に肥厚する口縁は13世紀半ばをさかのぼることはないと考えられる。このため、これまで述べてきた遺物がすべて13世紀初頭までに製作されたものと仮定すると、約半世紀ほどの時期差を生じることになる。土壙の破片は、石室内・外筒内から出土しており、石組上面からまったく出土しなかったこと、破片数が少ないとから、土壙は造営当初から完形品として位置していたとは考えがたい。仮に、完形品として存在していたと考えると、石室内にはそのスペースはないので石組内にあったことになり、石組中から破片が出土しないことと矛盾を生じる。このことから土壙は、造営時に石蓋の詰め物として破片が使用されたか、盗掘時に混入したものか、どちらかであろう。調査結果からは土壙の破片が石室内に入った時期について明らかにはできなかったため、この問題は留保しなければならないが、先に述べた遺物の年代観からすれば、土壙は後世に混入したものと考えた方が妥当であろう。

このように個々の遺物は、土壙を除いて考えれば、12世紀中頃から13世紀初頭にその製作年代を求めることができる。12世紀中頃の遺物が伝世品としての性格が強いことを考慮すれば、経塚の造営年代をおよそ12世紀末～13世紀初頭におくことが可能であろう。

註1 多紀郡文化財調査報告書第1冊『西山北古墳調査報告書』多紀郡教育委員会 1972

註2 前田洋子「和鏡の変遷」『考古学ジャーナル』185 1981

註3 奈良国立博物館『経塚遺宝』東京美術 1977

註4 奈良国立博物館『館蔵の経塚遺物』 1983

註5 亀井明徳「宋代の輸入陶磁 日本一出土品を中心としてー」『世界陶磁全集』12 宋 小学館 1977

註6 ほぼ同時期の資料は、近舞線板井・寺ヶ谷遺跡、西木之部遺跡で出土しているが、未整理のため判然としない。

註7 秋枝 芳・山本博利他『本町遺跡』姫路市教育委員会 1984

註8 大村敬通・水口富夫『魚住古窯跡群』兵庫県教育委員会 1983

註9 註(7) 土坑1 出土例などをもとに秋枝 芳氏に御教示を得た。

さて、今回は、多紀郡・水上郡内の経塚について触れることができなかつたが、現在までにわかっている丹波の経塚6カ所について一覧表にして記した。

名 称	所 在 地	出 土 遺 物	文 献
(1) 平石山経塚	多紀郡篠山町火打岩	陶製経筒、草花双鳥文鏡、須恵器、小皿(?)	①
(2) 小野原経塚	多紀郡今田町上小野原	銅製経筒	
(3) 西山北経塚	多紀郡丹南町西古佐	土師質経筒(2)、銅鏡(1)、瓦器皿	②
(4) 諸訪腰経塚	多紀郡丹南町味間奥	鉄製経筒(1)、須恵器(?)	②
(5) 丸山経塚	水上郡山南町奥丸山	松喰鏡、竹垣雀籠、合子	③
(6) 立石経塚	水上郡山南町草部立石	陶製陶筒、青白磁合子、刀子、銅鏡(1)	

文献① 奥田楽々斎『多紀郷土史考』上巻 1958

② 多紀郡文化財調査報告書第1冊『西山北古墳調査報告書』多紀郡教育委員会 1972

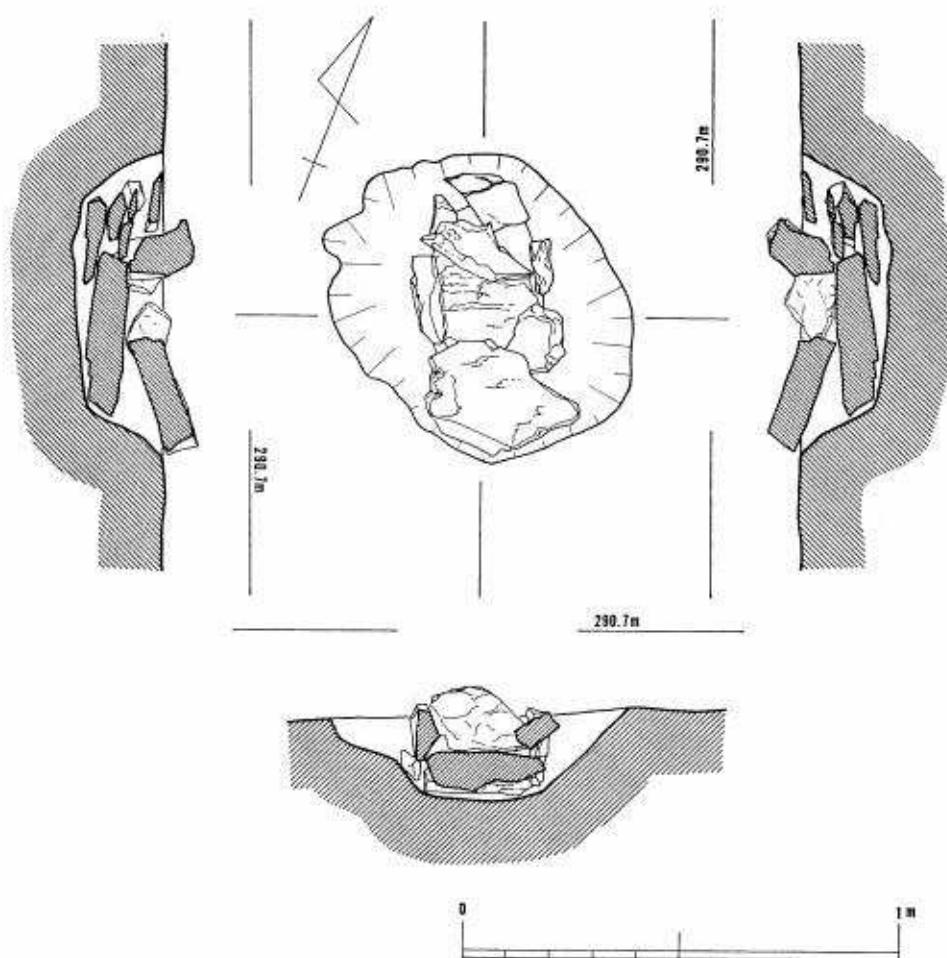
③ 高井悌三郎「兵庫県水上郡小川村丸山経塚」「日本考古学年報」6 1953

第6節 中世墓群の調査

1. 1号墓

1号墓は、1号墳北側の尾根上平坦面に位置する。墓壙は、基盤層である黄褐色の岩盤を掘り窪めており、その平面形は長軸を北西にとった不整長方形で、長辺約70cm、短辺約55cmを測る。壙底面はほぼ平坦であるが、西辺部分では2段壙状をなしている。また、墓壙の深さは約20cmである。

墓壙内には、チャート質の板石を用いて小石室を構築している。すなわち、壙底面に一辺約25×35cm、厚さ約8cmの板石を主軸に沿って縦長に据え、底石としている。底石の北寄り部分



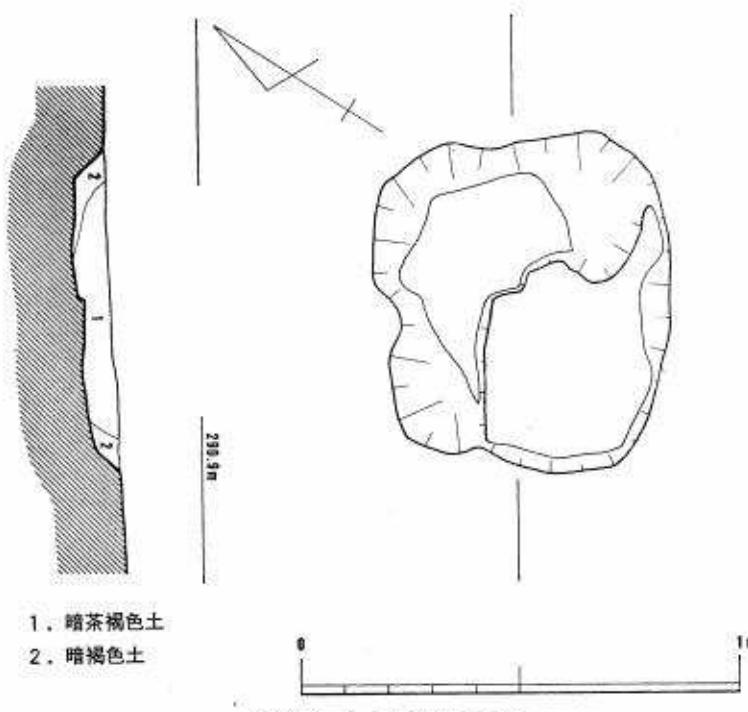
第25図 1号墓実測図

では、その下にさらに厚さ約3cmの薄い板石を置き、底石の安定を図っている。そのため底石上面は北から南にかけて若干傾斜をなす。底石の上には、10~20cm大の扁平な石材を横長に立て、四周を囲んで石室空間を作り出している。石室の規模は、現状で測定すると1辺約15cmのほぼ正方形を呈し、深さ約15cmを測る。石室壁材には、北辺と西辺に1個、東辺には2個の石が用いられていた。また南辺では、1辺25×35cm、厚さ7cmの板石が北側に傾斜した状態で認められた。この板石は、当初底石の上にはほぼ垂直に立てられていたものと思われるが、確証はない。あるいは現状で見られるように、板石の北小口部分を石室南壁としたものかもしれない。なお、石室の主軸方位はN-22°-Wにとり、墓壙の方位とは若干ずれている。

1号墓は、表土を除去するとすぐ石室石材が露出したもので、石室の上部構造については明確にし得なかった。石室内には淡茶褐色土が堆積していたが、遺物は全く出土しなかった。

2. 2号墓

2号墓は、1号墳墳丘上の北端部分に位置する。墓壙は、黄褐色の岩盤を切り込んで掘られており、墳壁は急角度をなす。その平面形は約65×75cmのはば長方形を呈し、長軸の方位をN-57°-Eにとる。墓壙底面は北半部と南半部で約2cmの落差をもつが、それぞれはほぼ平坦である。墓壙の深さは約7~8cmと、他の中世墓に比べてやや浅い。



第26図 2号墓実測図

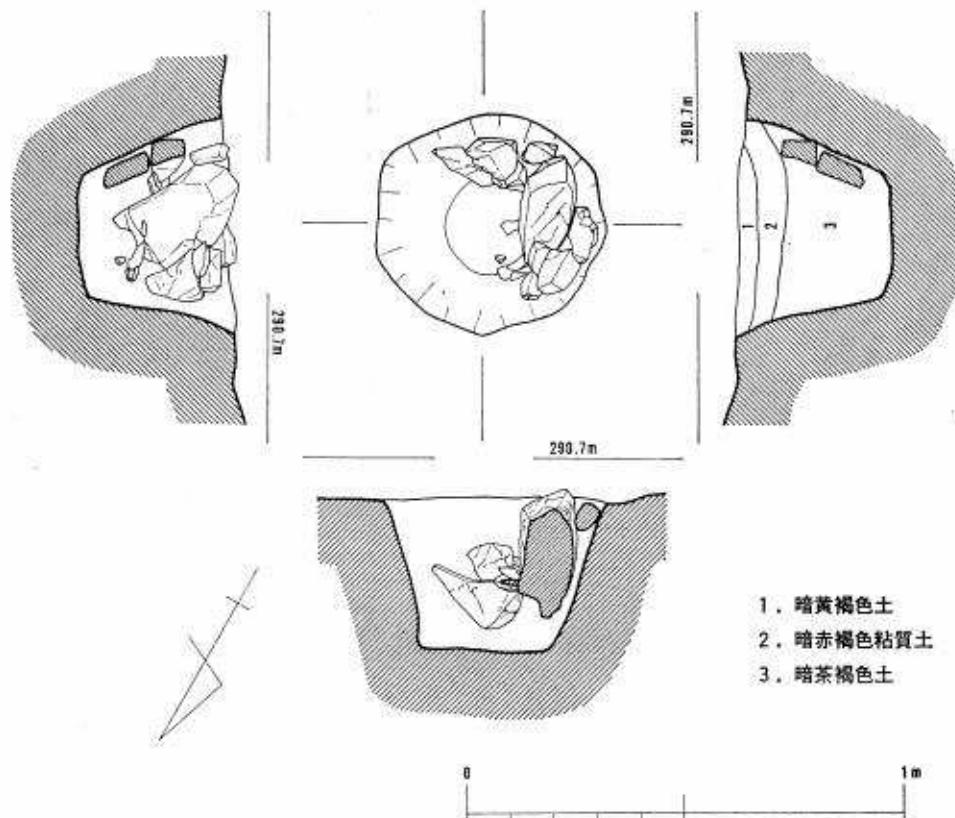
墳壁及び墳底の岩肌は火熱を強く受けて赤黒く変色していた。また墳内には、壁面沿いに炭化物を多量に混じた暗褐色の灰土層が認められ、その上にやはり炭、灰、焼土片が多く含んだ暗茶褐色土が厚く堆積していた。以上のように、2号墓はその墳内において火を使用した痕跡が明瞭であった。

遺物は、埋土中から鉄釘9本と、土師器皿が数個体分、多数の小破片となって出土した。土師器皿の破片には火熱を受けて器壁が変色したものが多く見られた。

3. 3号墓

3号墓は、墳丘上の東南寄りの部分に位置しており、4・5号墓に近接して築かれている。墓壙は、墳丘封土上面から切り込まれ、1号主体部墓壙の東南隅部分を破壊している。3号墓の墓壙は上面で直径約50cmのほぼ円形を呈し、また平面形の大きさに比して深く掘り込まれており、深さ約35cmを測る。底面はほぼ平坦である。

墓壙内の南寄りの部分では、1辺15×25cm、厚さ約10cmの大形の碟を中心として、それより

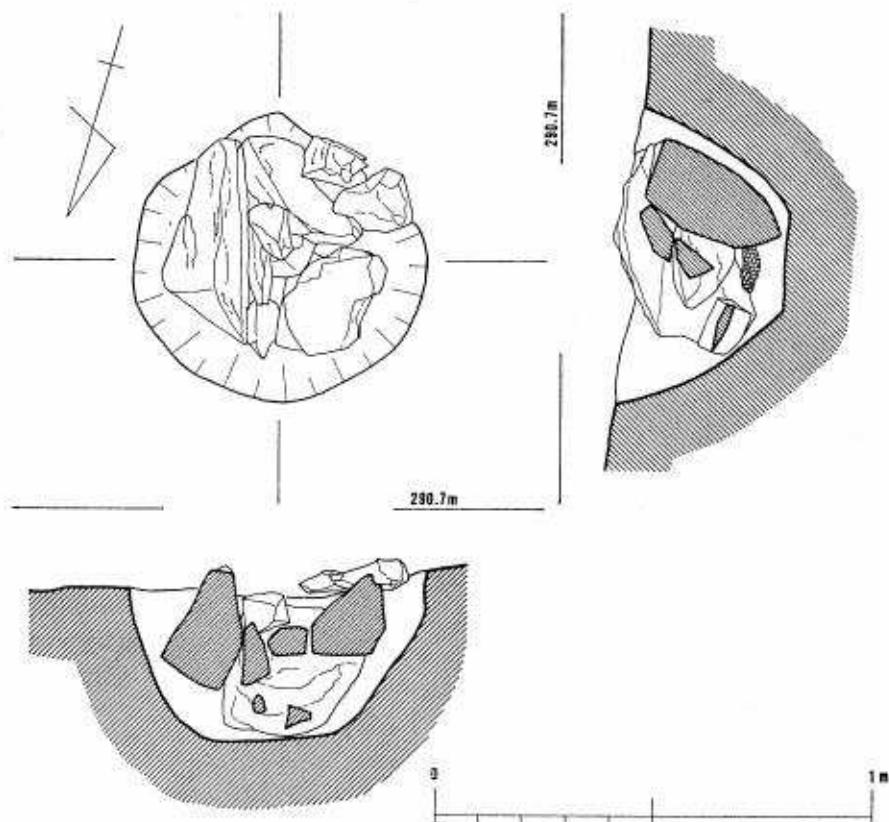


第27図 3号墓実測図

やや小さめの10cm大の角礫が10数個、南壁に沿って若干弧状を描くように配置されていた。その配置は、墓壙北半部分に残された直径25cm程の空間を意識したものと思われた。なお礫は、壙壁には接していたが壙底には接しておらず、底面から若干浮いた状態で検出された。

墓壙内には、下層に暗茶褐色の灰層が厚く堆積していた。また壙壁及び礫は、火熱を受けたと思われ表面が変色していたが、2号墓ほど明瞭な変化は見られなかった。

墓壙内からは炭化した木質が出土した。しかし小片のため、形状等は識別できなかった。その他の遺物は出土しなかった。また、墓壙内の灰土を持ち帰り水洗したが、骨片等は検出できなかった。このことは、後述する他の中世墓にも共通することである。



第28図 4号墓実測図

4. 4号墓

4号墓は、東南寄りの墳丘上にあり、3号墓と5号墓の中間に位置している。3・5号墓との間の距離は、墓壙端でそれぞれ約45cmと20cmである。4号墓の墓壙は、3号墓と同じくほぼ円形プランで、上面で直径約65cm、深さ約35cmを測る。壙底は平坦である。

壙内には、20~40cm大の角礫を用いて石組を形成している。しかし石組の構築状態は、3号墓と異なり、3方を礫で囲み、その中に小さな空間を作り出したものである。すなわち、壙の東寄りに約25×45cm、厚さ約15cmの大形の石を横長に置き、ほぼ平坦な面を西に向けて、石組空間の東辺としている。さらにそれを三角形の底辺として、斜辺には約30cm大の礫を2個配置している。以上の石組によって、その中央に南北、東西とも約15cmの小さな空間が形成されていた。なお石組の上部には、10cm前後の小形の礫3個が、石組の中に挿入されたような状態で検出された。また、石組の内外には暗褐色の灰層が充満していた。

出土遺物は、石組内空間の底面近くから炭化した木片が少量検出された以外に、何も認められなかった。

5. 5号墓

5号墓は、確認調査の際、南トレンチにおいてその存在が確認されていたものである。墳丘上に築かれた中世墓の中では、南端の最も眺望に望まれた場所に位置する。

また規模も大きく、墓壙は長軸107cm、短軸85cmの不整橢円形をなす。壙壁は急角度で切り込まれ、深さ約45cmを測る。

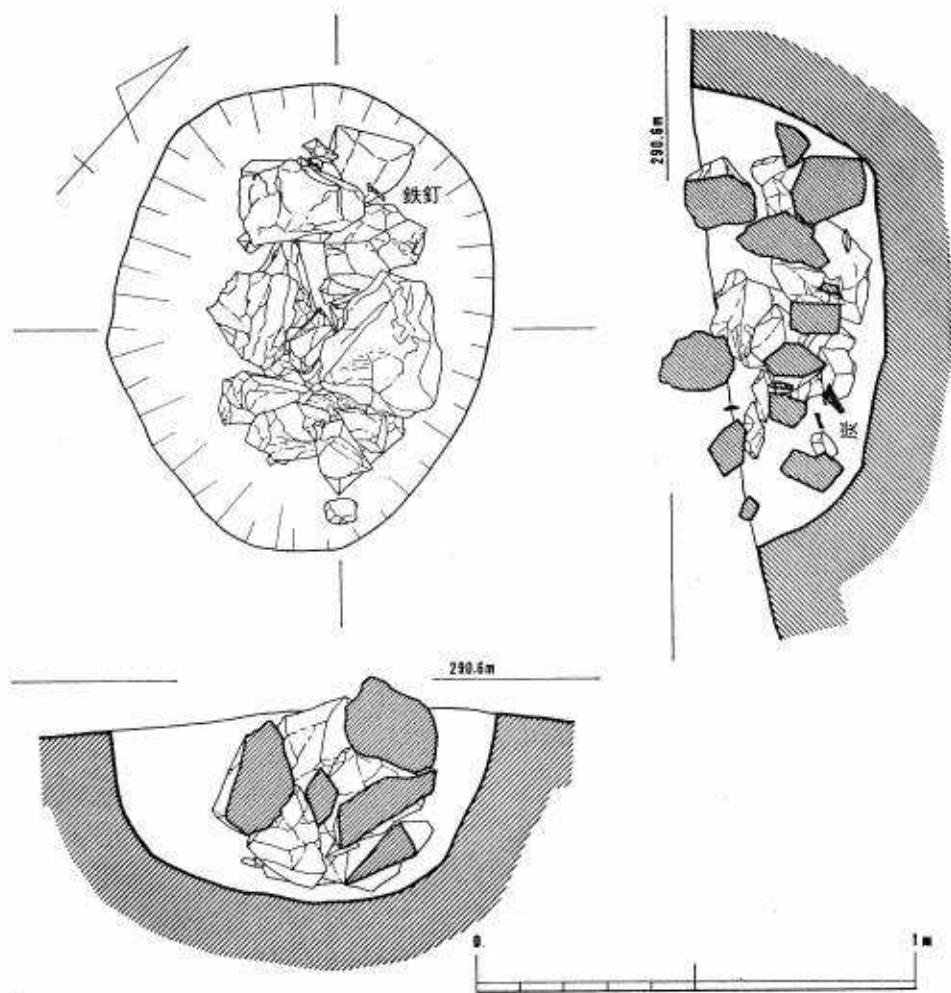
墓壙の中には、3号墓や4号墓と同様に角礫で石組を築き、その中央に小空間を作り出している。しかし、石組の構築状態は3・4号墓とは様相を異にしている。石組は、橢円形の墓壙に沿って北西一南東に細長く配置されており、その主軸の方位をN-42°-Wにとっている。石組は東辺では約20cm大の礫を使用し、内側の壁面をそろえるように2~3段積み上げている。他の3辺は1~2段である。北辺と南辺では礫を横長に置き、石組内空間の小口部分を意識しているように思われる。このようにして作り出された石組内空間は、長辺約35cm、短辺約10cmの細長いものである。

墓壙内には暗茶褐色を呈する灰層が充満し、また、石組中には焼土粒を含む茶褐色土が堆積していた。壙壁及び大部分の礫はよく火を受けていたが、礫の一部には火を受けた痕跡が明瞭でないものも認められた。

遺物は、石組内底面近くから炭化物小片、また石組北寄りの部分で鉄釘が1本出土した。

6. 6号墓

6号墓は、1号墳1号主体部墓壙上のほぼ中央部分に位置し、経塚にごく近接して築かれて



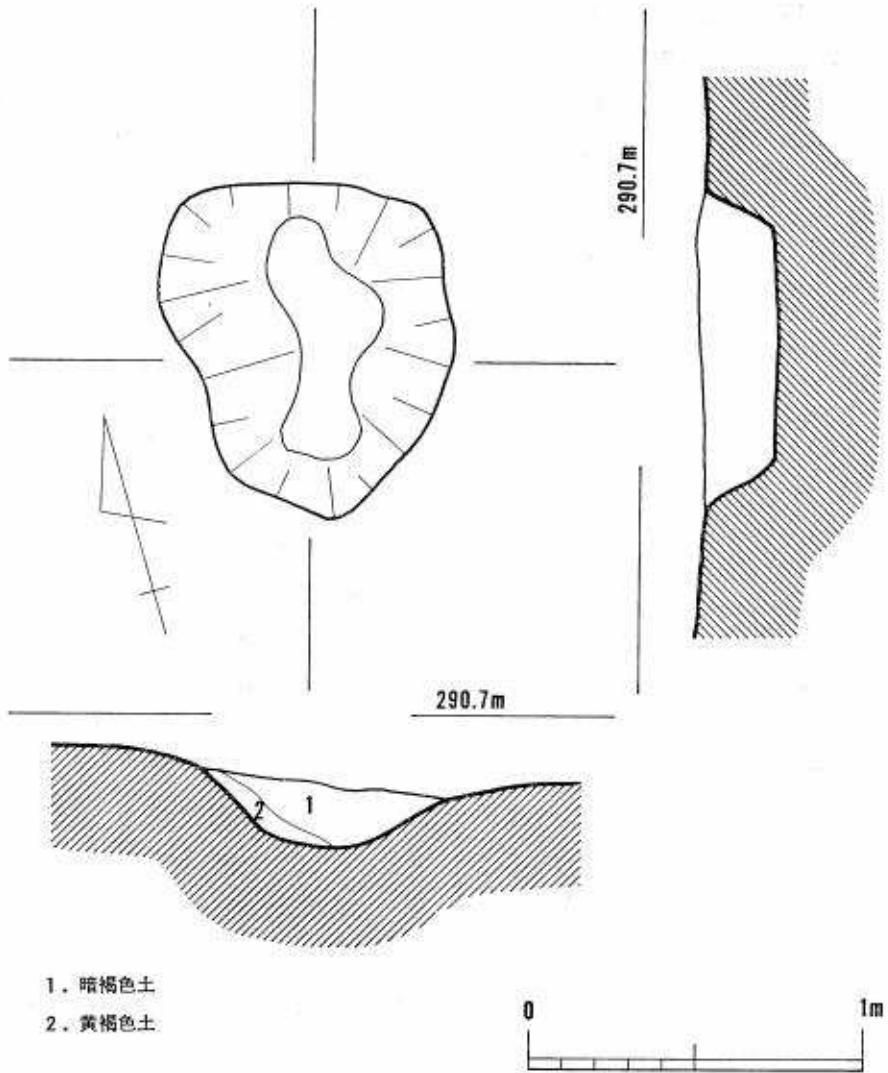
第29図 5号墓実測図

いる。経塚とは最短距離で約15cmである。

墓壇は、南北約65cm、東西約55cmの南北に若干細長い不整形で、深さは約15cmと比較的浅く、壇底面はほぼ平坦である。なお、壇内には石組をもたず、暗褐色の灰層が堆積していた。遺物は、埋土中から鉄釘の小破片が出土した。

7. 7号墓

7号墓は、墳丘裾から約3m東寄りの尾根上に位置する。他の中世墓とは離れて、7号墓のみ単独で存在している。



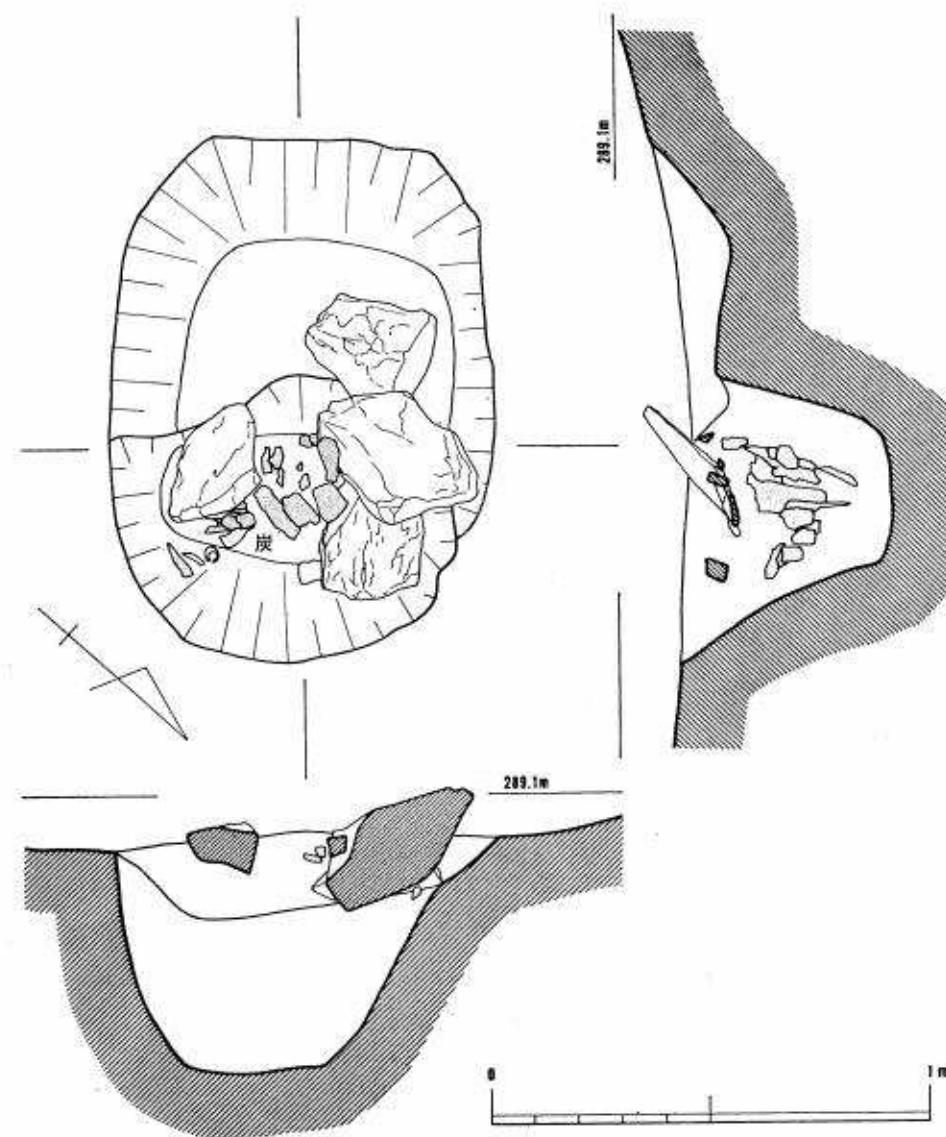
第30図 6号墓実測図

7号墓の形態上の大きな特徴は、墓壙が2段に掘り窪められていることである。墓壙は上面で長辺約120cm、短辺約90cmの不整長方形をなしている。西半部では深さ約10cm程に浅く掘られ、東半部では南北約75cm、東西約65cmの範囲が約50cmの深さまで掘り窪められている。

墓壙上部には、約30cm大の大形の角礫を北辺沿いに3個、南辺沿いに1個配置し、その間に幅15cmの空間を作り出している。空間内からは木質の炭化物が少量認められた。また墓壙東半部の深さ15~40cmにかけての部分からも同様の炭化物が検出された。しかし炭化物は非常に脆弱になっており、取り上げに成功しなかった。

墳壁及び石組の疊は火熱を受け変色しており、また墳内には焼土粒を含んだ暗茶褐色の灰層が厚く堆積していた。遺物は、上記の炭化物以外、何も出土しなかった。

7号墓の墓壙が2段になっていることについては、調査当時、2基の重複かとも考えた。疊の配置が墓壙上面のみに限られ、東半部の深い部分には認められなかったことから、墓壙の浅



第31図 7号墓実測図

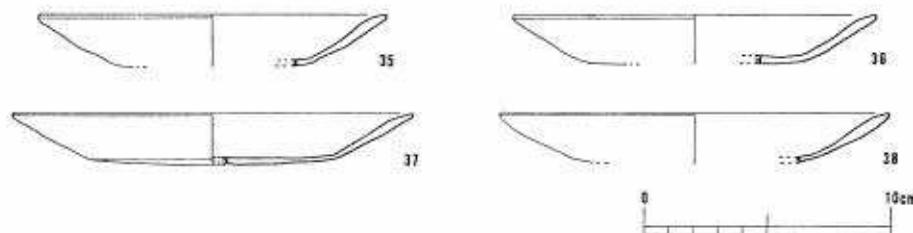
い方が後に掘られた可能性も考えられる。しかし、調査中に検出面及び土層断面を観察したが2基の重複であると断定し得る積極的な根拠を見い出せなかった。

8. 出 土 遺 物

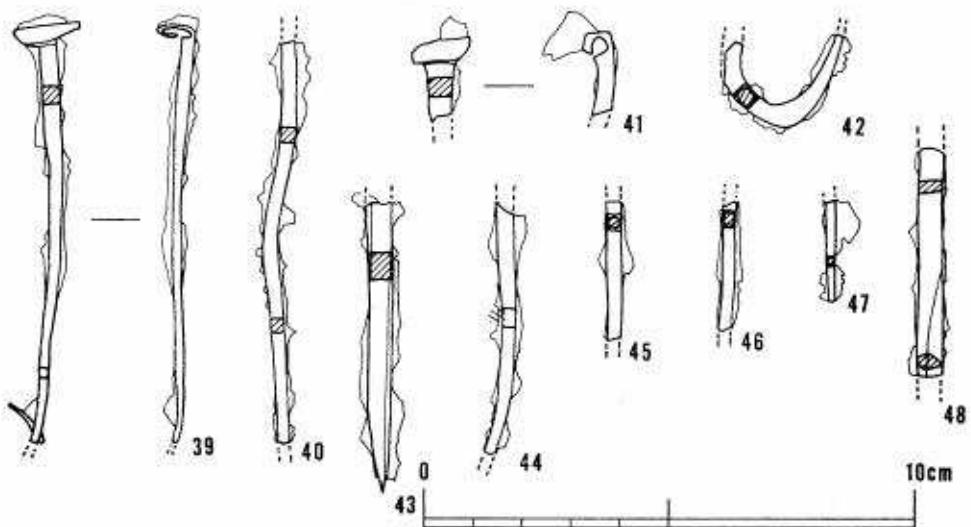
今回調査した7基の中世墓のうち、遺物を出土したものは2・5・6号墓のみである。

5・6号墓からは、鉄釘がそれぞれ1本ずつ出土した。5号墓のもの（第33図48）は両端部を欠き、残存長4.6cmを測る。6号墓の鉄釘は小破片のため図示し得なかった。

2号墓からは、土師器皿（第32図35～38）と鉄釘（第33図39～47）が出土した。皿は多数の小破片となっていて接合せず、個体数の確認が困難であったが、4個体までは数えることができた。口径14.1～16.2cm、器高2.1cm前後を測り、体部の外傾度の強い製品である。底部から体部にかけてゆるやかに立上り、口縁端部は肥厚して内側に若干面をもつ。器壁は火熱を受け器表が荒れ、桃褐色～灰褐色に変色していた。口縁部はヨコナデ、体部外面下半には指頭圧



第32図 中世墓出土遺物実測図（1）



第33図 中世墓出土遺物実測図（2）

痕がみられ、底部は37では内外面ともナデ調整している。

鉄釘は計9本出土したが、そのほとんどが破片となっており、全形を窺えるのは39のみである。39は、先端部が1.1cmほど折れているが、折れた先端部分は基部側に銹着しており、全長9.7cmと推定できる。頭部は断面方形の鉄棒の一端を叩きのばし、内側に2回折り曲げて作り出している。頭部は長さ1.4cm、幅7.6mmである。また41は頭部、43と47は先端部の破片である。

上記の遺物の他、今回の調査では1号墳及び2号墳の表土中より少量の遺物が出土した。遺物は各時期にわたるが、それらについてもここでまとめて報告する(第34図)。なお図示した他、1号墳墳丘表土より鉄釘3本、寛永通宝の鉄錢3枚等が出土した。

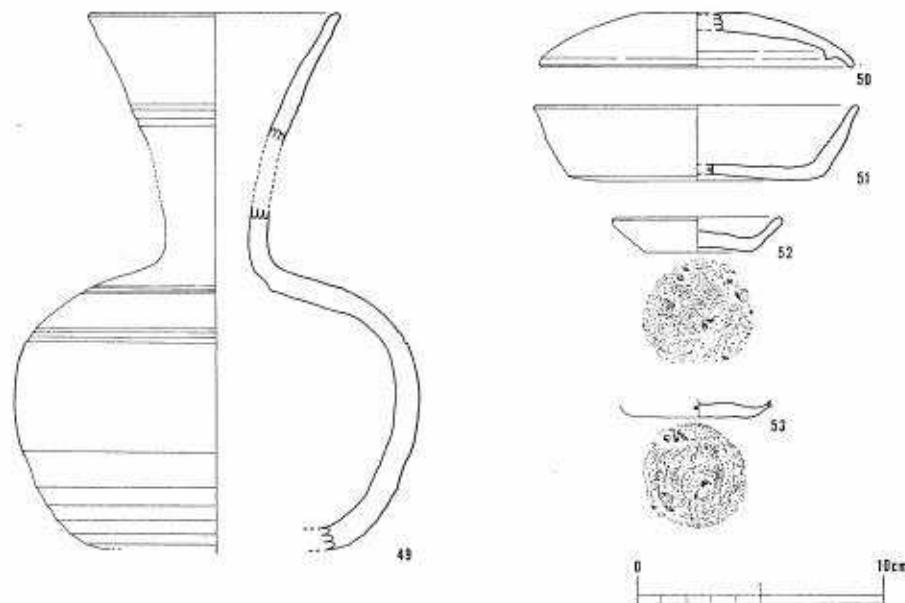
第34図49~53は、1号墳墳丘表土中より出土したものである。

49は、口径10cm、胴部最大径16.3cmの須恵器長頸壺である。頸部と肩部には2本1組の沈線を3条施しており、胴部下半をロクロヘラケズリしている。

50は、須恵器杯蓋で口縁端部内側に小さなかえりを残している。口径12.6cm、器高2.2cmを測る。

51は、口径13.2cm、器高3.1cmの須恵器杯である。体部と底部の境は明瞭な稜をもち、体部は斜上方に直線的に立上る。外底部は板目状圧痕が認められ、内底部には強いナデの痕跡がある。

52・53は、須恵器小皿である。52は、口径6.8cm、器高1.5cmを測り、分厚い底部から短い体部が立上る。53は、底部のみの破片で底径4.2cmを測る。これらは経塚周辺より出土したもので、経塚に関係する遺物の可能性もある。



第34図 表土採集遺物実測図

第4章 まとめ

上板井古墳群

古墳群の選地 上板井古墳群は、篠山盆地の北西隅に位置し、黒頭峰から南東にのびた尾根上に立地する。古墳群は2基の古墳で構成されており、1号墳は尾根の先端部を占め、2号墳は1号墳から約55m離れた尾根上に築かれている。

古墳群は眺望の非常に良好な場所を選地しており、なかでも1号墳からは、上板井から大山にかけての宮田川流域の小平野を見わたせる。その平野は、東西約1km、南北約3kmで宮田川が狭い谷あいより抜けてやや流域を拡大した部分にあたり、流域の中では最も可耕地の広い地域である。しかし、篠山盆地の中央部分は、下板井から川北にかけての低丘陵にさえぎられ、古墳群からの視野に入らない。したがって、古墳群の被葬者達が有していた政治、経済的な基盤は、宮田川流域の比較的限られた範囲に求めることができるであろう。また、宮田川流域は篠山盆地の北の出入口にあたり、篠山町、柏原町、丹後地方等各方面からの交通路が一斉に交わる要衝でもある。すなわち、上板井古墳群は、宮田川流域の比較的広い可耕地と、そして交通の要衝を掌握できる場所を選地しているわけである。

1号墳 1号墳は、直径約14mの円墳である。墳丘は尾根の先端を削り出すことによって墳形を整えており、また墳丘には葺石をもっている。

主体部は墳丘上に4基を検出した。そのうち、1～3号主体部は割竹形木棺、4号主体部は箱式石棺である。3・4号主体部は、その規模から小児を埋葬したと考えられる。4基の主体部は墳丘縁辺に方形に配置され、墳丘中央部には何の施設も設けられていない。この空間は、そこに予定されていた埋葬が行われなかったためなのか、あるいは祭祀など何らかの目的意識のもとに空けられていた場所なのか、その意味については明らかでない。

遺物は少く、1号主体部から鉄剣、鉄斧、鉋、2号主体部から鉄剣、鉄鑿、不明鉄製品が出土したのみである。

2号墳 2号墳は直径約13mの円墳である。1号墳同様、尾根を削り出して墳形を整えており、葺石はもっていない。主体部は墳丘中央部に組合式木棺を1基検出した。主体部の墓壙は、木棺の長側板を安定させるために壙底の両小口部分を溝状に掘り、その結果小口の中央部分が尾根状に掘り残された特異な形態をとっている。副葬品は、棺底から内行花文鏡と玉類が出土し、また棺外から鉄刀子1本が出土した。

古墳群の時期 古墳群の時期については、明確な時期を示す土器が伴っておらず、にわかに決定しがたい。しかし、古墳群の立地、墳形、規模、外部施設、内部主体、出土遺物等の組合せは、古墳時代中期の特性を有するものと言つうことができよう。1号墳1号主体部から出土し

た鉢は、茎部よりやや幅の広くなった縁形の刃部をもつものである。刃部は基部側を欠き現存長3.6cmを測るが、推定復原長が4.0cmほどになる。この形態の鉢は古瀬清秀氏の分類によると、Ⅱb類に属し5世紀代のものとされている。また、2号墳から出土した内行花文鏡は、面径7.65cmを測る小型鏡で、5世紀代中頃以前の所産とすることができるものである。以上のことなどから、一応ここでは古墳群の時期を4世紀末～5世紀前半代を前後する時期と考えておきたい。なお、1号墳と2号墳の先後関係についてはさらに細かい時期決定が必要であり、現状では明らかにできない。ただ1号墳の方が、尾根の先端部を占地しました葺石をもつなど、立地、施設等に優位性が認められるため、築造が先行した可能性が高いと考えられる。ただし1号墳においては、4基の主体部の埋葬が行われる間、ある程度の時期幅があったと推察できるが、その時期幅と2号墳の築造年代の重複関係については不明確である。

被葬者の性格 上板井古墳群の時期は、4世紀末～5世紀前半代を前後する時期と考えた。しかし、竪穴式石室、粘土棺等の施設を備えておらず、特に1号墳においては、割竹形木棺の直葬と箱式石棺の埋葬であり、また主体部の副葬品も武器、工具の組合せのみであるなど、その内容は貧弱である。さらに1号墳は墳丘上に多数埋葬を行っている点に特徴がある。これは、弥生時代における集団墓のあり方の延長線上にあり、その性格として在地的な要素を強くもつと言える。また墳丘の築成方法についても、ほとんど地山整形によるもので、これも同様の系譜を引くものであろう。

上板井古墳群の周辺地域では、古墳群から南方へ約800m離れた場所に内場山城跡がある。^{註3} 内場山城跡では、独立丘陵の先端に築かれた弥生時代末期～古墳時代初頭にかけての集団墓が発掘調査された。もちろん上板井古墳群は、それから直接連続するものではないが、その流れを汲むと言うことはできよう。

以上のように、上板井古墳群の被葬者は、宮田川流域の限られた地域を経済基盤にもち、軍事、交通の要衝を押えた、在地的な首長ととらえられるのではなかろうか。そのあり方は、篠山盆地中央部における雲部車塚古墳や新宮古墳等、典型的な畿内の要素の強い中期古墳のあり方と対照的であり、篠山盆地の古墳時代社会を考える上で興味ある資料を提供したと言える。

上板井経塚と中世墓群

上板井経塚 上板井経塚は、1号墳の墳丘を利用して築かれた経塚で、墳丘上でも最も眺望の優れた南西縁辺部に位置している。経塚の内部構造は、直径約1.2mの壙を掘り、その中に板石を用いて小石室を構築したものである。石室と壙壁との間には角礫を詰め、石室の控石としている。石室の中からは土師質経筒、須恵質外筒の他、和鏡3面、刀子、銭貨、土師器杯・壷、鉄釘が出土した。経巻についてはその痕跡を認めることができなかった。和鏡と刀子はほぼ原位置を保っていたが、その他の遺物は、後世の擾乱によって散乱状態になっていた。また

鉄釘は石室内から合計11本が出土したが、その本数、及び和鏡の下位からほぼ原位置のまま出土したものが1本認められること等から、外筒を納める木櫃が存在したことを推察できる。しかし、和鏡、刀子等の副納品が木櫃内であったかどうかは、出土状況から判断できなかった。遺物は、その他に石組上面から青白磁合子、須恵器小皿、鉄釘1本、元豊通宝が出土した。特に合子は身の内に杯形容器が3個ならぶ優品で、わが国では数例しか出土例のない注目すべき遺物である。

経塚の築造時期については、前章で詳述しているように、およそ12世紀末～13世紀初頭に求めることができる。また石室内から破片で出土した土師器壙は、13世紀中頃以降のものと考えられるので、後世の混入品である可能性が高く、それが経塚開封の時期を示すものかもしれない。

中世墓群 中世墓は、1号墳墳丘上及びその周辺で合計7基を発掘調査した。ここで中世墓としたものは、骨片あるいは藏骨器等がなく、墓と断定し得るに足る積極的な根拠を欠いている。しかし今回は、一応墓として報告を行った。

1号墓は墳丘外北側、7号墓は同じく南側に位置しており、その他は墳丘上にある。その配置は、3～5号墓が比較的集合している以外は、それぞれ単独で存在しており、その配置に規則性はみられない。

7基の中世墓は、円形あるいは楕円形の墓壙を掘り込んだもので、形態、出土遺物等から3つのタイプに分けられる。まず1号墓は、墓壙の中に底石を置き、底石の周囲を礫で囲んで小石室を作るもので、その構築手法は上板井経塚のそれと共通するところがある。次に2号墓と6号墓であるが、いずれも素掘りの浅い墓壙で、壙壁が焼け、壙内に灰土が堆積するなど、墓壙内において火を使用した痕跡が明らかである。しかし遺物の出土状態は互いに異っており、2号墓が多量の鉄釘と土師器皿の破片を出土したのに対し、6号墓からはわずかに鉄釘の破片のみであった。2号墓では、鉄釘を使用した何らかの構造物が土師器皿とともに焼かれたものと考えられる。最後に、3～5・7号墓は、規模の差はあるけれどもすべて墓壙の中に角礫で石組を築いたものである。石組の中央には小空間を作り出しており、壙壁及び礫の大部分は火熱を受けている。石組の内外には灰土が充満し、また石組内から炭化した木質が出土した。したがって、3～5・7号墓では、墓壙を掘り石組を設けた状態で火を使用したと考えられる。以上、7基の中世墓にみられる構築手法の差異について述べてきたが、この差が遺構のどのような性格を反映したものかは判然としておらず、その解決は今後の検討に委ねたい。

これら中世墓群の築造年代は、決め手となる出土遺物が少いため明確にできない。2号墓から出土した土師器皿についても、当地域における土師器の分類、編年が確立していない現状では、確実に時期を押えることが不可能である。ただ、隣接する播磨地方では、姫路市坂本城跡や同市御着城跡等から類似例が出土している。また平安京における編年からみても、2号墓の時期

をおよそ15世紀代に求めて大過ないと考えられる。他の中世墓においては、時期不明と言わざるを得ないが、1号墓のみは経塚と構築手法が似通っており、壙内での火の使用も認められないため、経塚とほぼ併行する時期と考えてよいかも知れない。^{註7}

造営の背景 次に上板井経塚及び中世墓群が築かれた背景について若干述べ、最後としたい。これらの遺構の性格を考えると、山麓に点在する同時期の遺跡が手がかりになると思われる。上板井経塚が望む宮田川流域の小平野は、近衛家領宮田荘の中心地域をなしており、荘域と推定される地域から多くの遺跡が発見されている。上板井経塚の南東麓の微高地上には、平安～鎌倉時代にかけての集落遺跡である板井・寺ヶ谷遺跡がある。この遺跡からは、掘立柱建物跡7棟を始め、溝、井戸、土壙墓等が検出され、青磁、白磁、綠釉陶器、墨書き土器、石帶、硯、銅鏡、呪符木簡等注目すべき遺物が多数出土している。遺跡は、その西方約50mの位置に現存する興法寺を中心とした集落あるいは寺域の一部をなすと考えられる。また、上板井経塚から尾根を東南へ約140m下った地点では、昭和54年の町道板井・東光寺線建設の際、尾根を削り取った土砂中から白磁碗、刀子が出土しており、12世紀中葉～13世紀初頭の中世墓の存在が推定されている。^{註8} さらに北麓斜面の沢の浦坪古墳群では、1号墳石室周辺から骨片とともに白磁碗、瓦器碗、和鏡等が出土した。遺構は検出されなかったが、石室を再利用した12世紀～13世紀にかけての墳墓の存在が推定できる。上板井経塚は、以上のような政治、経済、宗教的な基盤、環境のもとに成立したと考えられ、またそれは前章まで述べている様に、三嶽を中心とした山岳信仰とも深く結びついたものであったと思われる。

註1 古瀬清秀「古墳出土の施の形態的変遷とその役割」『考古論集』 1977年

註2 森 浩一「古墳出土の小型行花文鏡の再吟味」『日本古文化論叢』 1970年

註3 「内湯山城跡現地説明会資料」 兵庫県教育委員会 1980年

註4 「特別展 掘り出された城下町・姫路」 兵庫県立歴史博物館 1985年

註5 「御着城跡発掘調査概報」 姫路市教育委員会 1981年

註6 泉 拓良編「白河北殿北辺の遺跡」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ 1981年

註7 秋枝 芳、長谷川真両氏の御教示による

註8 「板井・寺ヶ谷遺跡現地説明会資料」1・2 兵庫県教育委員会 1984年

註9 福原潜次郎「多紀郷土史話」 1934年 興法寺は現在わずかな堂宇が残っているだけであるが、「興法寺千軒」の伝承が示すように中世には成立しかなりの寺坊があったとされている。しかし、寺の存続年代等不明な点が多い。

註10 関田章一「多紀郡西紀町上板井出土の白磁碗」『兵庫考古』第16号 1982年

註11 「沢の浦坪古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』 1986年 兵庫県教育委員会

付載 和鏡の材質

奈良国立文化財研究所 肥塚 隆保

はじめに

出土遺物、特に木製遺物や金属製遺物は、出土後自然状態に放置しておくと、急激な環境変化等により、劣化し現形までも損なう事が多くある。出土する大半の金属製遺物は、鉄、銅、青銅を材料としているが、これらはサビの進行とともに劣化が急激である。最近では、このような金属製遺物は、出土後早急に保存処理して展示、保管される事が一般的になってきた。

今回は、青銅鏡4面（和鏡3面と内行花文鏡1面）を保存処理するために、事前調査を依頼されたもので、その結果についてまとめてみた。

事前調査は、④X線透過写真による腐食状態の判定とサビ層下の文様の確認等の内部構造の調査、⑤螢光X線分析法（非破壊的手法）による材質の調査、⑥X線回析粉末法によるサビの化合状態の判定である。ここでは主として⑥の材質の調査結果について述べる事とする。

分析試料

試料は、青銅鏡4面でありその外観上の特徴は次のようであった。

H G P-17：西紀町上板井2号墳出土の内行花文鏡で、全面にわたりその表面は淡黒色の光沢を呈している。鏡面一部に白色のくびい光沢を示すところがある。また、鏡面には、直径3～5mm程度の斑点状の孔食が見られ、淡緑色のブロンズ病にかかっているサビが観察できる。全体として、残存状態は良好である。

H G P-18：上板井経塚出土の網双鳥文鏡で、全面にわたりその表面は暗緑色でくびい光沢を有する。破断面の観察から、内部は淡緑～緑色のサビになっているようである。他の鏡に比べ特に薄く、平均約0.3mm程度であり数片にわれているが、残存状態は良い。

H G P-19：上板井経塚出土の草花流水双鳥文鏡で、文様面は暗緑色を呈するが、鏡面は灰緑色で、くびい光沢を有する。保存状態は良好である。

H G P-20：上板井経塚出土の山吹蝶鳥文鏡で、H G P-19と同様である。いずれの青銅鏡も表面はサビで覆われている状態であった。大半のサビは、地金をそのまま変質させたような平滑な状態であり、大きく腐食したり、析出しているような状態ではなかった。

分析方法

材質分析は、螢光X線による非破壊的手法によった。そのため、金属表面のサビた層しか分析できず、結果は定性的なものにとどめた。しかし、遺物どうしの比較のため錫／鉛のX線ピーク強度比から相対的な値を求め、材質の特徴をとらえる事にした。そのためにまず、鏡面の数箇所の銅、錫、鉛X線ピーク値' (CuK β -II, SnK α -I, PbL γ -I) を測定し、各測定値から(錫／銅) X線ピーク比をY軸に、(鉛／銅) X線ピーク比をX軸にとり、散布図上にプロットする。次に、原点から各プロットした点を通る最適の直線を求め、その傾きをその遺物の錫／鉛の含有量相対値として比較する。その結果、傾きが大きい方がより錫の含有量が多い事を示す。

サビの分析は、HGP-20の試料から、表面に薄く板状にくっついている緑色～淡緑色のサビをはがして行った。試料は5～10mg程度で、200mesh以下の粉末にした後、無反射試料板上に、アルコールと粉末試料を混合して均一に塗布し、X線回析法により分析した。他の遺物は同様なサビであったり、形状を損う恐れもあったため、試料採取は行わなかった。

螢光X線、X線回析分析の測定条件は以下に示す。

螢光X線分析条件	
管 球：クロム	分光結晶：弗化リチウム
電 壓：40KV	電 流：20mA
検出器：シンチレーションカウンター	
走査速度：1度／1分	走査範囲：10～90度(2θ)

X線回析分析条件	
管 球：鉄	フィルター：マンガン
電 壓：30KV	電 流：10mA
スリット：1度～0.15mm～1度	
走査速度：1度／1分	走査範囲：5～120度(2θ)

分析結果

螢光X線による定性分析の結果は次のようにになった。

HGP-17：銅、錫、鉛を主成分とする青銅合金であり、副成分として、銀、砒素、鉄を検出した。錫／鉛の相対的な含有比を示す直線の傾きは、1.83であった。

HGP-18：銅、錫、鉛を主成分とする青銅合金であり、副成分として、銀、砒素、蒼鉛、鉄を検出した。同様に求めた直線の傾きは、0.43であった。

HGP-19：銅、錫、鉛を主成分とする青銅合金であり、副成分として、銀、砒素、蒼鉛、鉄を検出した。同様に求めた直線の傾きは、0.45であった。

HGP-20：銅、錫、鉛を主成分とする青銅合金であり、副成分として、銀、砒素、鉄を検出した。蒼鉛は、検出限界以下であった。

以上、いずれの鏡も、銅、錫、鉛を主成分とする青銅合金であった。副成分として検出した銀、砒素は、和鏡のいずれも、内行花文鏡（HGP-17）よりX線ピークが数倍高く、含有量も多い事が考えられる。これらの元素は原料の中にもともと不純物として混入していた可能性もあるが、意識的に混合された可能性も考えられる。

また、主成分の中の錫／鉛の相対含有量比を示す直線の傾きは、内行花文鏡に比べ小さく、錫の含有量が少い事を示している。また、従来の報告によれば、古墳出土の青銅鏡の場合、同様な手法により求めた直線の傾きが1より小さいものは、日本製の青銅鏡に多く、1より大きいものは、中国製の青銅鏡に多い傾向がある。もちろん例外的なものも存在するようである。サビの分析結果は、塩基性炭酸銅 [$\text{CuCO}_3 \cdot \text{Cu}(\text{OH})_2$] で、これに石英も検出した（第4表参照）。このサビは、銅化合物のサビの中でも、ちみつなもので表面に形成した場合内部を保護する働きがあり、遺物にとっては良いサビである。また、サビの中に石英が混入していた事から、埋蔵中にサビが形成されたもので、出土後に形成されたものではないと考えられる。

	2θ	d	I/I_0	hkl	Formora
1	18.7	5,957	56	020	$\text{CuCO}_3 \cdot \text{Cu}(\text{OH})_2$
2	22.2	5,027	100	120	"
3	23.8	4,694	13	200	"
4	30.5	3,680	93	220	"
5	33.7	3,339	13	101	SiO_2
6	37.3	3,027	13	310	$\text{CuCO}_3 \cdot \text{Ca}(\text{OH})_2$
7	38.0	2,973	11	040	"
8	39.6	2,857	49	201	"
9	40.8	2,777	11	320	"
10	45.3	2,513	42		"
11	46.1	2,472	7	201	"
12	46.4	2,457	9	330	"
13	48.6	2,352	13	400	"
14	49.6	2,307	9	231	"
15	52.6	2,187	9	041	"
16	54.2	2,125	13	250	"
17	56.2	2,062	9	311	"
18	58.8	1,972	7	321	"
19	59.9	1,939	11	160	"

第4表 和鏡螢光X線分析結果一覧表

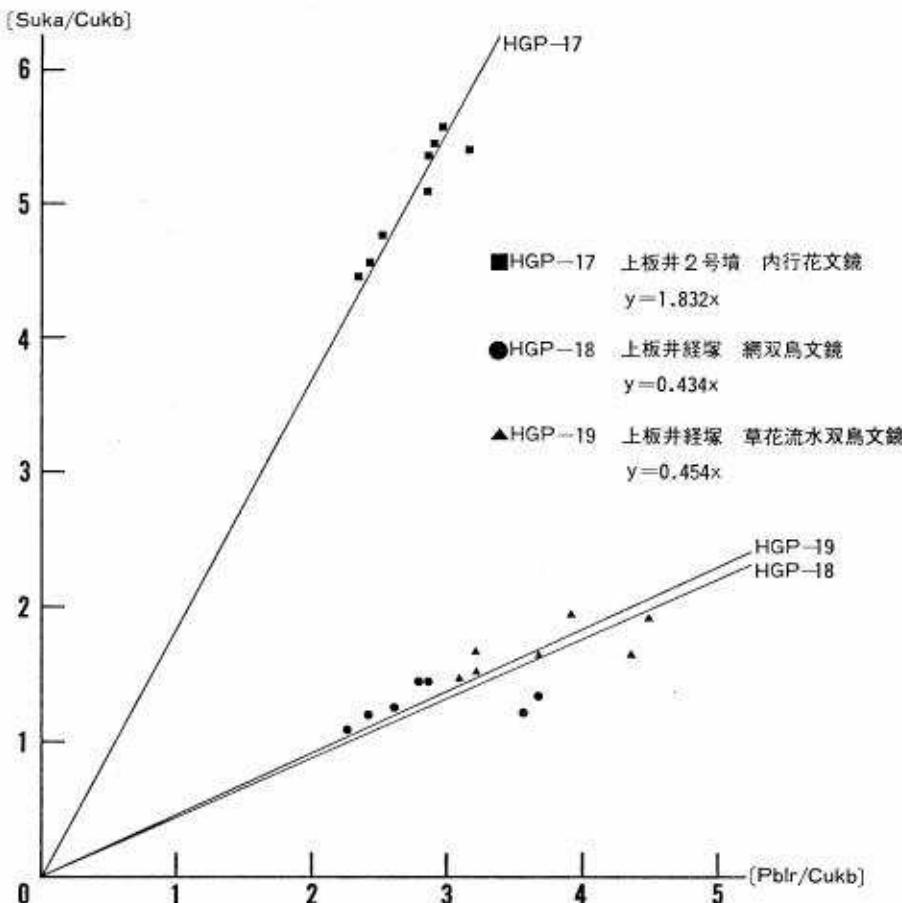
まとめ

今回は、保存処理の事前調査として材質の調査を行ったもので、その中から考古学研究に役立つ情報として若干の結果と考察を加えたものである。

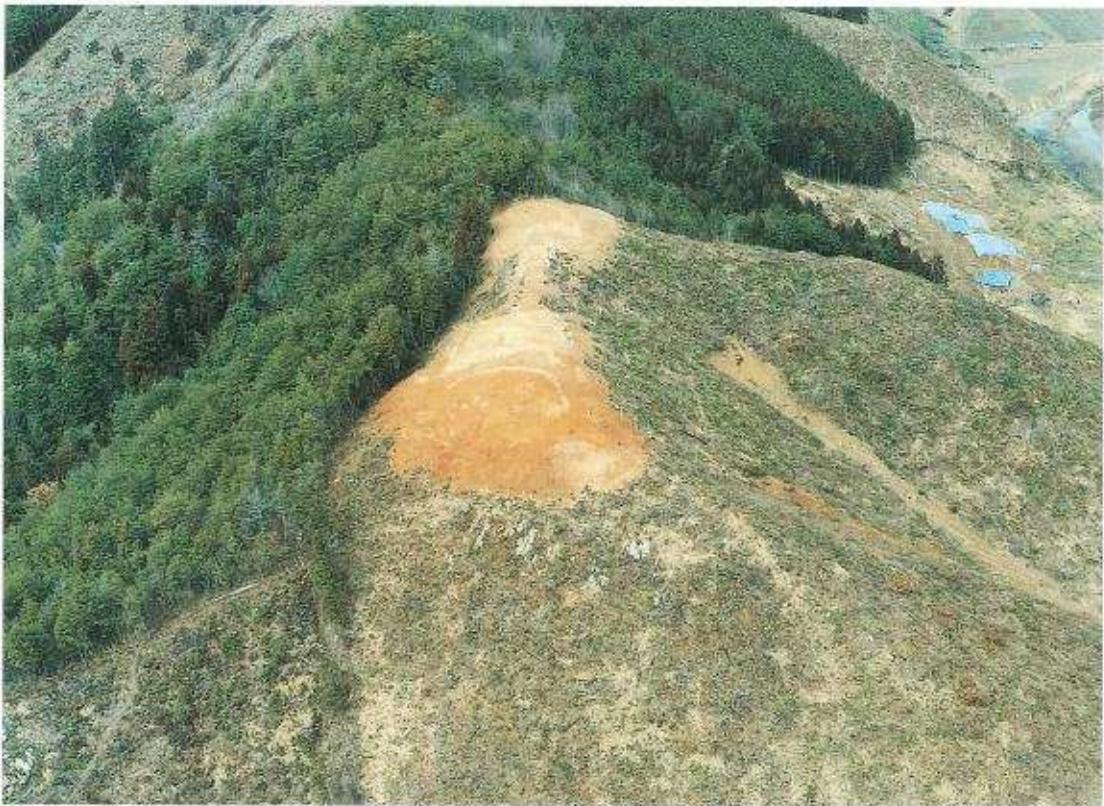
分析した和鏡3面は、いずれも錫が少く鉛が多いタイプに属する事がわかったが、これは従来行ってきた和鏡の分析結果ともよく似た傾向を示している。もちろん和鏡の中にも錫の含有量の多いものも存在する。これら材質の違いが、産地や原料を反映していると思われるが分析試料数が少いため現在のところこれらの諸問題を解決するに至らない。

註 沢田正昭「銅鏡にみられるサビの構造と組成」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』

特定研究「古文化財」 1984



第35図 螢光X線分析による錫／鉛相対含有量の比較



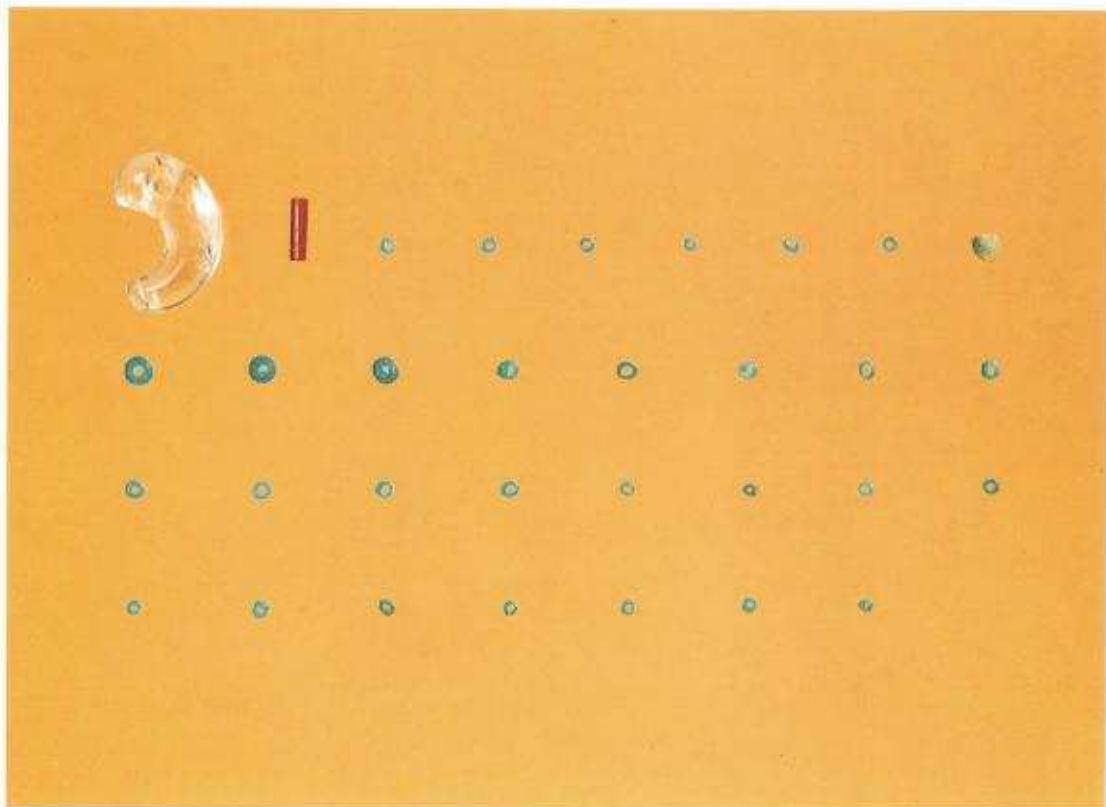
1. 古墳群遠景（航空撮影）一南より



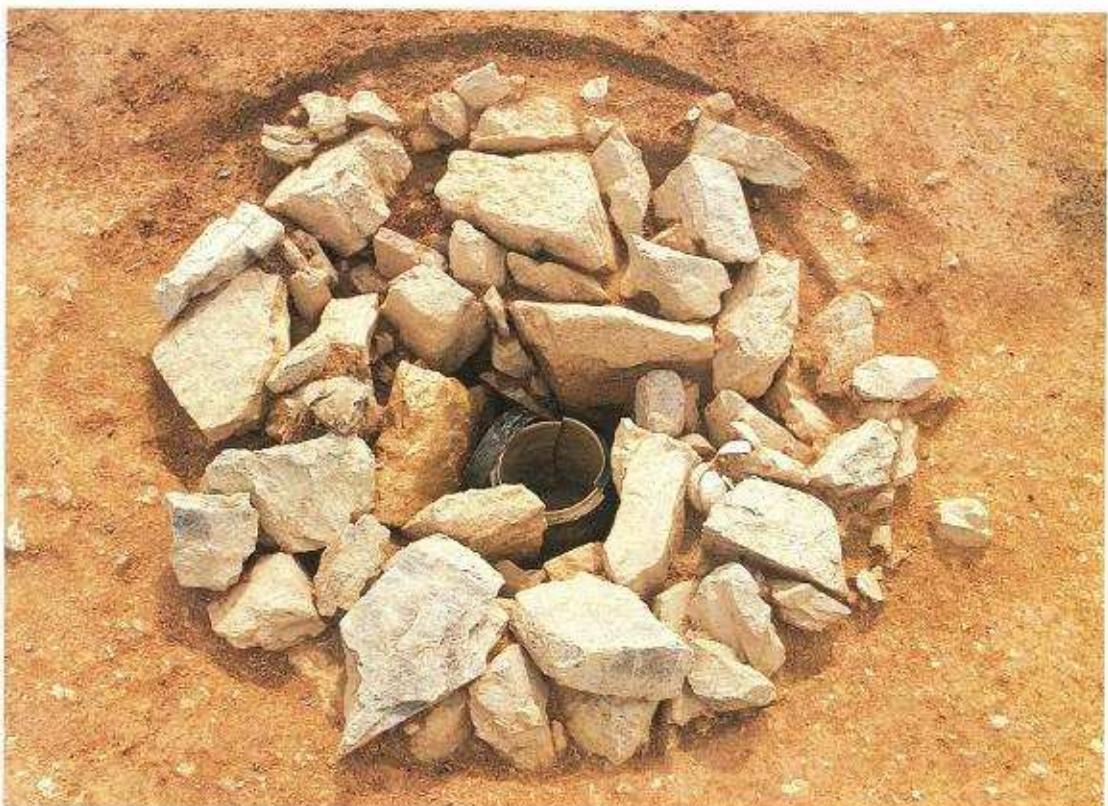
2. 古墳群遠景（航空撮影）一東より



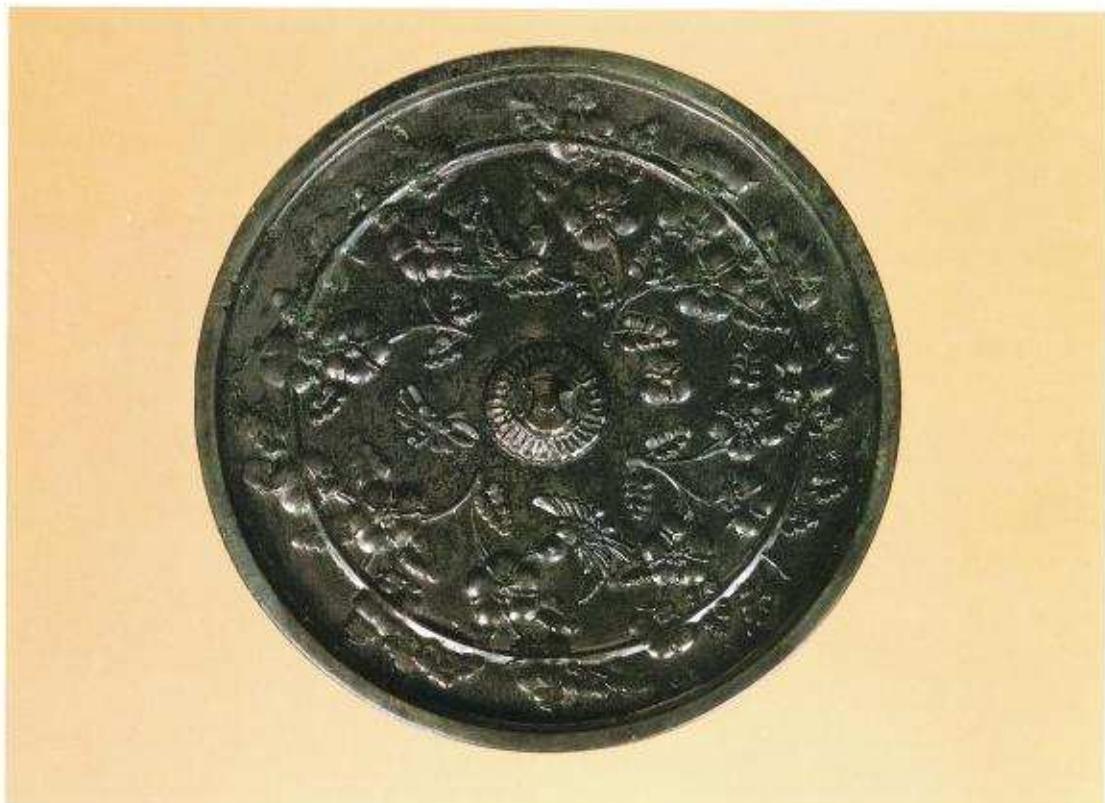
1. 内行花纹鏡（2号墳出土）



2. 玉類（2号墳出土）



1. 経塚一北より



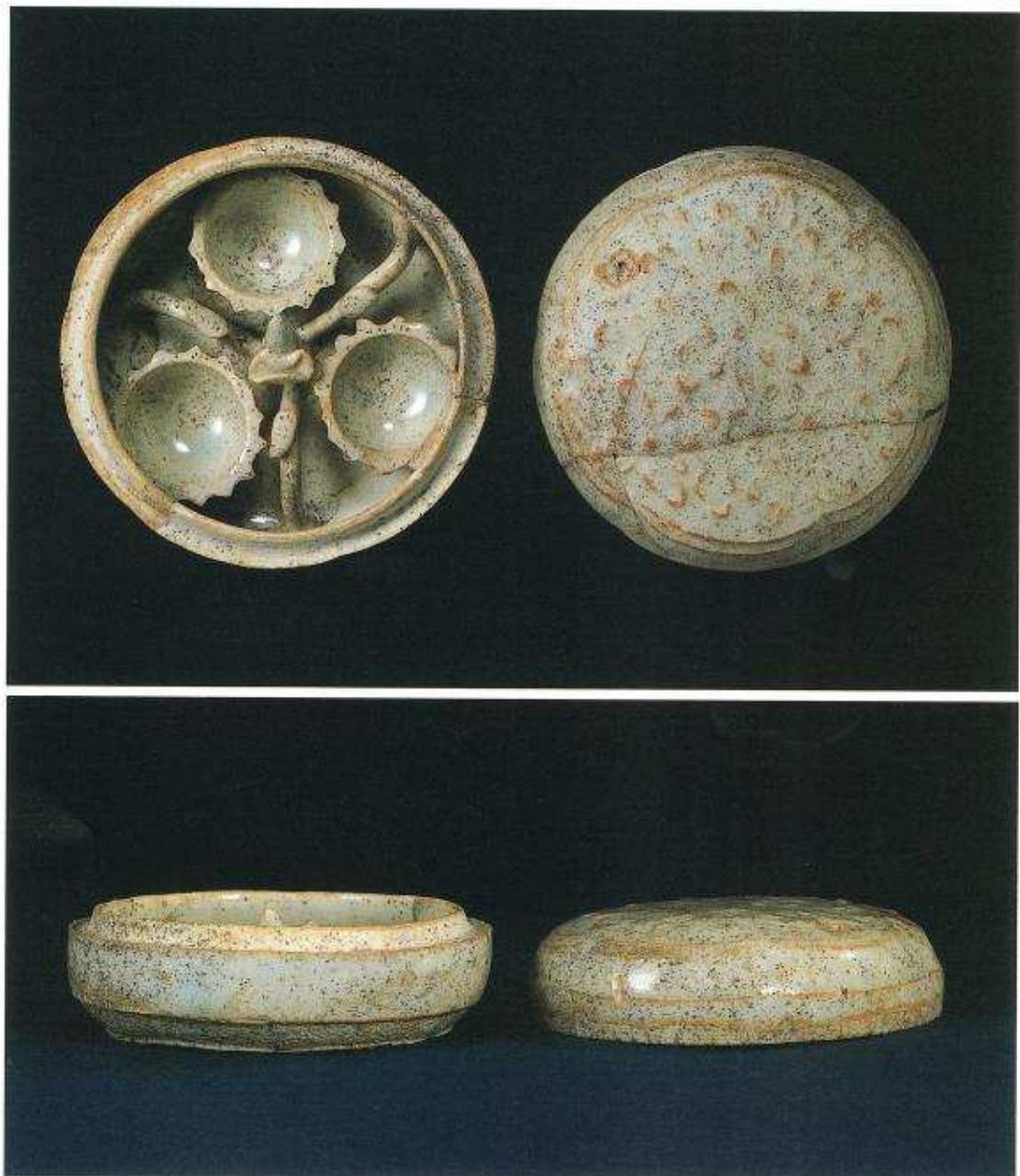
2. 山吹蝶鳥文鏡（経塚出土）



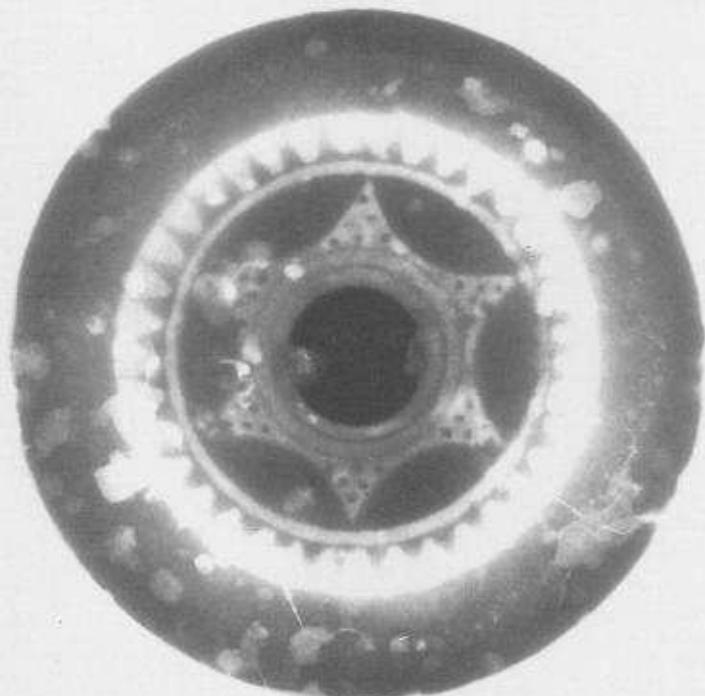
1. 草花流水双鳥文鏡（経塚出土）



2. 網双鳥文鏡（経塚出土）



青白磁合子（経塚出土）



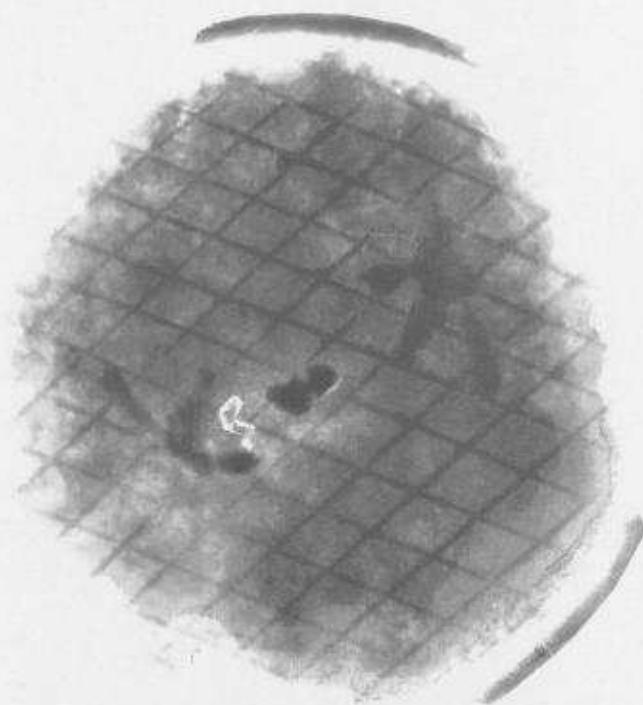
1. 内行花文鏡（2号墳出土）



2. 山吹蝶鳥文鏡（経塚出土）



1. 草花流水双鳥文鏡（経塚出土）



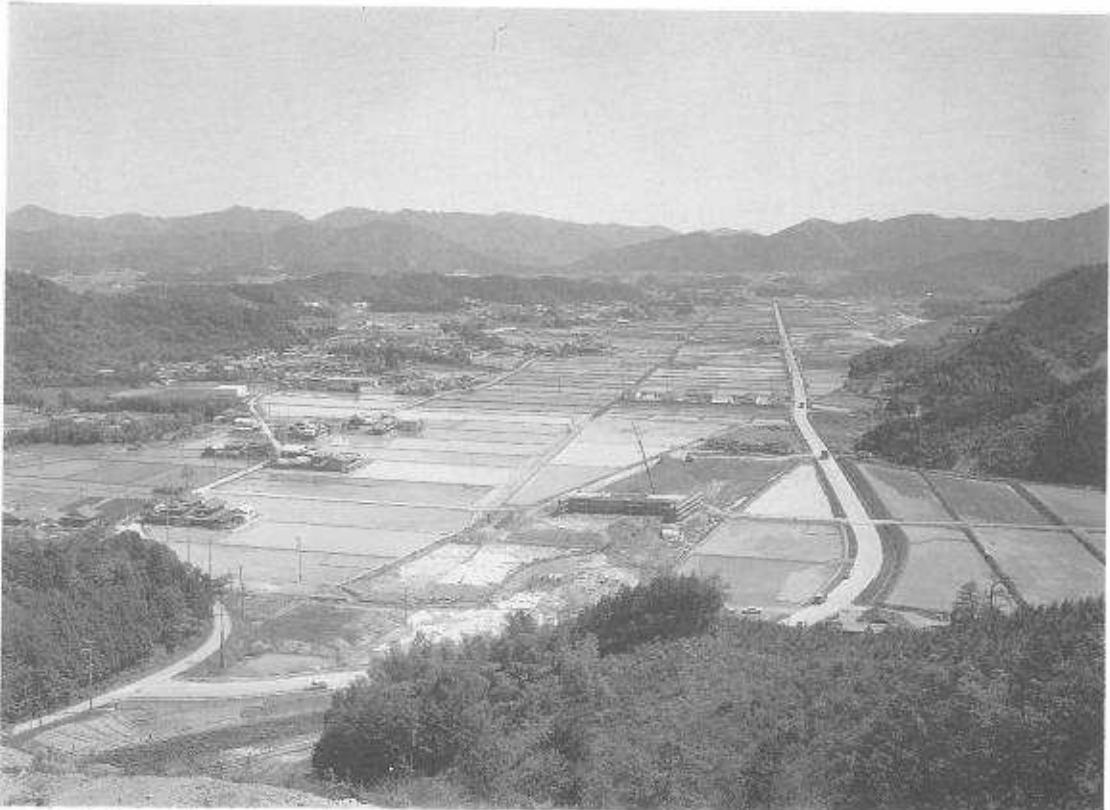
2. 網双鳥文鏡（経塚出土）



1. 古墳群遠景一南より



2. 古墳群遠景一東より



1. 1号墳より宮田・大山を望む



2. 1号墳より栗柄峠を望む



1. 1号墳より佐仲峰を望む



2. 古墳群全景（航空撮影）



1. 1号墳全景（調査前）一北より



2. 1号墳全景（調査後）一北より



1. 墳丘掘割土層断面—北西より



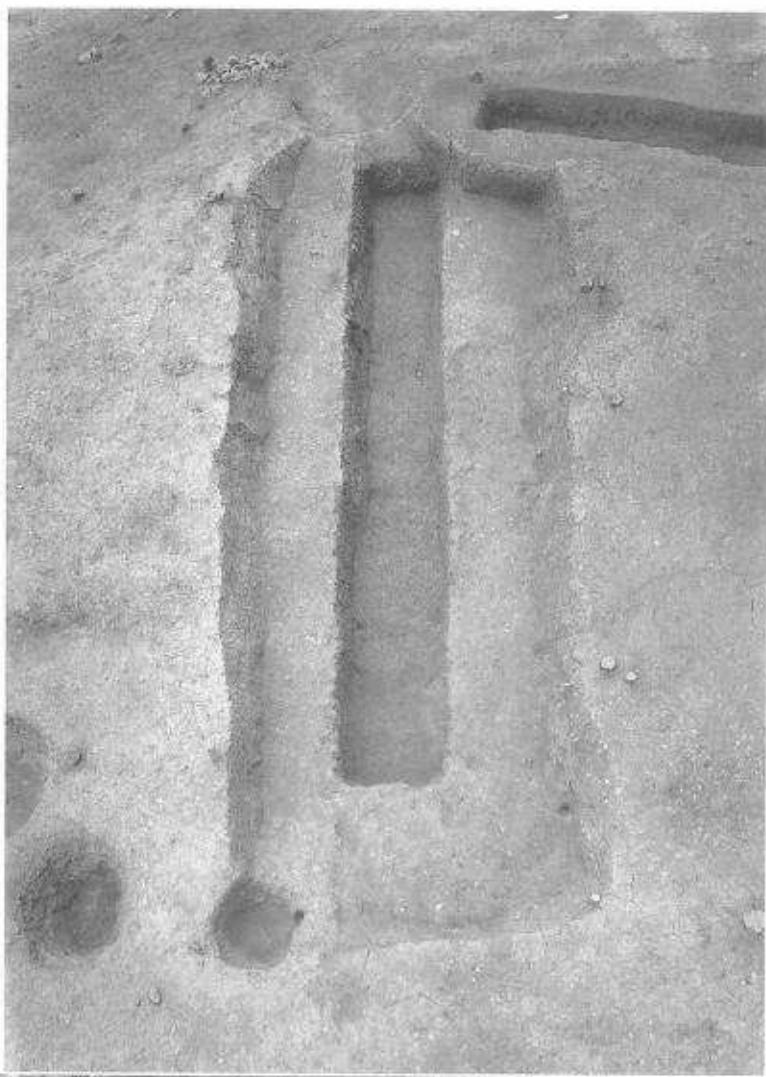
2. 同上部分葺石断面—北西より



1. 莢石一北西より



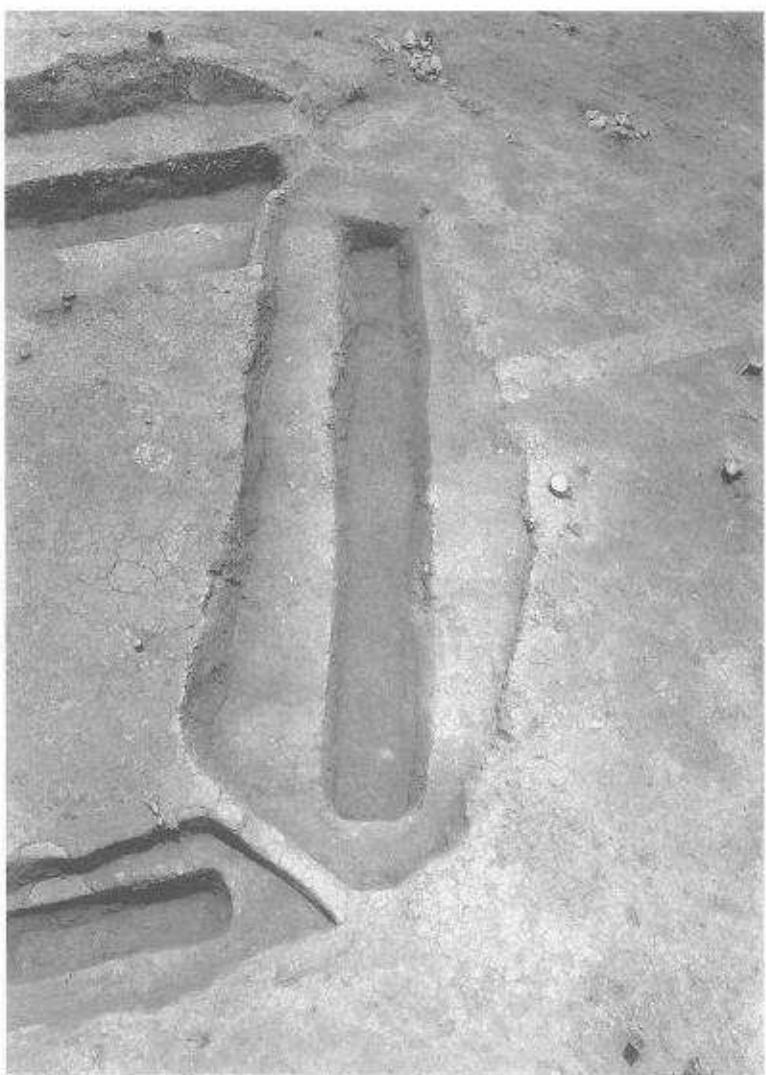
2. 莢石と掘割一北東より



1. 1号主体部一東より



2. 同上鐵器出土状況一北より



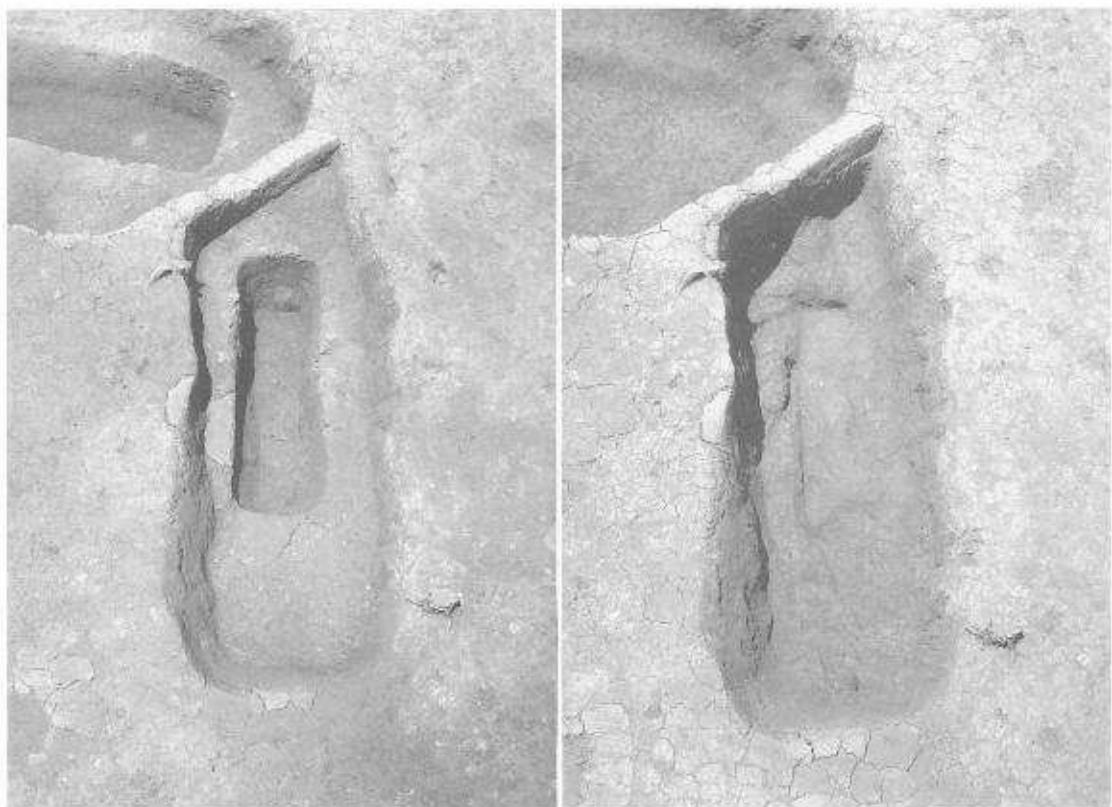
1. 2号主体部—北より



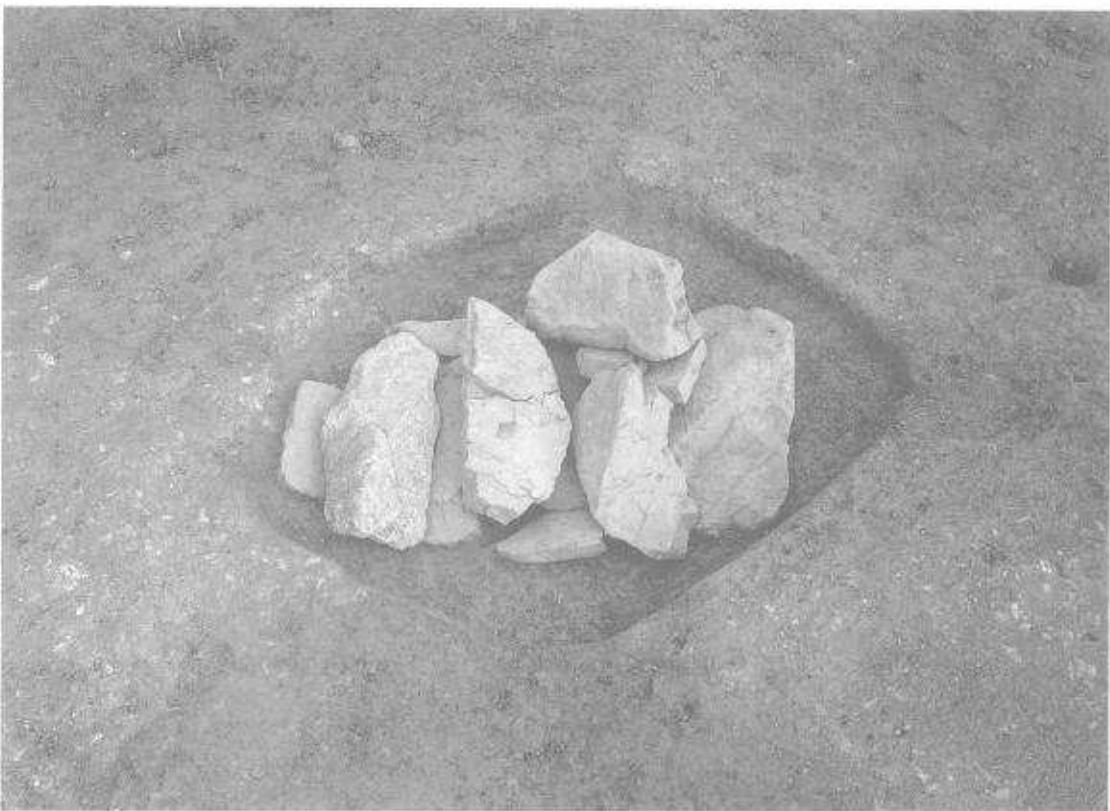
2. 同上鐵器出土状況—東より



1. 左 1号主体部墓壙一東より、右 2号主体部墓壙一北より



2. 左 3号主体部一東より、右 同墓壙一東より



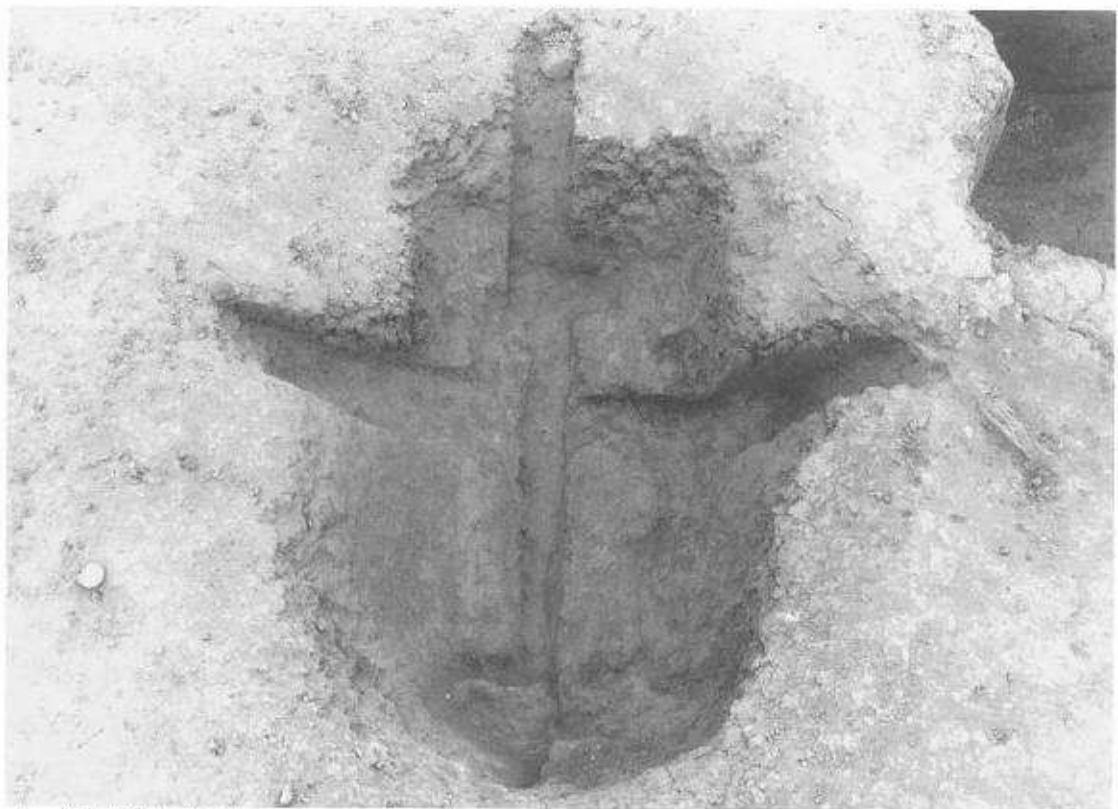
1. 4号主体部検出状況一西より



2. 同上（蓋石一部除去後）一南より



1. 4号主体部—南より



2. 同上墓壙—南より



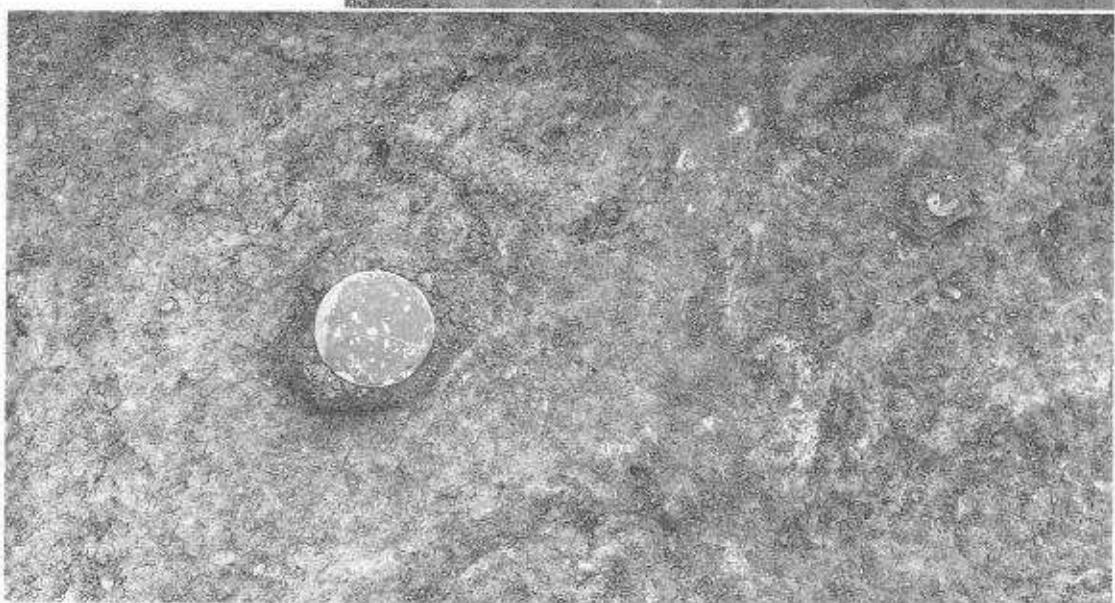
1. 2号墳全景（調査前）—南より



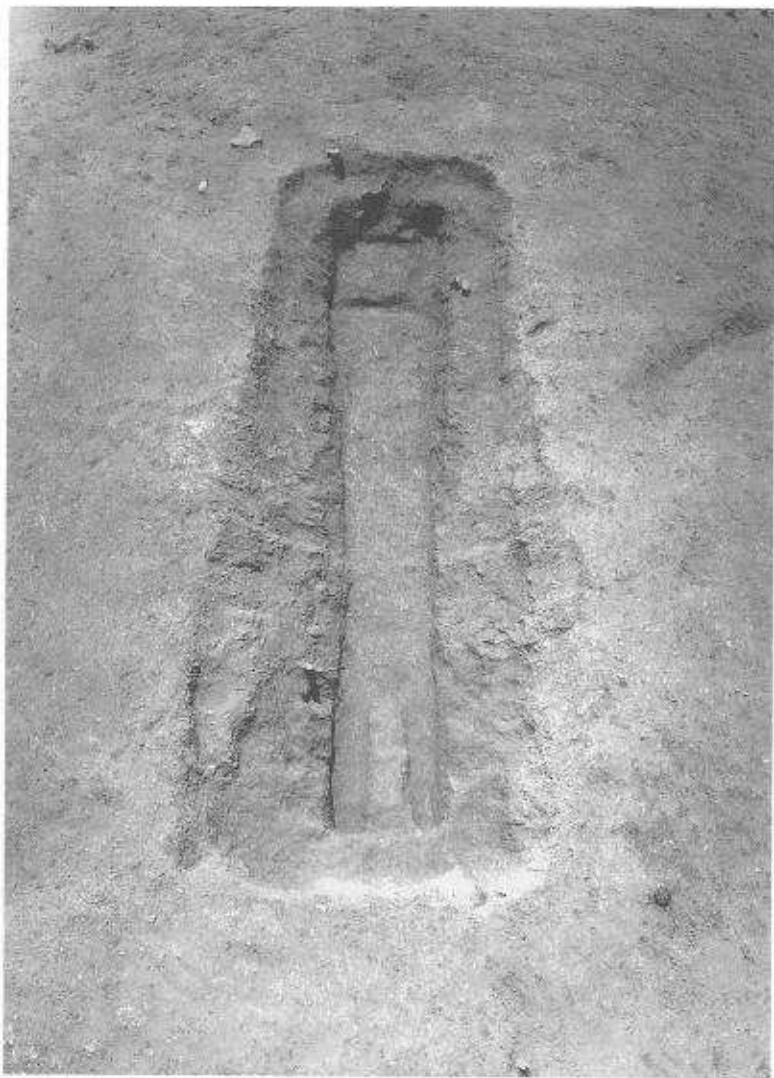
2. 2号墳全景（調査後）—南より



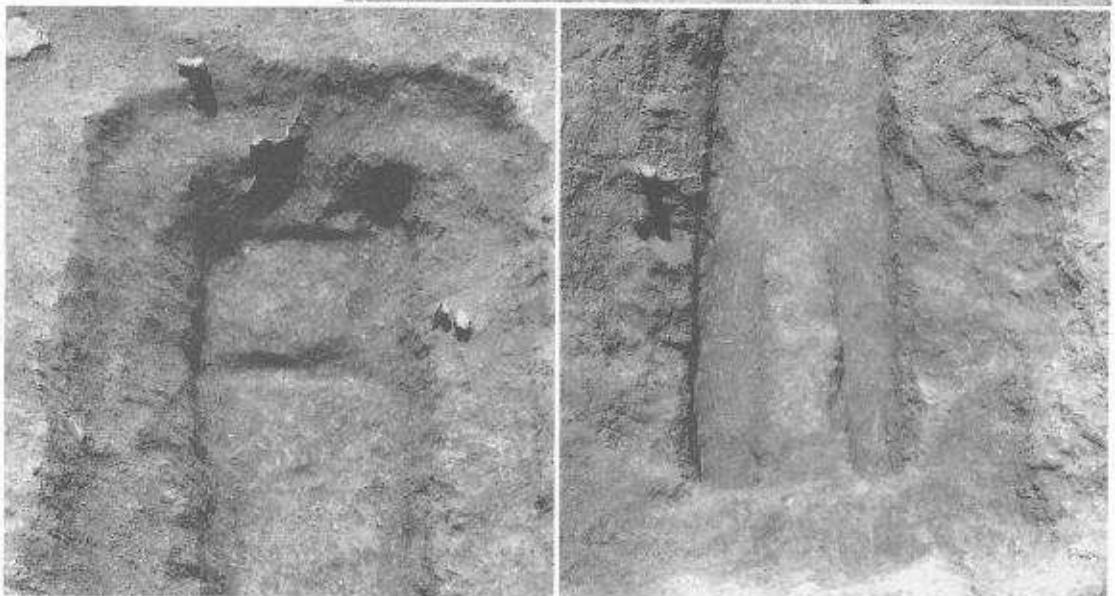
1. 主体部一南より



2. 同上内行花文鏡・玉類出土状況一東より



1. 主体部墓壇一南より



2. 同上部分拡大



1. 経塚と3・4・5号中世墓—北東より



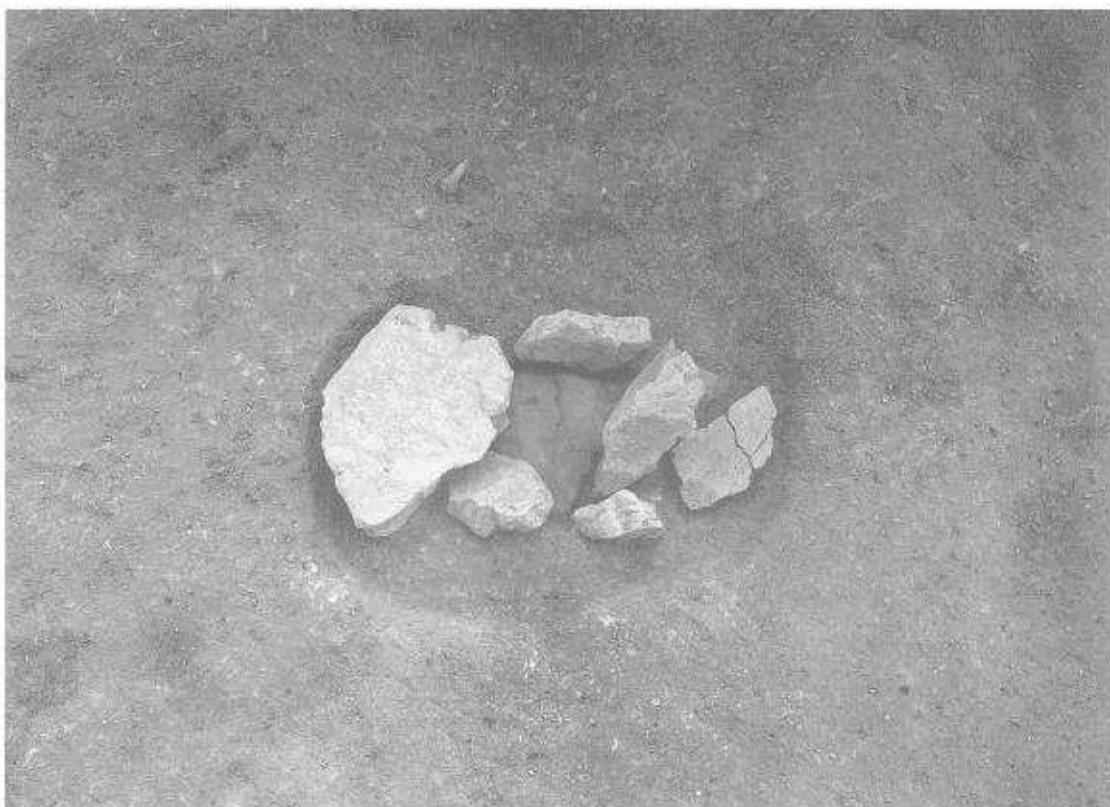
2. 経塚—南より



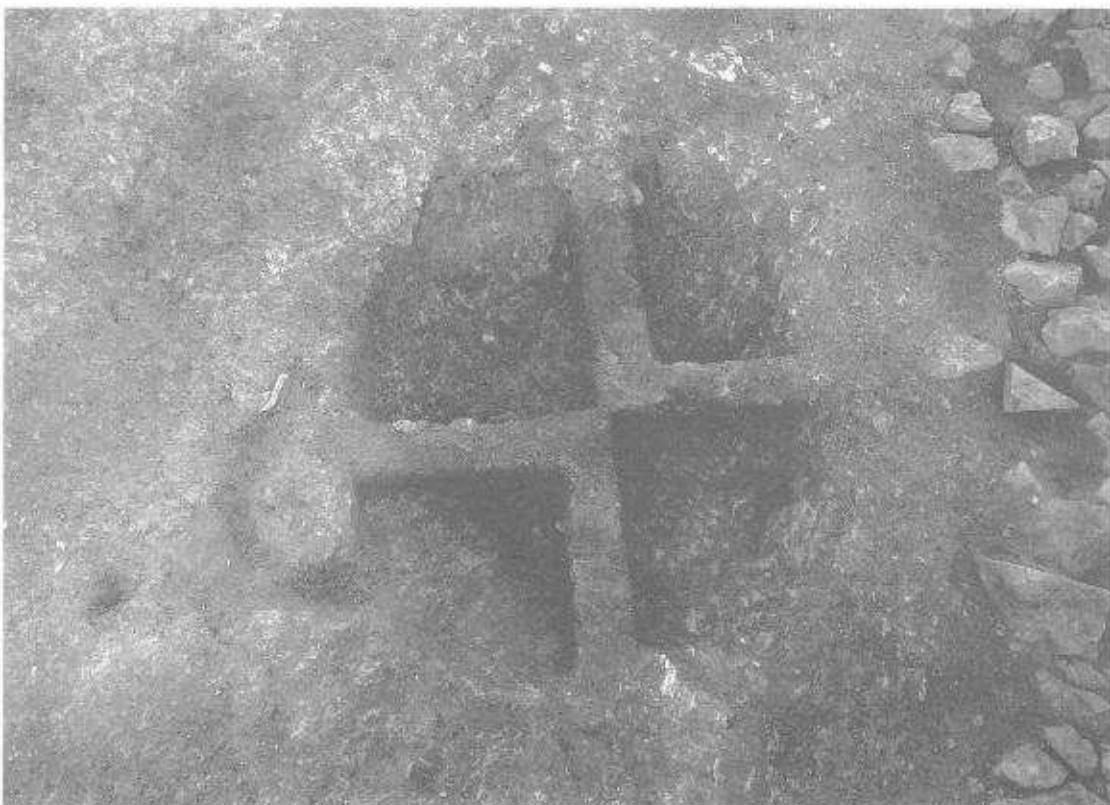
1. 須恵質外筒・青白磁合子出土状況一北より



2. 和鏡・刀子出土状況一東より



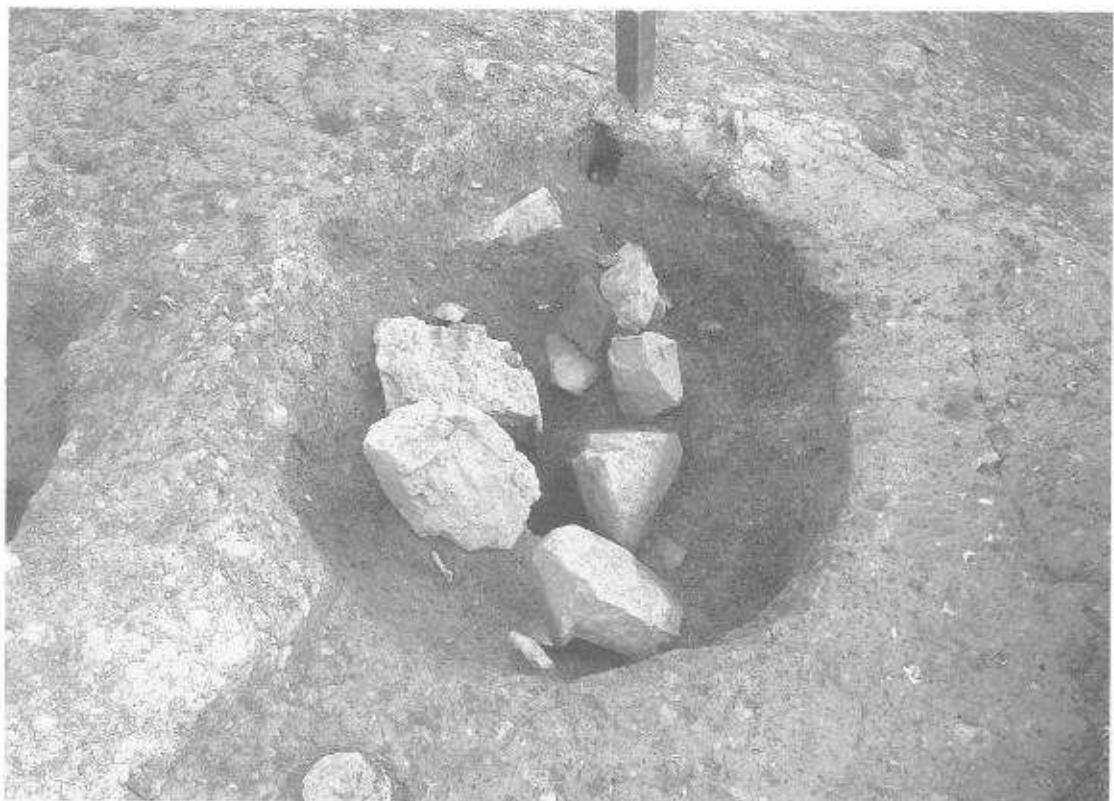
1. 1号中世墓一東より



2. 2号中世墓一東より



1. 3号中世墓—北より



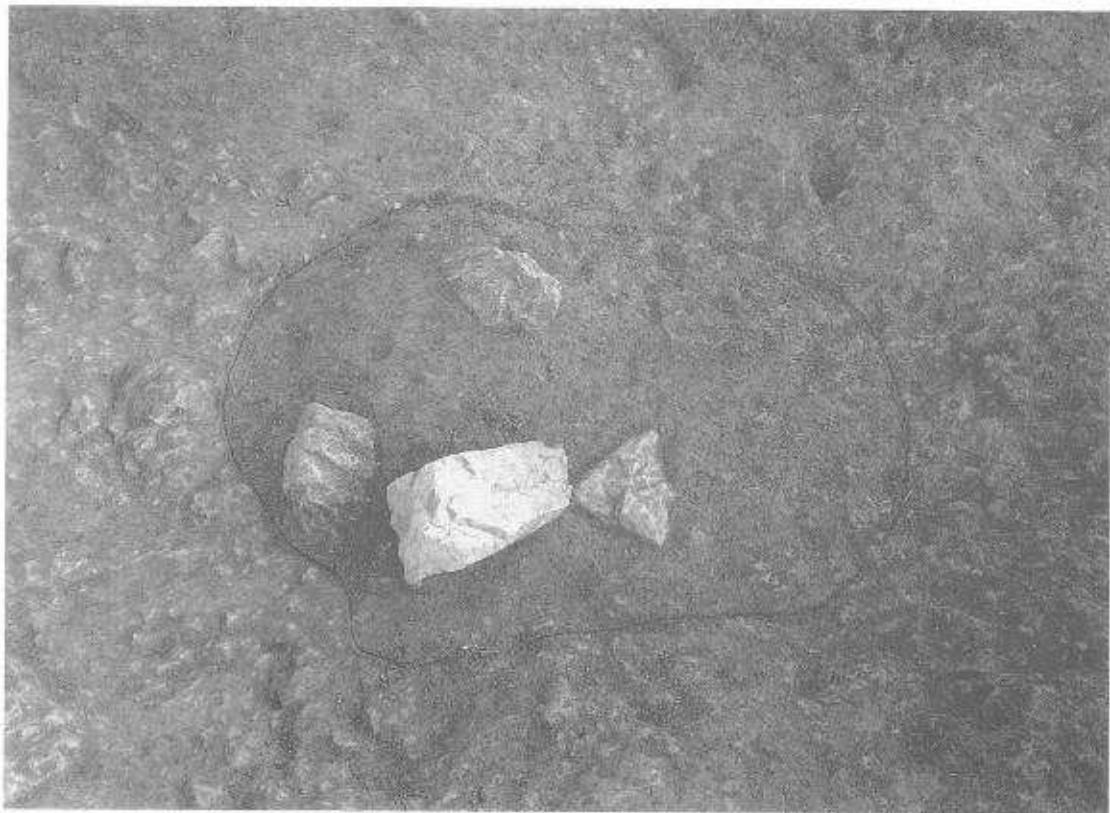
2. 5号中世墓—北より



1. 4号中世墓検出状況—北より



2. 4号中世墓—北より



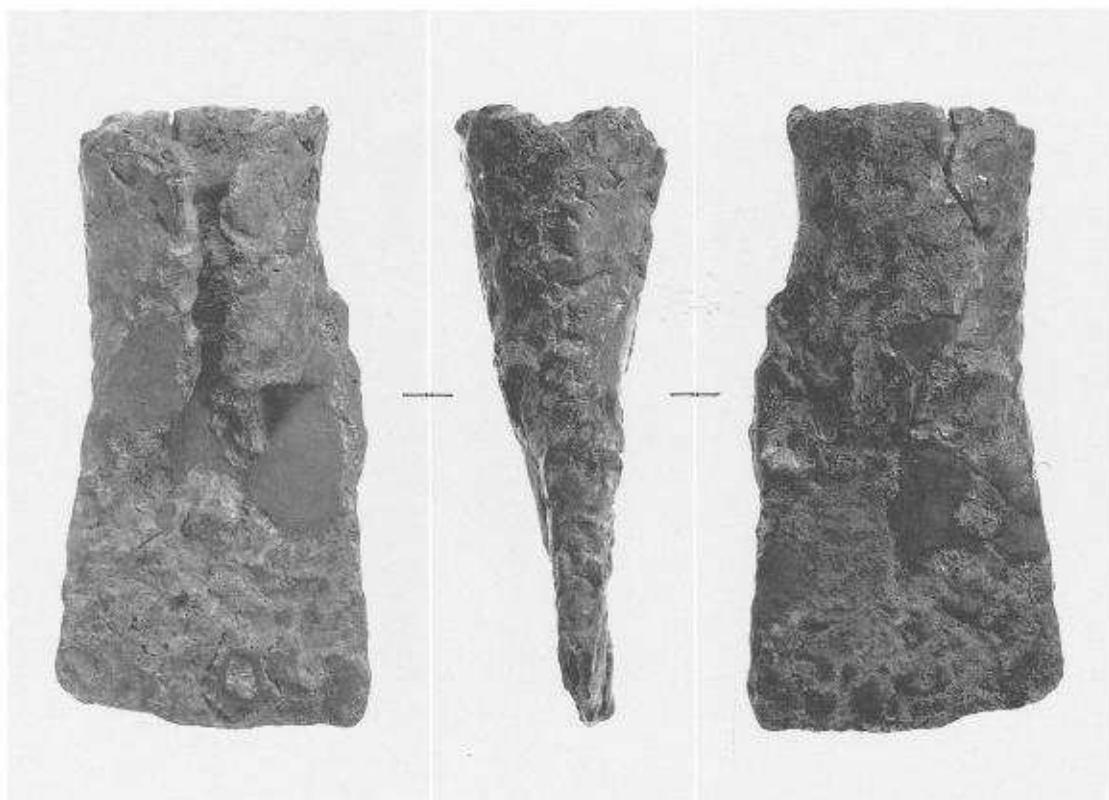
1. 7号中世墓検出状況—北より



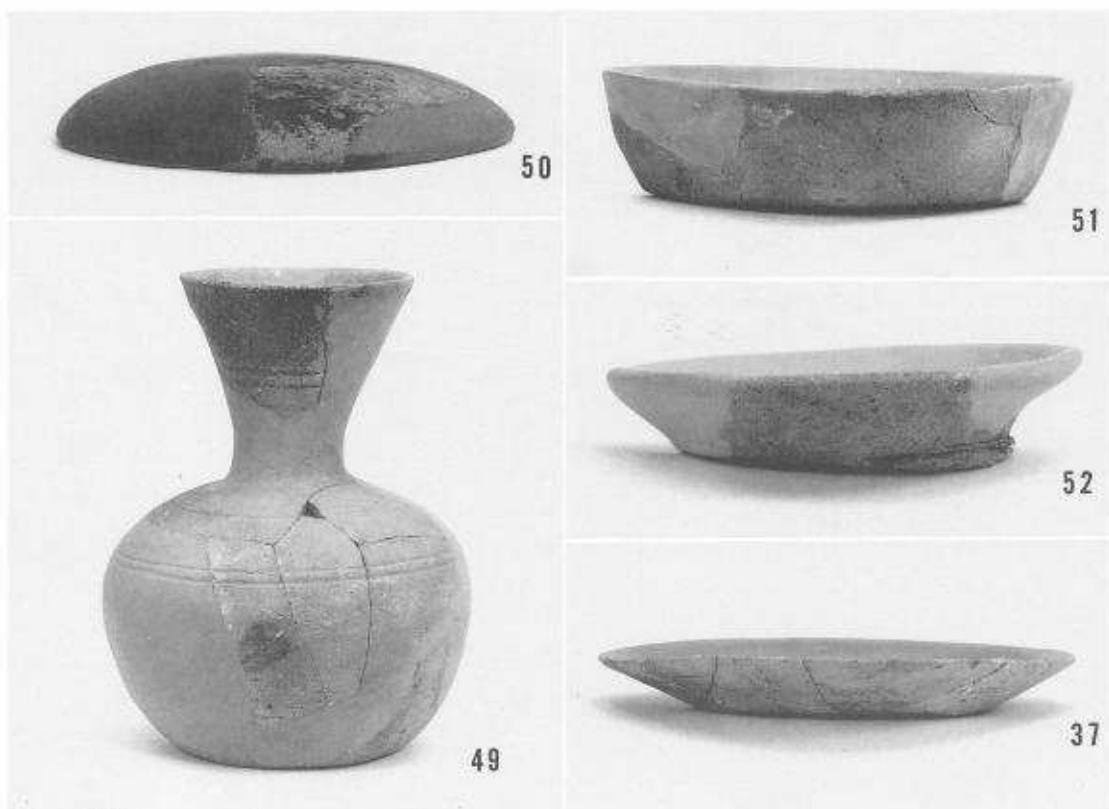
2. 7号中世墓—東より



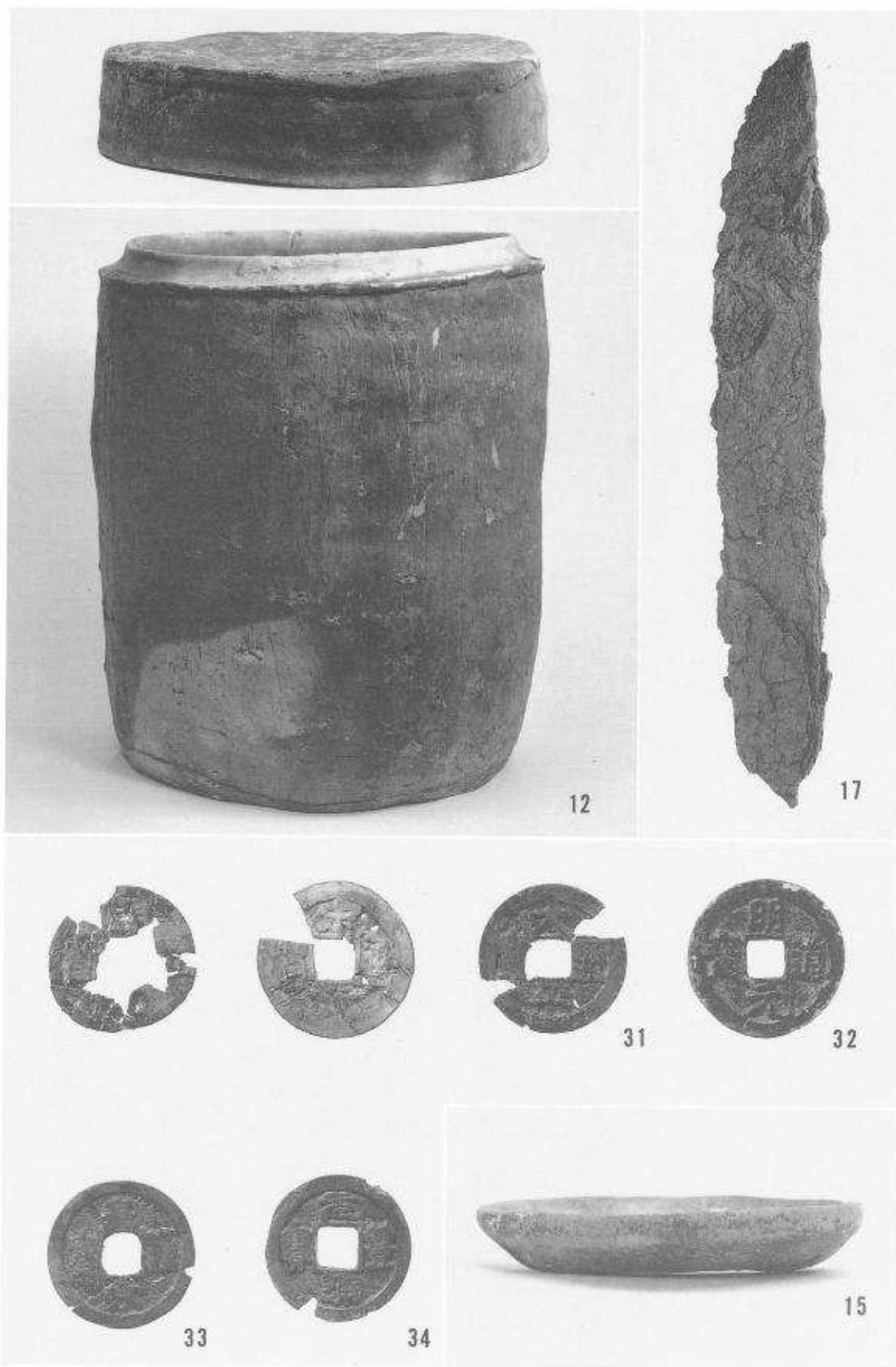
鐵器 (1~3 1号墳1号主体部、4~8 1号墳2号主体部、9 2号墳主体部)



1. 铁斧（1号墳1号主体部）

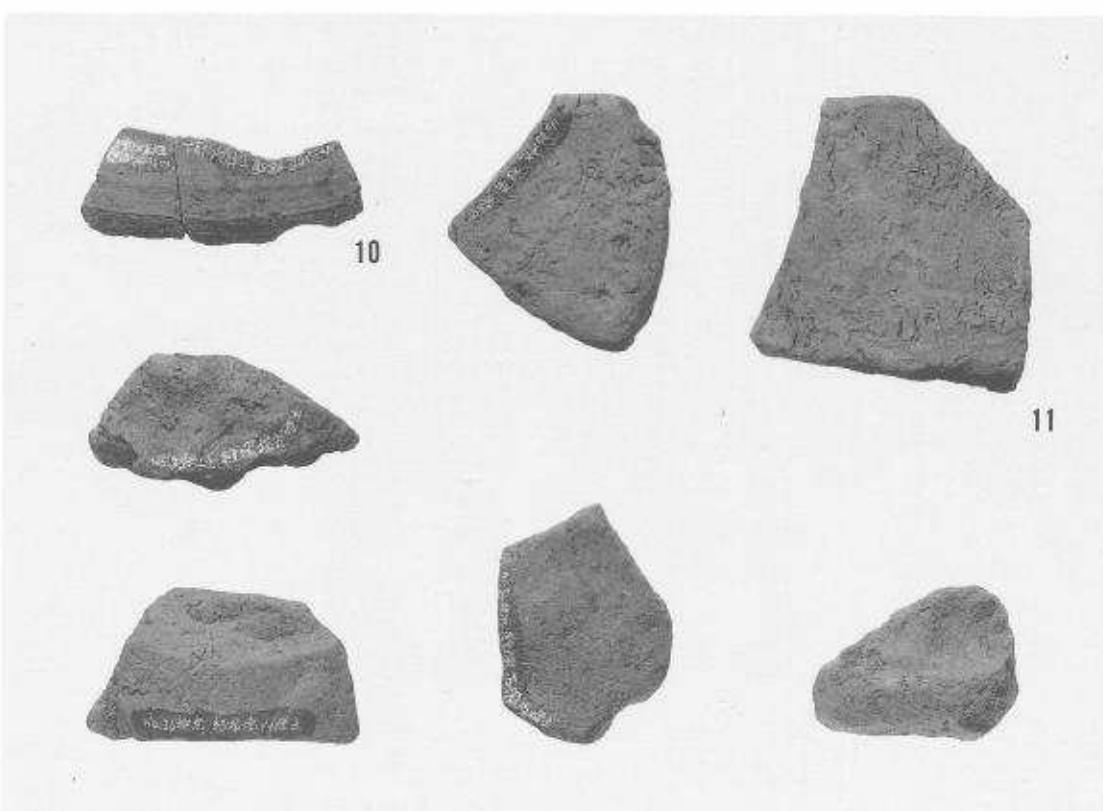


2. 土器（49~52 表土、37 2号中世墓）

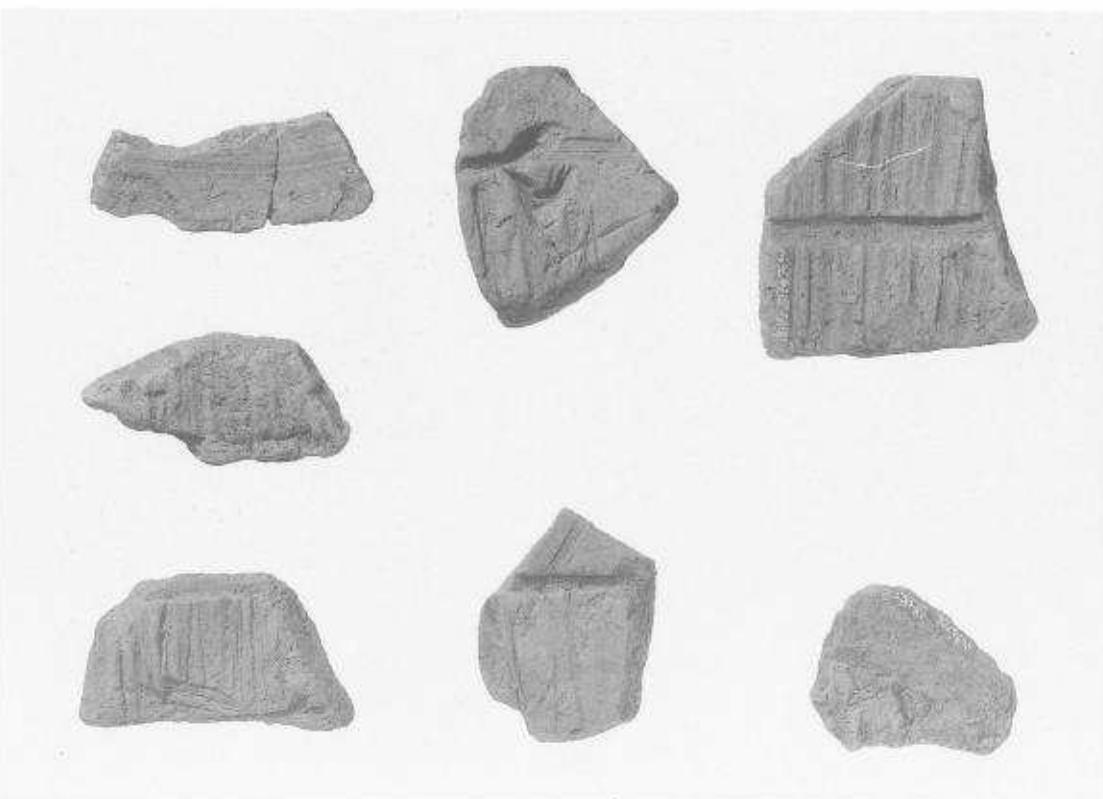


12 須恵質外筒、15 須恵器小皿、17 鉄刀子、錢貨（経塚）

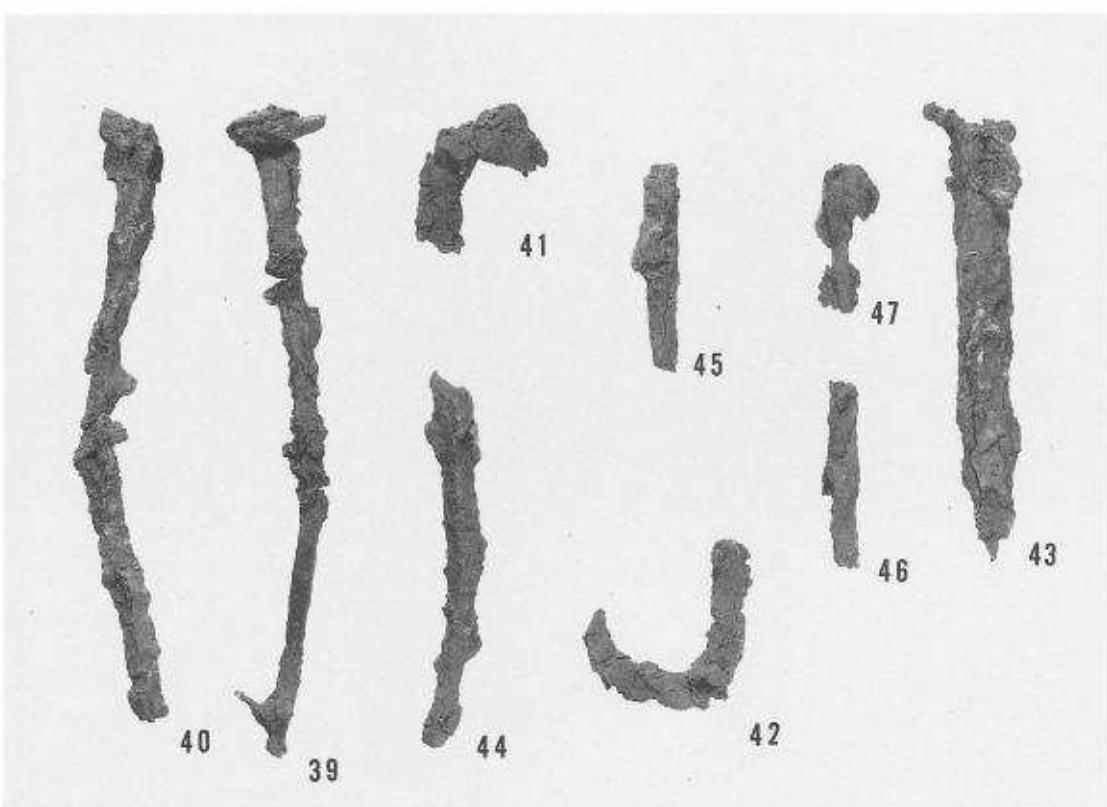
図版二六 出土遺物



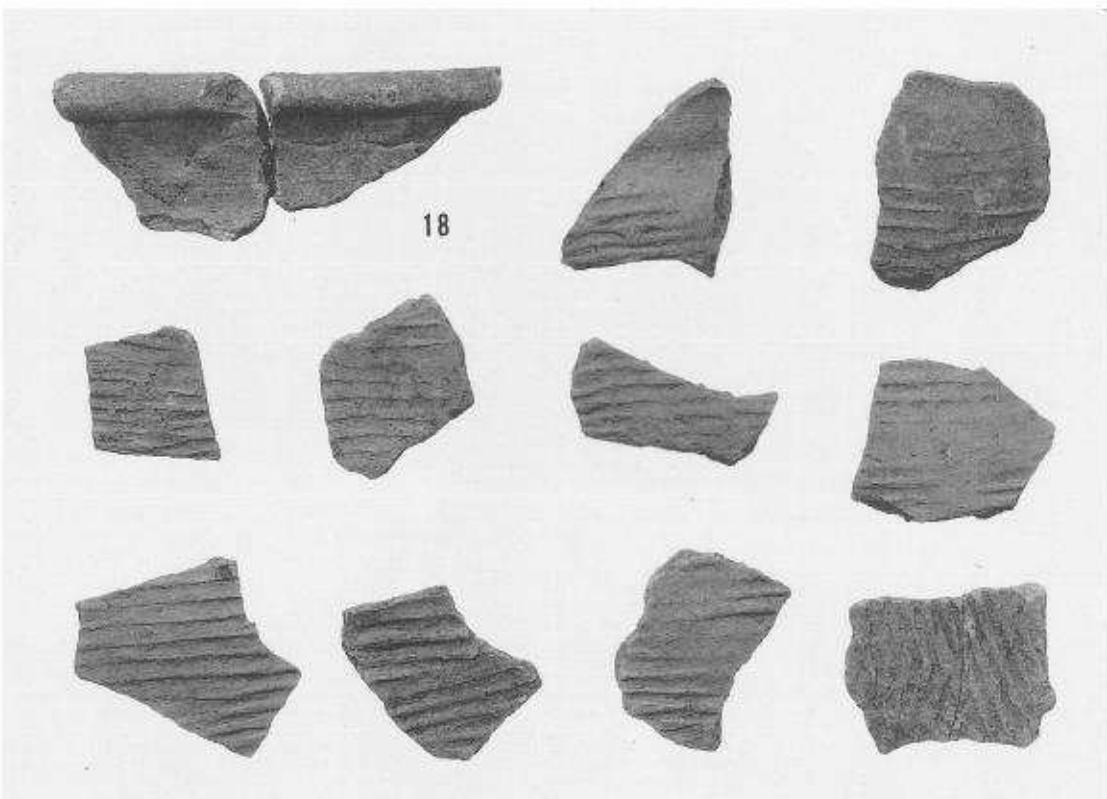
経筒・表(経塚)



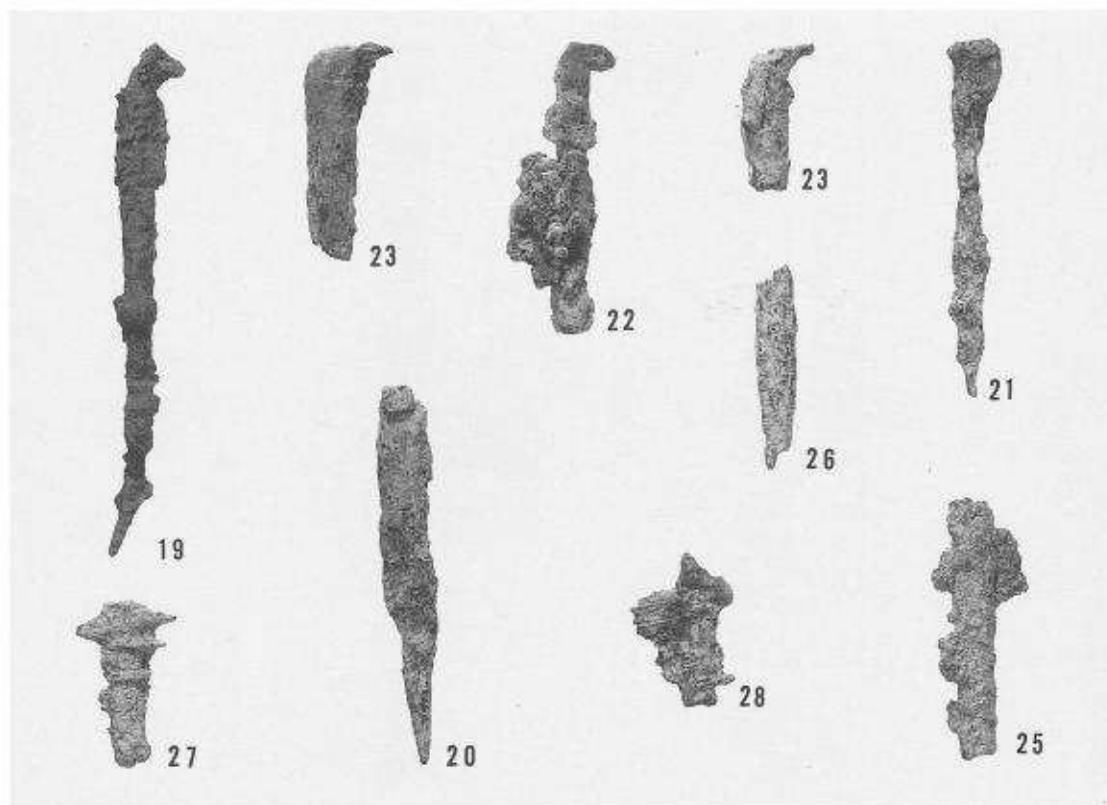
経筒・裏(経塚)



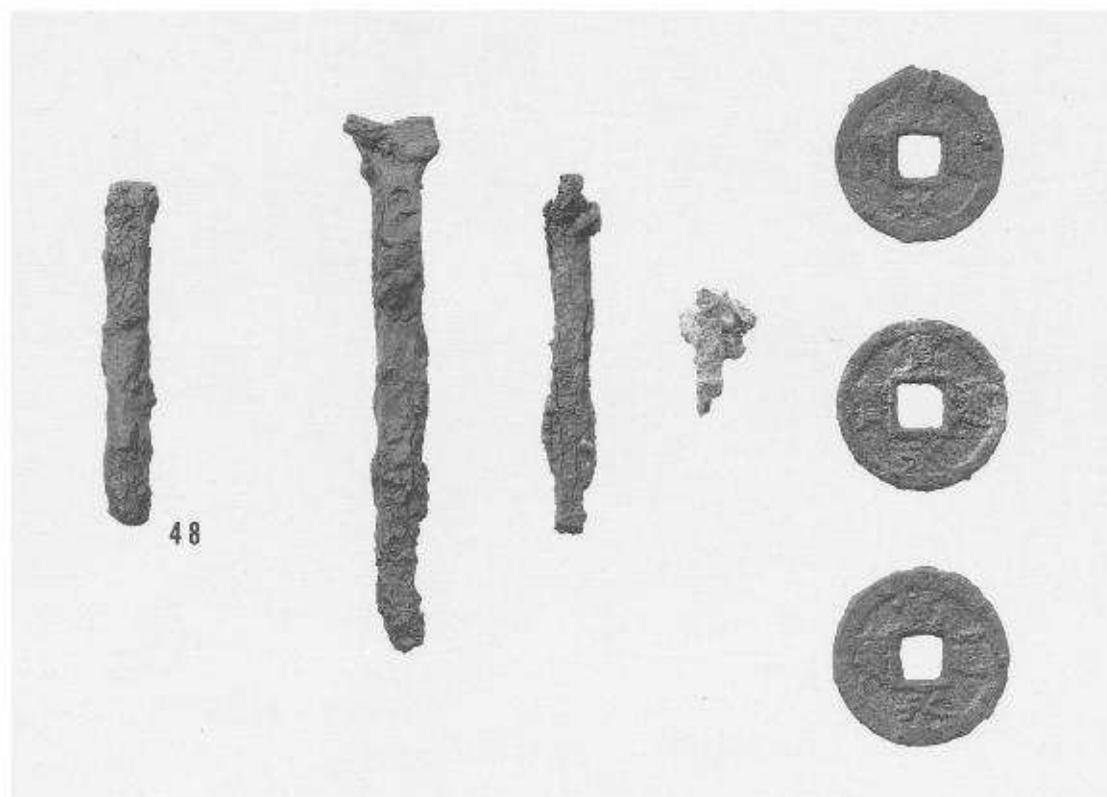
1. 鉄釘（経塚）



2. 土師器壙（経塚）



1. 鉄釘（7号中世墓）



2. 鉄釘・寛永通宝（48号中世墓、その他 表土）

兵庫県文化財調査報告書 第34冊

上板井古墳群

近畿自動道舞鶴線関係

埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)

昭和61年3月25日印刷

昭和61年3月31日発行

編集発行 兵庫県教育委員会

神戸市中央区下山手通5丁目10-1

TEL 650-7650 神戸(078)341-7711

印刷 前田印刷工業所